

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2013年  
1月号  
No. 595

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



新年の花 〔表紙の花〕 櫻子

お正月の準備のため、暮れに花を買い求めるのだが、明るい色の花がなくて苦勞することが多い。

赤い実は南天か千両なので決まったスタイルになつてしまう。今年うめもどきは梅擬が遅くまで残つてくれていて有難かつた。

梅擬の艶やかで真っ赤な色は見ているだけでも元気になる。

小さな葉を取る作業が大変で手間をかけて出荷されるが、小枝までたっぷりの実をつけて豊かな実りを感じる。粒の大きな大納言という品種をいけているが、良く日持ちする。

水仙、松、椿は緑の葉の色合いがそれぞれに違うので三種取り合わせても清々しい。梅擬の赤色に「富春杯」(この器の色)の朱が綺麗に調和している。

お土産に頂いたルーミア製の刺繍の敷物が素朴で優しい。



### 金彩花器

櫻子

柳原睦夫さんの花器の底は、ピンクと黄色の雲のような構図の中に金彩を走らせてある。その金が手付となって花器の縁にも現れる。

柳原さんの花器は外側、内側、底にも彩色してあって、どの器も情熱的で個性が強い。花をいける時はかなり緊張して花選びから良く考えねばならない。生け手の事などはあまり考えずに作陶されているのだろう。とてもいけにくい器が多い。

しかし一度でも花が上手くいけたらなら、この花器の魅力にとり憑かれてしまう。父も母も仙溪も私も。

花材 カラー(ポットチコレート)

スイートピー シクラメン



同じとし頃？

△10頁の花▽ 桜子

洋蘭はとても多くの種類がある。

世界中に蘭は3万から3万5千種あると言われている中で人の手によって改良された交配種も沢山作られている。

アマリリスと取り合わせた蘭は、オンシジウム・ワイルドキャットで学名はコルナマラ・ワイルドキャットという。

コルナマラ属はミルトニア属×オドントグロッサム属×オンシジウム属との属間交配によって生まれた新しい属。1963年に登録されたという事は同じ年くらいの蘭なのかも。長い歴史を持つ蘭の栽培ではニューフェイス！

人の手によって作られた蘭はこれからも沢山お目にかかるだろう。

アランダやモカラもお稽古でもいける事が多い蘭だが、同じく原産地を知らない。

花材 アマリリス

オンシジウム・ワイルド

キャット

アンズリウム・コーヒー

カップ ミリオクラダス



なごり雪 へ11頁の花▽ 櫻子

胡蝶蘭はラン科ファレノプシス属で原産地は東南アジアを中心にインド、台湾、オーストラリア北部などに広がる。

今でも自生地では高い樹木や岩の上にしつかりと根を張り着生する蘭で仲間のオンシジウムやバンダ、デンドロビウムも野生では過酷な環境であっても人の手など一切必要とせず毎年時期がくれば自然に開花する。

そんな高貴な花は育てるのは難しい。花を咲かせるのは困難だとわかっているのに、毎年新種が出ると驚きで魅入ってしまう。

「なごり雪」は花の大きさが3cmほどの小さな胡蝶蘭だ。寒さに強いのでこの名前になったとの事。

大好きだった歌と同じ名前で、早速赤いワイングラスに葉牡丹といけて新年の食卓に飾った。

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2013年  
2月号  
No. 596

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 似たもの同士で

△表紙の花▽ 櫻子

毎年飾らせて頂く**晩白柚**<sup>ばんぱいゆう</sup>。ザボンの仲間だが、大きいものは5kgほどあり重さも世界一らしい。厚い皮に包まれているので中身の果肉もいつまでも瑞々しいし、長く鑑賞しても最後まで美味しくいただける。熊本・八代市から届いた本当に有り難い果物。一月に干支の置物と**晩白柚**を飾り静かに新年を迎えさせて頂いた。

このテキストには**ポピー**と**青麦**、**蜜柑**を取り合わせた。みんな真ん丸で可愛いらしい。早春の彩りと香り。同じ部屋なのに、急にはっと明るくなった。

花材 **晩白柚** (蜜柑科)

**蜜柑** (蜜柑科)

**ポピー** (罌粟科)

**青麦** (稲科)

花器 **長方形陶水盤**

# 桑原 櫻子

桑原専慶流副家元



紅葉も散り果て、花も枯れる冬。  
 そんな季節であればこそ、  
 草木は健気な営みを見せる。  
 華道家であり、料理研究家でもある  
 「いけばな 桑原専慶流」の副家元 桑原櫻子さんに  
 冬の京都の魅力についてうかがいました。

## 明日のために日々「備え」を続ける自然。 その営みに気づくことも、いけばなの魅力。

〇くわはら・さくらこ=1960年京都府生まれ。両親は華道家専慶流の14世家元夫妻。祖父にいけばなの伝承を受け、21歳で副家元を襲名し、古典いけばなの生花、立花を今に伝える。国内外で魅力的に活動。京都の家庭料理に関する著作やテレビ番組出演などでも知られる。

ところで、華道の副家元としてだけでなく、料理と花のサロン“チェリー・キッチン”を主宰する櫻子さんは料理研究家の顔も併せ持つ。

「花と同じように、貴重な自然の恵みを調理する時は、その素材の生い立ちを考えて、季節感のない食材やインスタント食品などはなるべく細み合わさないように心がけています。華道家として花の命を生かすことと料理研究家として素材の味(命)を生かすことはまったく同じ」と言う。

人をもてなす花や料理の専門家である櫻子さんは、花や野菜などの素材だけでなく、その優しいまなざしを人にも注ぎ、京言葉で言う“はんなり、(花のある)人柄とも相まって、心むむ魅力的な京女である。

### 冬の自然が教えてくれる 花の生け方

6歳からいけばなを始め、自然の命を尊ぶ家風を身につけた櫻子さんにとって、すべてが寂び枯れていく冬という季節はどのように映るのだろうか。

「華道家にとって冬は、とても勉強になる季節なんです。花も葉も落ち、幹と枝だけになった木はいわば、その木本来の姿。どのように枝を広げているのかがよく見える季節です。私どもの流派の生花も、じっと自然を観察して出来た型なのです。その意味で、松や銀杏、緋梅、梅や桜も風格ある大木の多い「京都御苑」は私の勉強場所。ああ、こういうふうに生けるの

ね、って感じですよ」と櫻子さんは言う。冬の御所に落ちている松ぼっくりや黄金色の銀杏の葉を「頂戴するのも楽しみ」と笑う。

「ほかには、嵐山の渡月橋から見ると大堰川、三条大橋から鴨川の向こうに望む北山など、大きな風景を見るのも好き」だとも。

「わが家の庭をよく観察していると、小さいながら懸命に生きている自然の営みがよく分かります。とりわけ冬は、花も実もないように見えますが、すでに花芽をつけ始めているのです。開花の準備をしているんですね。人も自然のこういう営みに学ばなければいけないと思います。何ごとにも“備える”という日本人ならではの

真面目さや細やかな感覚も、実は先人たちがきちんと営みを繰り返している自然から学んできたのではないのでしょうか。“備えあれば、憂いなし”ということわざがありますが、それは災害だけでなく、家事でも仕事でも勉強でもすべてに通じる心構えだと思っています。何でも簡単で便利になった現代人は、それを忘れてしまったようですが、自然の方がちゃんと覚えているし、きちんと備えたものには成果が現れることも知っているのですね。いけばなや料理などの私の仕事でもきちんと役割取りをしたものは、美しく、おいしく仕上がります。

いけばなを通じて身につけた、桑原櫻子さんの自然観と生活感である。



いけばなの大事なことをお話しておりますので、転載させていただきました。



# 京

MIYAKO  
BARÉ

# 晴れ



静かな風景が  
冬の京都の  
温もりです。

# 冬

2012.12

この特集は提携する新聞  
社が情報を互いに提供し  
て掲載するものです。

企画・制作＝京都新聞COM

## ビル街の中心に 花の山居

いけばな桑原専慶流は江戸初期の元禄期、立花の名手とうたわれた桑原富春軒仙漢を流祖として、300年の伝統をつなぐ華道の家元。本拠（邸宅）のある界隈は銀行や百貨店、ホテルなどの大型ビルが林立するオフィス街で、家元のある六角通は呉服などの糸織ビジネスの町である。その中でおよそ半間ほどの格子戸の横に「桑原専慶流」の表札を掲げる家元の控えめさがいっそう深い佇まいである。

格子戸の内側は明らかに水打ちされた石畳の露地が30メートルほど延び、そのアプローチに促されて左に折れると光が差し込む坪庭。花の養生のための水溜めがあり、二輪の清楚な花が浮かぶ。訪れる人を迎えてくれる花である。さらに奥へ進むと、また庭がある。小ぶりながら手入れの行き届いた清浄な茶庭が風を運ぶ。元、おくどさん（かまど）のある台所だったという玄間から座敷に上がると、縁側越しに緑が目飛びこむ。いったい、いくつ庭があるのかと思うほどこの家は小さな自然に囲まれ、ビルの真ん中とは思えない静けさで、「つぼ中の天」とか「市中の山居」とも言える風雅な別天地である。磨きこまれた美しい町家の随所に、その場に合った花たちがさり気なく生けられ、少し、禁欲的な京の町家に文字通りの花を添えている。花びた茶の湯の山居というよりは、明るい花の山居である。

「庭でも家でも、日々目を注ぐことが大切ですね。こんな小さな庭でも季節になれば芽を吹き、100年経った家でも細やかに掃除をしていけば傷んだ所にも目が届きます。母の口癖ですが、悪くなってからではあかん。早め早めの手当が草木でも家でも、もちろん人でも必要なやと…」と櫻子さん。

自然だけでなく、家や人にも注がれるその思いは、いけばななどのような関わりがあるのだろうか。

## 花を生けることは 花を生かすこと

「花ってお料理と通じるところがあると思う」と櫻子さん。野菜であれ、魚であれ、自然から頂戴するものの扱い方の共通点だと言うのだ。

「お花のお稽古に来る方々にもよくお話しするのですが、どうか、花を生けようと思わないでくださいと。上手く生けようとする前に、その花の生い立ちとか、文化的な背景なども考えて、花を生かしてくださいと言っています」。

これは、当家元の創始者・桑原富春軒仙漢が著した「立花時勢粧」以来の桑原家の家訓ともいえる理念で、植物の出生や生い立ちを深く観察することで花や木の自然の姿を思い描き、それをいけばなに取り入れ、花を生かすというもの。櫻子さんはそれを「花と話をし、心通わせ、花に学ぶこと」だと言う。なるほど、これは料理に通じる。そして、この美しい住まいもまた、その教えを代々伝えてきた家であればこそ、柱にも壁にも温かい目が注がれているのがよく分かる。



## エゾノキヌヤナギ

△10頁の花▽ 櫻子

この蝦夷の絹柳は、まだ寒い間にすでに芽鱗片を脱いで花穂が膨らんだ状態の花屋にでてくる。温かそうな可愛らしい花穂なので、春の明るい色彩をとり合わせたくなってしまう。つい撫でたくなるような花穂だが、頬にあててみるととても気持ちがいい。見ても触れても癒される。

花材 蝦夷の絹柳(柳科)

ヴァンダ(蘭科)

菜の花(油菜科)

花器 陶水盤



### 雛の花 櫻子

お雛様の横に飾るいけばなは桃と相場が決まっているが、桃のかわりにいけるなら、スイートピーなんかもよく似合う。白色を男雛、ピンク色を女雛のイメージでいけ、葉の緑色とポイントとしての赤色にチューリップを加えた。他には青麦も何故だかよく似合う。どんな花が似合うか、いろいろ試してみよう。



## 弾むように

△2頁の花▽ 櫻子

白い手毬のような花が弾むように並んでいる。弧を描いて垂れ下がる小手毬の枝は、優雅な空間をつくりだす。長めに使って小手毬がつくる空間の内側に花を入れるのも面白いのだが、飾る場所が大きくない場合は枝を短く切り分けて、足もとを少し撓めながら花瓶に投入にすると、花がきゅと集まって豪華な感じになる。

噴水のように入れた小手毬の動きに添わせるように、紫の濃淡のスイートピーを入れると花が弾み出てくるようだ。この優しい色の広がり、シンビジュームをアクセントに加えた。小手毬の葉の緑も重要な要素になっている。

花材 小手毬(薔薇科)

シンビジューム(蘭科)

スイートピー二種(豆科)

花器 青色細口陶花瓶



## 伸び上がる

△3頁の花▽ 櫻子

三種類の薔薇をいけてくたあれこれと考えていたが、ビバーナムの濃青色の実をみつけたので、とりあわせてみた。ところが実の色が暗いため薔薇の鮮やかさが沈んでしまう。そこで白のカラーを加えることにした。清楚な白い花とみずみずしい緑色の茎が爽やかで、全体が明るくなった。

カラーの茎の線をどこから見てもそろっているように立てると、力強く上に伸び上がる勢いが生まれる。線をそろえるためには茎の曲がりを通り直ぐになおす技術が必要だが、他の花材では出せない魅力がある。

花材 カラー（里芋科）

薔薇三種（薔薇科）

ビバーナムの実（忍冬科）

花器 四足陶花器



立てる・集める・隠す

△11頁の花▽ 桜子

9頁の家元の投入が「立てる・広げる・隠す」いけばなであるのに対して、「立てる・集める・隠す」を意識してつけた花。ライラックは切り花では水揚げの悪い花で、いける時には必ず足もとの皮を削っておく。そのようにした上で作例のように短く集めていけると、一旦水が揚がれば結構長持ちする。色を集めるように使うのに向いた花材だと思っ。

カーネーションとライラックだけではふわふわした感じになるので、引き締め役にシゲレープの色づいた葉を加えた。

花材 カーネーション（撫子科）

ライラック（木犀科）

シゲレープ（蓼科）

花器 濃紺ガラス花器



二種でいける 櫻子

今月のテキストには七作の投入盛花があるが、そのうち四作が三種類の花材でいけられていて、のこり三作は二種類の花材でいけられている。それぞれを見直すと、なるほど三種でいけられた花はそれぞれに役割があつて、二種では物足りない。それは面としての葉であつたり、季節感を加えるためのワンポイントとしての実であつたりしている。

いけばなは花材の種類が多くなるほどそれぞれの個性は薄れていく。とり合わせを考える時は、互いの個性が際立つような組み合わせを大事にしたい。もし二種で納得のいく組み合わせをみつけたら、余計なものを入れずに花型を工夫することで充分見応えのあるいけばなになる。

青いガラス器の上に雪柳の枝を四方へ広げておいてその中にアネモネをさしてゆく。

春を告げてくれるアネモネは色鮮やかで大好きな花の一つ。茎の曲がりも面白く、咲いたときのことを考えながら長短をつけていける。赤い敷物に飾るとアネモネの赤色がより強さを増してくれる。雪柳とアネモネ数色。私の好きなり合わせだ。

花材 雪柳(薔薇科)

アネモネ(金鳳花科)

花器 青色ガラス花器

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2013年  
4月号  
No. 598

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元







## カエルの目線

△表紙の花▽ 桜子

背の低い花のとり合わせの時には、自分の目線を地面すれすれにしたところを想像しながらいけてみると面白い。私達は普段、そんな目線で物を見ることは無い。だからこそ新たな発見があったりすると思うのだ。上から見ていても見えないうところが見えてくる。こんなところにこんな花が咲いている！。そんなわくわくするような気持ちで小さな花をいけてみよう。

春の温もりに誘われて伸びてきたぼんぼり。この薔を主役にして母の株を足もとに加えると、小さな母の花も色つき始めた赤い実も、薔のクルクルもじっくり間近で楽しめる。カエルの目線でいけたいけな。

花材 薔 (薔科)

母 (薔科)

花器 三角柱花瓶

## 鉢植を生かす

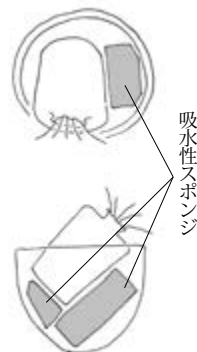
△2頁の花▽ 桜子

可愛い鉢植えを見つけたので買ってしまった。この小さな白い花の名前は西洋雲間草くもまぐさ。雪の下科の常緑多年草で北ヨーロッパの原産。花色は白のほかは赤とピンクもある。日本には雲間草が自生していて、北アルプスなどの高山で雲がたちこめるような中に咲くところから名づけられた。

西洋雲間草は切って小さくいけること



もできるが、鉢植のような華やかさはなくなる。鉢ごと黒いビニール袋で包み、底の深い花器にそのままいけてみる。左図のように吸水性スポンジを切って枕にすると安定した。とり合わせた椿と黒百合は鉢と花器の隙間に吸水性スポンジをはめこんで、そこに挿していけている。



焦茶色の花器の上で、白い小花が自然の表情を見せてくれた。

花材 西洋雲間草（雪の下科）  
黒百合（百合科）  
椿（椿科）

### オーストラリアの豆豆

△3頁の花▽ 桜子

アカシア（俗称ミモザ）のフワフワした黄色い花に橙色の小花が連なったコリゼマを合わせてみた。コリゼマはオーストラリアのユーカリの森に生える豆科の常緑低木で、作例では鉢植から切っつけている。ミモザもオーストラリア原産で豆科の常緑高木。同郷の豆科どうしのとおり合わせ。

花材 銀葉アカシア（豆科）  
コリゼマ（豆科）  
アンズリウム（里芋科）  
花器 細口陶角敏



## 波紋の器

△11頁の花▽

櫻子

この青白磁は宮永東山氏がつくられた器で、どっしりとした六角柱をしていて大きな丸い口があいいている。器の表面には波線が斜めに重なって、あたかも水面に風がつくる波の模様のように、椿をいけると、深山の水辺にいるような澄んだ空気を感ずる。

器の装飾にもいろいろあるが、宮永氏がつくる器のように、自然との接点を感じられる器には花がしっかりと合うように思う。きっと自然を敬う心がいけばなど共通しているのだろう。大好きな器

花材 喇叭水仙（彼岸花科）

椿（椿科）

花器 六角柱青白磁（宮永東山作）



## スカビオーサとアカシア

櫻子

花屋で見つけたら必ず買いたい花がある。スカビオーサもそのひとつ。複雑な花びらのかたち、薄紫から暗紫色、赤紫やピンクまでの色の変化も綺麗で、頼りなげに咲く姿も良い。しかし日持ちもする。松虫草の仲間なので、優しい趣を残している。日本では松虫が鳴く頃に咲くので松虫草と呼ばれているが、スカビオーサは疥癬かいせんという意味で皮膚病に効く薬草として使われていた。ヨーロッパ西部に自生する花である。

最近では春先にも出回るようになった。本来は初夏から秋に咲く花なのに。その上黄葉のアカシア！。初秋に飾れば、素敵な取り合わせなのに。花の魅力に負けて買ってしまった事をお許しください。

花材 アカシアの黄葉（豆科）

スカビオーサ（松虫草科）

花器 ブルーガラス深鉢

NHK「趣味D.O.楽」  
 ～ハンサムウーマン～  
 桑原 櫻子

3月12日放送の「趣味D.O.楽」

に櫻子副家元が出演。花と料理に  
 よって、自然を見つめ季節を感じ  
 ながら豊かな心を育む様子が紹介  
 されました。



JR京の冬の旅  
 センス・ザ・ミヤビ

キャンペーンポスターに櫻子副  
 家元が協力。約3ヶ月間、全国の  
 JR駅及び車内に掲示された。



「日本人の忘れもの」  
 京都、こころここに」

京都新聞社 編

大震災後の二〇一一年七月から  
 一年間、京都新聞に連載された  
 一〇二人のエッセー集。

櫻子副家元もリレーエッセーと  
 記念フォーラムで参加していま  
 す。

これからの日本をどうしてゆく  
 かということを考える上で、経済  
 成長の代償として日本人が忘れて  
 しまったものは何だったのかを考  
 える作業は、その手がかりになる。  
 定価本体一八〇〇円。



### 花菖蒲と鵝芍薬

△3頁の花▽ 櫻子

花菖蒲に芍薬はとてもよく映る。作例のように二種で盛花にしてもいいし、株分け生花にするのも調和が美しい。

作例の芍薬はトキシヤクヤクと呼ばれている。まだあまり多く出まわっていないようだが、咲くと白に淡いピンク色がさして、鵝が羽を広げた時のような色合いなのでこの名前がつけられたのだろう。葉も小さくて上品である。今後増えてほしいなと思う。

花材 花菖蒲 (菖蒲科)

オクロレウカの葉 (菖蒲科)

鵝芍薬 (牡丹科)

花器 交趾焼鉢



ポーンチャイナ 櫻子

写真の器はイギリスのコープランド社製と聞いている。白地に金とトルコブルーで装飾されて、台座の三方には田園風景が細かく描かれている。ポーンチャイナのコンボートである。

ヨーロッパに中国の陶磁器が伝わったのは十三世紀頃。それ以降、東洋の陶磁器は盛んに研究されて、ヨーロッパで最初に磁器の製造に成功したのは十八世紀ドイツのマイセン地方だった（一七〇九年）。日本の有田焼（柿右衛門様式）も大きな影響を与えている。

ところが当時イギリスでは白磁器の主成分であるカオリンが手に入らず独自の製法を工夫し、一七四八年、ボウ窯のトーマス・フライがイギリスで採れる原料の中に牛の骨灰「ポーンアッシュ」を加えることによつて良質の磁器を作ることに成功した。これが白磁器とは違う温かみのあるポーンチャイナの誕生だ。

ヨーロッパの人と話す時にはこの違いを知っておいたほうがいいだろう。白い洋食器はみんなポーンチャイナだと思っただけは馬鹿にされてしまう。骨灰を用いてつくられた磁器をポーンチャイナと呼ぶと覚えておこう。

花材 ベラドンナ二種（金鳳花科）

スプレー薔薇（薔薇科）

「フエアビアンカ」

花器 ポーンチャイナ・コンボート

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2013年  
6月号  
No.600

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元







路地 〱表紙の花〱 櫻子

「路地を通つてくる間に気持ち切り替わります」とお弟子さんによく云われる。三十肩の石畳に水を打つてお迎えをするのだが、そのご褒美に爽やかな風が吹き抜けて行く。水まきは迎える側も心地よい。

花材 七竈（薔薇科）

芍薬（牡丹科）

花器 陶花器（清水美菜子作）

玄関花 〱3頁の花〱 櫻子

ビバーナム・スノーボールは和名を西洋手鞠肝木という。ビバーナムは忍冬科・莢蒾属の総称である。

玄関の間には少し大きめの花をいけている。この朱塗りの円卓は、季節を感じつつ華やいだ雰囲気の花が似合う。

花材 カラー四種（里幸子科）

スノーボール（忍冬科）

花器 カットガラス花器



### 庭のテーブル

△11頁の花▽ 櫻子

父と母は玄関前のこの空間で時々朝ご飯を食べていた。たっぷりの紅茶とイギリスパン。表通りから深く入っているので閑かなのだ。庭の花の蜜や虫を食べに鳥たちもよくやってくる。草むらの中はレモンちゃん  
の昼寝場所にもなっている。レモンちゃんは昨夏から居る猫である。前のゴンちゃんはシャイな猫だったが、レモンちゃんは人なつこい。たまに稽古場にやってくるのをどうしたものか思案中。

以前のテキストでも甥っ子たちの作った猫と一緒にこの場所で薔薇をいけたことがある。花は折々の記憶を色彩豊かにしてくれる。

花材 薔薇(薔薇科)

紫陽花(紫陽花科)

花器 ガラス花器(クリシー製)



## 水を感じる

△12頁の花▽ 櫻子

たとえ水が見えなくても、いけばなの水はとても大切である。花にしてみれば、いつもきれいな水を吸っていたいにきまっている。花の水をいつもきれいにしている人には、いい花がいけられる。それは花の気持ちになれるから。それはもてなしの気持ちを持つているから。  
美しい水を感じる花がいけられるようになろう。

花材 バンダ二種（蘭科）

リースフラワー（芹科）

花器 彩泥玉型花器（宮下善爾作）

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2013年  
7月号  
No.601

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





ヒマワリとズッキーニ

△表紙の花▽ 桜子

まん丸のズッキーニは賀茂茄子やトマトと同じように、しばらく食卓に飾って眺めている。

向日葵は日本では食用油くらいしか知られていないが、中国ではお茶を飲みながら向日葵の種を食べる。殻を割るのが面倒だし、中身も少ないので苦手だなど思っていたが、実はすごい健康食品なのだ。ビタミンE、鉄分、亜鉛他多くの栄養素が含まれる。コレステロールを下げ高血圧や貧血を防ぎ若返りの効果もある。ズッキーニはペポカボチャの仲間。こちらもビタミンBや食物繊維を多く含む。鑑賞してもお料理しても元氣一杯の夏の花と野菜。

花材 向日葵(菊科)

柏の斑入り葉(山毛櫸科)

ズッキーニ(瓜科)

粟(稲科)

花器 ガラス花器

下向きに咲く内気な花

△2頁の花▽ 桜子

以前はアリウムの仲間に分類されていたが、今は百合科で、ネクタロスコルドウム・シクラムという学名で呼ばれている。買った時から花が枝垂れていて、上を向いた!と思ったら、花が枯れていた。花が終わると上を向くのだ。不思議な花だった。夏はガラス器にいける事が多い。花茎が花器の下まで着かないように浅く挿



して、ガラス越しに茎を見えにくくしている。

夜に水温が上がって花が萎れてしまう事が多いので、夕飯の片づけをしながら水を替える事になっている。朝起きて花がきれいだと思いがいいから。

花材 ネクタロスコルドウム・シクラム (百合科)

トルコ桔梗二種 (竜胆科)

ダイフェンバキア (里芋科)

花器 紺色ガラス花瓶

### エレガフミナ

△3頁の花▽ 桜子

今年初めて出会ったアフロディーテ・エレガフミナ。クレマチスの仲間である。とても優しくしなやかで、ワインディキヤンタに飾った。暑い部屋でも時折通りぬける風に揺れながら、長持ちしてくれた。北半球の温暖な地域には原種が約300種はあるクレマチス(金鳳花科クレマチス属)。その中で「鉄線(中国名・鉄線蓮)」と呼ばれるのは中国原産の一種だけなのに、つい何でもテッセンと呼んでしまう。改良種であっても野生のような雰囲気を持っているからだろうか。フランスの個人の庭で作例に似た小さな花のクレマチスが石壁に這わせて育てられているのが美しかった。

花材 クレマチス・アフロディーテ・

エレガフミナ (金鳳花科)

アガパンサス (百合科)

野葡萄 (葡萄科)

花器 ワインディキヤンタ



## 平籠にいける

櫻子

穂咲七籠が出回ると祇園祭も近いなあと感じる。夏の草花をいける時に足元に使ったり、花型に広がりを感じさせるには必ず添えたいと思う。

まん丸の小さな蕾が、ぱつと咲いて綿帽子のような真っ白の塊になる。七籠に葉が似ているのでこの名前がついた。七籠とは同じバラ科であっても属は違う。木ではあっても涼しげで軽いので籠花にも良く似合う。

白竹の平籠に矢筈薄、桔梗、撫子と取り合わせた。穂咲七籠を足元に添えると、左右に長く横張りの花型にいける事が出来る。そうする事で他の草花も伸びやかで生き生きとした姿になり、それでいて軽やかである。夏は風通しの良い花をいけたいと思う。

花材 矢筈薄 (稲科)

穂咲七籠 (薔薇科)

撫子 (撫子科)

桔梗 (桔梗科)

花器 白竹平籠



京の町家で暮らしている  
と、時折ありがたいなと思っ  
てことがあります。

30層もある長い石畳の路地  
に水を打つのは、小さな頃か  
らの私の日課でした。ジョウ  
口とバケツにたっぷりの水を  
くんで何度も往復します。お  
花のお弟子さんや客人のある  
時は、いつもこうやってお迎  
えするのですが、そのご褒美  
に爽やかな風が吹き抜けて行  
きます。それがとても気持ち  
良いのです。

それから3カ所ある水溜みづどまりに

季節の花を浮かべます。季節  
ごとに花の種類も変わります  
が、今なら鉄線てつせんや紫陽花あじふげでし  
ようか。新しい水に入れ替え  
た水溜の浮かした花、暑さで元  
気がなくなっているも、もう  
一度生き返って目を楽しませ  
てくれます。

中京区に住まいしているの  
で、お隣も裏もマンションや  
ホテルに囲まれてしまいまし  
た。小さな庭ですが、目隠し  
するように木々が青々と茂っ  
てくれています。この美しい  
緑に清められた風が家の中を  
通り抜けて行くときには、こ  
の細長い町家の造りに感謝す  
ること。

13歳で両親と離れ、この家  
で祖父母と共に暮らしてきま

# 町家に暮らすありがたい



くわはら・さくらこ 京都  
市生まれ。甲南女子大仏文学  
科卒。江戸時代前期より続く  
桑原専慶流のいけばなを15世  
家元の夫と共に継承する。料  
理研究家としても活躍。

した。お花の稽古を通して、  
物を大切に思う気持ちは何よ  
りも強くなったと思います。

いけばなの家として毎日教  
室もあり、家族の生活もして  
います。家に来られた方には  
お父の掛け花や床の間のい  
けばなを通して心地よい澄ん  
だ空気を感じてもらいたいと

思いますし、同時にそうする  
ことが私自身のリフレッシュ  
にもつながります。路地に水  
を打った時のように、気持ち  
がスーッとします。

花と共に生きた祖父や両親  
の大変さやしんごきを見て育  
ち、少しでも手助けになれば  
とやってきたことも今では日

常の何でもない習慣となり、  
これもまたご褒美なのだと思  
いとめています。

この家に住んで、家から学  
んだことも多くあります。

私にとって、いけばなは花  
との関わりを深めるだけでな  
く、暮らしそのものであると  
も考えています。「家が傷ん  
でくる前に早く気づいて直し  
なさい」は母の口癖でした。  
毎日の暮らしに余裕がないと  
なかなか気づけないので、今  
でも手強い言葉です。

父は大工さんと良く相談し  
家の修理をして、古い物と新  
しい物を調和させ、美意識の  
高い住みやすい家にしてくれ  
ました。この家を大切に美し  
く暮らし、守っていくことも  
大切な仕事だと思っていま  
す。(華道桑原専慶流副家元)

【京都新聞6月23日①】  
朝刊1面 カラー掲載





### 三種の花で

△9頁の花▽ 桜子

アンズリウムと薔薇は一本ずつ、オンシジウムは二本使っていてみました。少ない数ほどまとめにくい。

薔薇一輪の葉を二段に分けて水際をきれいにみせる。薔薇を買う時は茎が太くて葉の生き生きしたものを選んでいる。日持ちの良いアンズリウムとオンシジウムも艶やかな薔薇の葉のお陰で元気に咲き誇る。

壊れそうなほどに薄く焼かれた白磁の花器。口元に繊細な絵付がされている。アクリル製の花台。特別な花として飾りたい。



蒲がまの穂

櫻子

日本全土の池や沼に生息し夏に花を咲かせる蒲の穂。自然に生えているのを見ても美しいとは思わないが、水をたっぷり張った水盤にいけるととても涼しげな花となる。

雄花は黄色い花粉となって飛んでしまうので、雌花だけを残していける。昔は因幡の白うさぎの話をしながら雄花穂を取ったが、最近の蒲は雄花穂が綺麗に取り去られている。さらに雌花穂の上の軸が切られていることもある。

今年の夏の稽古は雄花穂を観察したいからと、産地に連絡してもらい自然のままの蒲の穂をいける事ができた。

考えてみれば、日本神話に登場する蒲は1300年以上前から生息しているのだ。(古事記の成立は712年)そんな植物をいけばなでは大切にしている。

蒲と小蒲は、上の雄花穂と下の雌花穂がくっついているが、姫蒲は雄花穂と雌花穂が離れて付いている。きちんと距離を置いているのだ。

昔の人は良く観察して名前をつけている。

花材 蒲(蒲科)

オンシジウム(蘭科)

紫陽花(紫陽花科)

花器 ガラス鉢



バターのお店 櫻子

フランスの伝統発酵バター「エシレ」のクッキーを頂いた。

京都では買えない珍しいお菓子。箱があまりにきれいなので、おとしを入れてカラーとカラジウムをいけた。

もったいないからと仕舞い込んでしまえば、そのまま忘れてしまうだろうし、捨てるのも耐え難い、花をいけることで、心に留める事になる。「軽やかなゆきずりの意匠花」と表現したのは祖父だった。

1973年のテキストに「アダム&イブ」のショッピングバックにフリージアをいけていた。この店はずち吉の洋食器部門で、最初京都にオープンした時は、憧れのショップだった。まだ外国からの洋食器が少ない時代、花を飾りテーブルセットイングしてのディスプレイは珍しかった。

祖父の時代も今も変わらない。京都人は特に新しい物が好きだが、祖父も私も同じだ。

私の頼りない文章に十三世専溪の言葉を。

「この様な意匠花も繰り返せば鼻につく。が、こんな瞬間的な思いつきはいけばなのある部分にはいつも必要とされている。こんな風を利用することも考えるといけばなも又楽しということになります。」

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2013年  
9月号  
No.603

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





暑さを乗り越えて

〈表紙の花〉 櫻子

今年も切りたての新鮮な葡萄ぶどうを送って頂いた。

すぐに食べてしまうのは勿体無く、撮影してからという事になる。

両親も色んな生り物を花と合わせていた。柏葉紫陽花かしわあじさいと葡萄、バナナとカラジウムなど上手い組み合わせが沢山あった。

いけてから頂戴するのが桑原家の常でした。

今回はあかのまんまの仲間、大毛蓼おおけたでと取り合わせた。葡萄と大毛蓼、同じ季節で同じ場所にいたかもしれない顔見知り同志。暑い夏を元気に乗り越えてきてくれた。

あかのまんまは別名大蓼いぬたでという。辛みがなく食べられない蓼の意味。犬の字がつく植物には他にも、犬胡麻、犬辛子、犬薺(いぬなずな)、犬稗(いぬひえ)、犬蔵(いぬくらび)、というものもある。どれもみんな食べられない。

花材 葡萄(葡萄科)

大毛蓼(蓼科)

花器 陶水差し(インドネシア)

雪笹 〈2頁の花〉 櫻子

山野草は中々見る機会が少ない。咲く場所を選び、決まった季節のほんの短い間しか咲かない花は名前も美しいものが多い。

誰がつけたのか、よほど考えられた

のだろう。雪笹も山地の林の中に生えていて初夏の頃花を咲かせる。白い小花を雪に、葉を笹に見たてて、この名前がついた。

花の後は赤くて小さな実ができる。実は小豆に似ていて、葉も湯がいて食べると小豆のような味がするので小豆菜ともいうらしい。

秋の黄葉した雪笹をおみなえし女郎花と取り合わせた。

花材 雪笹（百合科）

女郎花（女郎花科）

花器 染付広口花器

蝦蔓 えびつる

櫻子

表紙には大きな葡萄の房をいけたが、こちらには葡萄のような実がぶらさがった野生の蔓をいけた。どちらも太陽が育んだ結実。

この小さな黒い実はエビヅルで、ノブドウやヤマブドウなどとともに古くからエビカズラとも呼ばれ、日本に自生する葡萄の仲間。エビヅルとヤマブドウの実は食べられる。また、古事記にも登場する、日本古来

の植物である。

イザナギノミコトが黄泉の国から逃げ帰る時、追ってきた鬼にエビカズラを投げつけて、鬼がその実を食べている時に難を逃れた。エビヅルに含まれるポリフェ

ノールは普通の葡萄の数倍、酒石酸は血を増やしたり滋養強壯作用があるとされている。鬼もこの実を食べて力が湧くのを知っていたのだろう。自然の野山は、太古につながる植

物の宝庫だ。

花材 蝦蔓(葡萄科)

花器 紐鶏頭(鶯科)

花器 鶴首陶花瓶(清水正次作)





## 木の器 桜子

マンゴーの木をくりぬいて作られた器。タイでつくられたものだ。マンゴーは漆科の常緑高木で樹高40m以上にもなるそうだ。あの赤い実を無数にぶら下げた大木は圧巻だろう。ぜひ一度見てみたいが、開花後には強烈な腐敗臭がすることなので、実はかりになった頃合いを調べてからがいいだろう。

マンゴーの原産地はインドからインドシナ半島周辺と推定されている。インドでは四千年以上前から栽培が始まっており、仏教の経典にもその名が見られる。マンゴーをよく食べるようになった現代の若者（10〜20代）世代をマンゴー世代と呼ぶそうだが、その名にあやかってマンゴーのように遅しく、たわわに美果をみのらせてほしいと切に願う。

そんなマンゴーの幹をくりぬいて作られた器に、深紅の毬栗のようなベニノキと黄金色のマリーゴールドをいけた。麻で織ったオレンジ色の敷物に飾ってタイ風供花といったところか。マンゴーの大木を想像しながら見ると、趣も増してくる。ちょっと高いが、真っ赤なマンゴーも買ってこようか。

花材 マリーゴールド（菊科）

メキシコ原産

紅の木（紅の木科）

熱帯アメリカ原産

花器 マンゴー製鉢



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2013年  
10月号  
No.604

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





七竈 ななかまど 鳥兜 とりかぶと 竜胆 りんどう

△表紙の花▽ 櫻子

紅葉した七竈の葉が、斜め後ろからの光を受けて鮮やかに浮かび上がる。

竜胆の純白と鳥兜の優しい青紫色が、七竈の色彩のうつろいを際立たせる。

奥行きのある葉の重なり。伸びやかな花。家にいながらこんな風景を目にできることなんと贅沢なことだろう。

花を育てる人 大切に届けてくれる人 器をつくる人。永い歴史のなかで培われた豊かな文化。

古の人たちはどんな思いで花をいけていたのだろう。

自然との一体感。  
もてなしの気持ち。

木々や草花への敬いの心。  
なによりも、器の上でにっこり笑ってくれたように感じられたときの、あの爽やかさ。

うまく言葉にできないけれど、花たちへの感謝をこめて、写真で残しておこう。

花材 七竈 (薔薇科)  
鳥兜 (金鳳花科)

花器 陶花瓶  
竜胆 (竜胆科)

晒菜升麻 さらしなしょうま

△2頁の花▽ 櫻子

晒菜升麻はキンポウゲ科の植物で山中の林下に生える。高さが一メートルにもなり、白い花が長いブラシの様に咲く。

若菜を茹でて水に晒して食べるので晒

菜。根の部分は升麻と呼ばれる漢方薬になる。まさに自然の恵みを与えてくれる植物だ。

晒菜升麻と取り合わせた丸葉の木や竜胆を格の高いものにしてくれる。

いけばなとしていける事が第一義なのだと思わせる花だ。

花材 丸葉の木 (満作科)

晒菜升麻 (金鳳花科)

竜胆 (竜胆科)

花器 陶水盤



檜扇の実 ひおうぎ

△10頁の花▽ 櫻子

檜扇の実は和花とも洋花とも相性がいい。

この明るい緑色にふくらんだ実は、やがて茶色く枯れて割れると中から漆黒の丸い種子が並んで現れる。この黒い種子は「ぬばたま」「うばたま」と呼ばれる。射玉玉、烏羽玉と書く。万葉集には81首も詠まれているくらい好まれたことが伺える。艶やかな黒い色に、小さいのに強い個性を感じる。

作例ではまだ若い檜扇の実の爽やかさに深紅の薔薇と赤い縞模様のアンスリュームをとり合わせた。花器は衝立のような平たい形で、小石を入れた上に細長い剣山を置いていけている。

日本古来の植物と、熱帯の個性的な花と、赤い薔薇。色彩と花の形で選んだ感覚のないけばだが、不思議と調和している。

こんな出合いを楽しむのもいいかなの面白さだと思う。

盛りだくさんのお買物

△11頁の花▽ 櫻子

京都市左京区鹿ヶ谷特産なので鹿ヶ谷かぼちゃという。

瓢箪のかたちをした南瓜で、上の部分は繊維が多く水っぽいのでスーブなどにする。



下の方は普通に炊いたり、丸ごと詰め物をしてオーブンで焼いても美味しい。上と下の調理方を変えなければならぬ、少し手間のかかる野菜だ。だから中々食べられない。京都の人でも食べた事のある人は少ないと思う。

今年は岡山で作られた鹿ヶ谷かぼちゃが届いたので早速奥の座敷に飾らせてもらった。

いつも料理しようかと悩んでいたら、花屋さんで角のようになったオクラと黒い唐辛子（ブラックフィンガー）を見つけた。どちらも鑑賞用なので食べられないが、愛用の買物籠に盛り込んだ。私の普段のお買物は、食べ物を買う量がとても多い。

気がつくとも袋からはみ出して持てない状態にまでなっているので、それをいけばなで表現しようだ。

料理の連載をしていた雑誌でピツタリと思うようなイラストを描かれたこともあるくらい。

花材 鹿ヶ谷かぼちゃ（瓜科）

ザクロ（柘榴科）

オクラ（葵科）

黒唐辛子（茄子科）

葉鶏頭（寛科）

花器 エコクラフトの買物籠





喜樹                    〆2頁の花〴                    櫻子

数十年ぶり蔵や花器置場を整理して久しく使っていない花器が沢山出て来た。9月号のテキストから順番に花をいけている。

この三彩の壺は祖父も母も好んで使っていた記憶があるが、いけにくいのか、いつも奥に仕舞われてしまつて中々出てこない。剣山も入らないくらい口が小さいのに水盤のように浅く平たい。大きな枝のかんれんぼくをいけるのは難しかった。しかしいけ終えてみると、二種の枝ものと大輪の薔薇に負けない強い壺だなと感じる。口が小さくても少しだけ花をいけて満足する性分ではないので困るところだが。

中国原産のカンレンボクは秋になるとミニバナナをつけたような球形の集合果となる。

果実、根、茎葉に抗癌効果があり、薬用とされてきた。それで英名は *canseer tree* とか *happy tree* というのだ。中国では実の形から子孫繁栄を表す喜びの木ということで喜樹と呼ばれている。意味は違つても希望を与えてくれる木であつたのだと思つ。

花材 早蓮木かんれんぼく (沼水木科)

丸葉の木 (満作科)

薔薇 (薔薇科)

花器 陶扁平壺



トゲのない薔薇

△3頁の花▽ 櫻子

今年の鈴薔薇の実には野薔薇の実よりも早く出回ったので、花会やお稽古に何度もいけさせてもらえた。野生の薔薇の実なのに年々棘が減って、扱いやすくなってくるのは有り難い事。

木苺は同じバラ科の植物。鈴薔薇の葉は取られているので必ず艶やかな緑を添えたい。ネリネの花も茎も瑞々しさを与えてくれる。

花材 鈴薔薇の実(薔薇科)

木苺(薔薇科)

ネリネ(彼岸花科)

花器 あげび籠



### 浜辺葡萄

櫻子

写真の団扇のような丸い葉はシグレープ。アメリカのフロリダ州南部から西インド諸島、南アメリカに分布する常緑小高木。海岸や砂丘に生えるので、和名をハマベドウという。芳香のある小さな白い花を咲かせ、葡萄に似た果実は濃赤色に熟し食用になるそうだ。

昔からこの葉はよくいけられてきた。祖父も両親もシグレープがあると目の色が変わっていた。

特に紅葉が綺麗で大きな木のままで鮮やかな色の花と取り合わせてきたのを覚えている。珍しくて固い丸葉だが、向きを工夫すれば花器と花との接点を上手く繋げて強々とまとまる。

いけばなは何でもよいから足元を緑で隠してという発想にならないようにしたいと思う。安易に花器の口元に突っ込まれた葉を見てそう思う。とても大切な場所なのにと。

アンスリウムもピンクッションもありきたりな花で、すでに珍しいものではない。でも取り合わせや器や敷板でとても良い花となる。私にとっては良いか悪いかどちらかしかない花なので、よほど良い花に出会った時しか取り合わせしない。そんな想いもあって良いかな。

花材 アンスリウム(里芋科)

ピンクッション(ヤマモガ

シ科)

シグレープ(蓼科)

花器 金属花器





### 落ちない実

櫻子

秋になると色んな実をいけるが、赤い実で特に好きなものは、梅もどきや七竈、ガマズミだ。

日本には十五種類ほどのガマズミがある（ガマズミ、ミヤマガマズミ、コバノガマズミなど）。葉は丸葉で実より遅く紅葉するものもある。

梅もどきのように小葉を全部取り去ってから出荷される実も多いが、ガマズミは虫食い葉も残っていて、それが素朴で可愛らしく実の赤さを一層引き立ててくれる。

山では二メートル位の低い木なので日頃は目立たないが、実の季節には見つける事が出来る。

ガマズミで果実酒を作ると赤いお酒になるらしい。昔から天然の着色料としても使われてきたくらい、赤い実の色は鮮やかで透明感がある。

ガマズミの語源は噛み酢実とか神ツ実（神の実）が転化したものと言われる。古くから日本の山に育っていて、寒くなると甘みを増す甘酸っぱい実で豊かな山の幸であったのだろう。

いけていても、実は落ちないし、甘くなるまではしっかりと実のつていてくれた。そんな力強い実りに上品な糸菊を添えた。

花材 菘菜の実（忍冬科）

糸菊（菊科）

花器 濃紫色陶花瓶

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2013年  
12月号  
No.606

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





漆器の鉢にいける

△表紙の花▽ 櫻子

塗りの器に花をいけると、あらたまった感じになる。作例の大鉢は果物を盛ったりして使っているが、水仙や椿との相性がいい。梅擬の赤い実もよく映る。

花材 梅擬(薔の木科)

水仙(彼岸花科)

寒菊(菊科)

花器 溜塗大鉢

赤い釉葉の花器

△2頁の花▽ 櫻子

焼き物の赤色は出しにくい色だ。そう。金を使うこともあるそうで、そうするととても高価なものになる。でもどうしても赤い器にいたい時がある。この器は無理を言ってみても良かったものだ。

花材 月桃の実(生姜科)

薔薇三色(薔薇科)

花器 赤色釉陶花器

白椿(椿科)



出合い花 (3) 櫻子  
サンバとポインセチア

サンバとは兵庫県で開発された新しいオリジナルの菊で「ひょうごサンバママ」という。2006年から品種改良が続けてこられた。

サンバのように華やかな洋種の菊で、踊る花びらということらしい。私が選んだのはウエディング・サンバ。白の一文字菊といっても良いと思う。

京都の花屋さんには今年初デビュード。他にもオータム・サンバやブリティ・サンバなどの色違いがある。

ネットをかけて売られているので、アナスタシアと同じようによく目立つ。特別扱いの花だが、糸菊や嵯峨菊のように日本的な菊と合わせるのは難しいと思う。

ポインセチアも園芸品種としては毎年ニューフェイスがお目見えする。

あれこれ悩んだ末に、アンティーク調のガラス器に短く並べてみた。どちらが主でも従でもなく、花の形の対比と色の対比がはっきりして、意外にいい感じ。新鮮な花型。クリスマスに粉雪が舞う中で咲く二種の花。

花材 菊「ウエディング・サンバ」

(菊科)

ポインセチア (燈台草科)

花器 ガラスコンポート



## こま型の花器

△2頁の花▽ 櫻子

20年ぶりくらいに蔵の整理整頓を行なった。奥に仕舞われていて、中々お目見えしない花器も多いのだが、久しぶりに懐かしい花器も出てきた。

この花器は1976年に、両親が祖父へのお土産にローマで買ってきたもの。(テキスト156号で紹介) イタリアらしい明るい色使い、ユニークなたち。祖父は気に入って、よく花をいけていたことを思い出した。小さいけれどびりっと強い感覚をうける花器とテキストには書かれている。花のことは丁寧に書かれていたが、花器の話はそれほど多くない。もっと書いて欲しかったなと思う。

花材 若松(松科)

葉牡丹(油菜科)

オンシジウム(蘭科)

花器 細口陶花器



## 彫刻の花器

櫻子

この花器も祖父が好んで良くテキストで花をいけていた。

横長の平たい形だが、生花をいける事もあったし、洋花や和花どちらも合わせていたようだ。

お稽古用の花器で、普段に使っていた。

どっしりと重いので、砂利、剣山水、花を入れると気合なくしては持ち上げられない。それほどに重い！だが安定の良い花器は安心して花もいけられるし、どんな形にも作る事が出来る。

焦茶色で菊の柄のように彫刻された図案だ。

力強いけれど、主張しすぎず、いける花の事を考えて作られた良い花器だと思う。

小豆柳、椿、臘脂菊と冬らしい静かな取り合わせだが、花器のお陰で足元がしっかり支えられて温かみも感じられ、長い間飾っておくことも出来た。

花器が美しいと花との接点も気をつかう。

祖父も足元には焦茶色に合う綺麗な色の花を置いていた。

椿の葉が多くかかり過ぎないように、重くならないように何度もカメラのレンズを覗いた。

花材 小豆柳(柳科)

椿(椿科)

スプレー菊(菊科)

花器 方形陶花器



立派な金魚草 櫻子

10月の関東支部いけばな展で、いろんな色の金魚草を主材にしていけておられる人がいたが、細い横長の花器の口から舞出するような金魚草が印象的だった。さて、京都の花屋でも見事な金魚草が売られていたので私もいけてみることにした。12月初旬にこんな金魚草が手に入ることを覚えておこう。

作例では黒地に銀と金で彩色された箱形の陶花器に濃赤色と純白の金魚草を立て、足元に大輪のダリアを添えて花器の口元を整えた。花器の模様を隠したくないので、ダリアを短く挿しただけで、余計な葉ものは加えていない。

金魚草で思い出すのは、「花ふたり旅」の本の中で、母がドイツのケルンでいけた花。赤色、臙脂色、オレンジ色の金魚草に白色とクリーム色のストックを混ぜていけられている。器は葉でつくられたリースでこれも又濃い臙脂色なのだが、ブロンズのモニュメントの前でそれらの強烈な色彩がとてよく合っている。この感覚は流石だと思う。異国の地で限られたスケジュールの中、場所を探し、花と器を手に入れて写真に撮るのは至難の業。「花ふたり旅」は両親の宝物であり、また私たちみんなの宝物だ。両親に感謝。

花材 金魚草（胡麻葉草科）

ダリア（菊科）

花器 金銀彩箱形陶花器



## 耳付花器

櫻子

花器に耳が付いているのと付いていないのとは、何がどう違うのだろうか。

今月号には二つの耳付花器に花をいけている。どちらも絶妙なバランスで耳が付いている。見ていて飽きない。器によっては、耳が無いほうがシンプルでいいのになと思うような耳がとってつけたように付けられた器もある。器の耳は奥が深い。

耳の役割は装飾性にあると思う。耳の雰囲気器の印象を決定づけると言ってもいい。

このページの花器のように、付けられた耳がお洒落な形だと、花の取り合わせや花型も垢抜けた感じになる。また、表紙の花器のように獣の顔の耳がついていたりすると、格調高い雰囲気要求される。知らず知らずのうちに、器の耳が私たちのいける花に影響を与えているとすると、耳おそるべしだ。

というわけで、チョコレート色のカラーと深紅のレナンセラ、白い実の南京櫛なんきんはしという取り合わせには、きつとこの花器が合うと思っていけてみると、やっぱりいけ映えがする。きゅつと締まった足のくびれが、花型に動きを与えてくれている。そして腰に手を当てたような形の耳は、全体の引き締め役だ。

花材 南京櫛（燈台草科）

チョコレート色のカラー（里芋科）

レナンセラ（蘭科）

ミリオクラダス（百合科）

花器 耳付陶コンポート（宇野仁松作）





## 古清水の器

△2頁の花▽ 櫻子

松竹梅の舟鉢に蘭（オンシジウム・オブリザタム）とシクラメンをいけた。この器は古清水こきよみず写しの器。古清水とは江戸時代前期に確立された焼きものである。清水焼に磁器が登場する幕末期以前の焼きものをこのように呼んでいた。

京焼の野々村仁清にんせいを起源とし、優雅で美しく、その当時のお公家さんの好みや宮廷文化の影響がある。それまでは茶道文化の影響で侘び寂び的な焼きものが多かったこともあって、華やかなものへの要望も強く、色絵や絵付けの美しい器が作られている。

京焼清水焼は今も同じ技術で引き継がれた世代も育っている。

花材 オンシジウム・オブリザタム  
（蘭科）

シクラメン二種（桜草科）

花器 古清水舟鉢



銀色に輝いて

△4頁の花▽ 櫻子

目を増す毎に花芽が大きくなり銀色に輝いてきた。初春の会での迎え花にかけた赤芽柳と薔薇、胡蝶蘭の盛花。赤芽柳は20本だが、枝分れも数えると40本ほどになると思う。

三彩釉の水盤は、花材を沢山用意していけ終えても、足りないかな?と思うくらい大らかに包み込むような大きな器だ。清水保孝さんの作品だが、花器として作られたのだろうか。それとも大鉢だろうか。私としてはいつも沢山の本数が挿せて有り難いと思つて花をいけさせて頂いている。

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2014年  
3月号  
No.609

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





## 雪の中で

△表紙の花▽ 桜子

今年の立春は、前日に比べて急に気温が下がって真冬の寒さが戻ってきた。

その週末の岡山行きの新幹線は、京都の雪も溶けていたので、安心して乗り込むと姫路辺りから雪景色になってきて、相生、岡山と雪は降り続く。

いつもなら京都に雪が積もっていても、晴れている土地なのに。珍しい風景に何度も写真を撮った。岡山駅に着くと改札辺りは大混乱、電車の発着も大幅に遅れていた。

2月は結局3週間近く寒い日が続いた。

1月の下旬にいた雪柳とチューリップの盛花は、春の温かな兆しを感じるようにとつけたのに、まるで雪の中で咲いているようだ。

少しでも花が開くように雪柳の足を割って、皮を削って枝を少し短めにして剣山に挿し直している。そうすることで再び寒い日がやって来ても最後まで力強く咲いてくれる。

雪の中でタクシーを長い間待ち続けて、やっと稽古場にたどり着いた。今そんな事を思い出しながら、この花の原稿を書いている。

花材 雪柳(薔薇科)

チューリップ(百合科)

プリムラ・ポリアンサ

(桜草科)

花器 白色陶鉢

## 器の選択

△2頁の花▽ 桜子

連翹の花を見てみると、春のやわらかで温かな日射しを感じる。オレンジ色の立派な薔薇を取り合わせて、アンスリウムの小葉のみどりを足した。

いけばなで最も大きなウエートをしめるものに器がある。いい花材で、いい取り合わせで、いけ方にも工夫があるのに、何かハツとする感動がない場合は、器の選択が良くないことが多いように思う。

逆にとってもシンプルないけばなののに、なにかに残る趣がある場合は、器の選び方が抜群だったりする。いけばなの印象は器によって左右されると言ってもいい。

いける技術を磨く一方で、もっといける器についても研究する必要があるだろう。

この三月に、京都のやきものの窯元との企画イベントがある。魅力的な器に出合えるように、互いにいい刺激になればと思っている。

花材 連翹(木犀科)

薔薇(薔薇科)

アンスリウムの葉(里芋科)

花器 格子柄陶花器



## 白花満作

櫻子

糸状の白い花が枝の先端に無数に集まってブラシのような形をしている。初めて出会う不思議な花なので、葉の出ている枝の姿をそのまま見せるように、小さな花の黒百合を取り合わせ、足元に庭から路の臺を切ってきて加えた。小さな路の葉も入れている。

花屋では穂咲満作と呼んでいたが、一般には白花満作、もしくはフォザギラ・マヨールと呼ばれている。北アメリカ原産の落葉低木で、春に咲く白い花は花弁ではなく雄しべである。花は甘い香りがする。花に少し遅れて出る葉は、秋に美しく紅葉するらしい。

日本の林に咲く一人静ひとりしずかに花の感じが似ている。日本の野の花と合わせても違和感がなさそうだ。白花満作はアメリカのどんなどころに咲くのだろう。そこにはどんな動物がいるんだらう。鳥の鳴き声。風の音。想像をふくらませて、花の故郷に思いを馳せるのも楽しい。

花材 白花満作(満作科)

黒百合(百合科)

路の臺(菊科)

花器 水色ガラスコンポート

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2014年  
4月号  
No.610

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





## 花は自分そのもの

△表紙の花▽ 櫻子

「いけた花は自分そのもの」。私はいつもそう  
思って花をいけている。

そんなふうには思えば、いけたあと水をかえ、  
いけ直し、短くなっても最後まで世話をするよう  
になる。花に対する敬意と愛情を大切にしたい。

客観的に見ても、花を選び器を選んでいけた花  
には、いけた人の好みや内面が表れる。皆さんに  
も自分の好きな色の組み合わせみたいなのがある  
だろう。ご自分で花を買っていけた花は貴方そ  
のものだ。

表紙の青麦とアネモネの盛花も、赤色のクロト  
ンを選んだ時点で、アネモネは赤色だけに器  
は白がいいなと直感した。赤い花と葉から伸びる  
青麦の柔らかな緑が目優しい。自分にこんな雰  
囲気があったのかと驚いたが、これもまた私の花  
なんだと愛着が湧いてくる。

花材 青麦（稲科） アネモネ（金鳳花科）

クロトン（燈台草科）

花器 帽子型陶水盤（ドイツ製）

## 木製の器

△2頁の花▽ 櫻子

生活用具として作られた民芸品も花器として使  
うと花を引き立ててくれて、又郷土的な面白さも  
加えてくれる。祖父が何度も花生けに使っていた  
中に韓国製の木鉢があった。

米を選別する器で、側面に段々の刻みこみが  
あって、この器に米を入れ、振りながら選別する  
器具で、農具のうちの一つである。

材質は松の木のような。長い間仕舞いこまれて  
いた。古くて素朴すぎるので、両親は使わなかつ



たんだろうか。私は思い出の器として、又使っていきたいと思う。

陶の水盤を入れて剣山を使い、ミモザアカシアとチューリップ、スイートピーをいけた。畑で育った健康的な花なら調和すると思う。

たつぷりとした容器なので、大きく派手に咲く花も受けとめてくれる。パロット咲き（オウム咲き）のチューリップもミモザアカシアも軸が太く、長い間きれいに咲き続けてくれた。

花材 ミモザアカシア（豆科）

チューリップ（百合科）

スイートピー（豆科）

花器 木製鉢（韓国製）

## 花の気品

△10頁の花▽

櫻子

スカビオサ（松虫草科）にはいろんな色がある。私が選んだのはワインレッドのスカビオサ。静かに人を惹きつける魅力がある。なんて綺麗な花なんだろう。風格と気品も感じられる。とり合わせには同系色の大輪の薔薇（薔薇科）とライラック（木犀科）を選び、淡いブルーと白のベネチアン・レース・グラスにいけた。薔薇もライラックも思い切って短くいけ、スカビオサを主役にしていく。気品のある花をいける場合は、それに見合う品格の高い器を選ばない。

花器 ベネチアン・レース・グラス



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2014年  
5月号  
No.611

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 大輪のクレマチス

△表紙の花▽ 櫻子

クレマチスと呼ぶと洋花。鉄線と呼ぶと和花。呼び方で洋と和にイメージが変わるけれど、やはり私は鉄線と呼んでしまふ。

日本や中国では大輪の鉄線を鉢に仕立てて鑑賞する事が多いが、ヨーロッパ原産のクレマチスやその交配種は家の壁に這わせたりアーチに絡めたりと随分景色も変わる。どちらもそれぞれに鉄線の優しい姿が表れて美しいと思ふ。

この花も満天星の枝に絡ませて広げたり下げたりして鉄線の自由にさせていけてみた。

花材 満天星(燈台躑躅・躑躅科)

鉄線(金鳳花科)

花器 長首陶花瓶



## ポインセチアの仲間

△3頁の花▽ 桜子

枝だけのような植物はミルクブッシュと言ってトウダイグサ科・ユーフォルビア属で、ポインセチアの仲間であり多肉質の枝を持つ。

茎に傷をつけるとそこから白いミルクのような樹液を出すのもポインセチアと同じだ。緑色の葉が多いが、今回のものは優しいピンク色をしていた。

同じような形で立ち上がっているのはアンズリウムの蕾。二種ともユニークな姿で先が尖っている。

海中深くピンク珊瑚の間を魚が自由に泳ぐような景色を思い浮かべて。

花材 ミルクブッシュ(燈台草科)

アンズリウム(里芋科)

ミリオクラダス(百合科)

花器 御影石花器



カラーと薔薇

△10頁の花▽ 櫻子

花材 カラー(里芋科)

薔薇(薔薇科)

ニューサイラン(竜舌蘭科)

花器 ガラス水盤



カンガルーポーと海葡萄

△11頁の花▽ 櫻子

花材 カンガルーポー

(ハエモドルム科)

シーグレープ (蓼科)

カーネーション (撫子科)

花器 白釉陶花器



カラーとアジサイ

△9頁の花▽ 櫻子

花材 カラー(オレンジ、黄色)

紫陽花(紫色、白色)

花器 カットガラス花器



初夏の山

△10頁の花▽

櫻子

花材 裏白の木(薔薇科)

スイートメモリー(百合科)

撫子(撫子科)

花器 染付花器



いばら二種

△11頁の花▽

櫻子

花材

難波次 (薔薇科)

浜加子 (薔薇科)

アスチルベ (雪の下科)

花器

ガラス花瓶





## 芦屋の花屋さん 櫻子

JR芦屋駅の近くに、芦屋マダム御用達の素敵な花屋さんがある。三ヶ月に一度はこちらの歯医者さんに通っているの、この花屋さん立寄るのを楽しみにしている。

小さなお店に所狭しと枝もの、花、観葉植物が置かれているのだが、買うよりも何時までも眺めていたいお店なのだ。

店内の中央には白くピンクく紫色にかけての花が盛るように配置され、裏に回ると黄色からオレンジの花が鮮やかに飾られている。大きな枝はそれらの花々の上で広がり、窮屈に括られない。

綺麗に見せるコツとセンスが有るのだと思う。

観葉植物や多肉植物なども数は少ないが、見たこともない様な珍しい物が多い。それら全てが鉢のまま売られていない。ベルギーやフランスの焼きものに入れられている。

今日はユーフォルビア・オンコカラータというトウダイグサ科の植物を買って帰った。茎が棒状に伸びるのが本来の姿なのに、左の茎は石化して珊瑚のような形をしている。植物が石化する理由はよくわからないが、ちよつとふてくされた様にも見える。

そういえば最近石化している花(鶏頭やアンズリウムの花の部分など)を好んでいけている。

ユーフォルビアは育てたいので、根付きのまま深い鉢に入れ、ゼラニウムと取り合わせた。



### 市松模様の器

△2頁の花▽

櫻子

おやつをいれておきたくなる器。  
色とりどりの飴のかわりに、3色  
の蜜袋をいけた。

花材 珍至梅（薔薇科）

蜜袋三色（胡麻の葉草科）

花器 釉彩市松蓋物（横山武司作）



撫子が主役

△3頁の花▽

櫻子

たった一本の撫子だけで、配色と花形次第で主役にできる。

花材 猿捕茨(百合科)

撫子(撫子科)

紫陽花「紅」(紫陽花科)

花器 澱青釉紫紅斑花瓶

(宮下善爾作)



スモークツリー

△11頁の花▽ 櫻子

向日葵の黄色と、花器のモザイク柄にある黄色との関連性が面白い。

花材 スモークツリー(漆科)

向日葵(菊科)

アンスリウムの葉(里芋科)

花器 石垣手花入(森俊次作)



出合い花（10） 櫻子

薔薇

フランネルフラワー

家元がはじめた「出合い花」だが、いざいけてみるとなかなか難しい。「テキスト」のために写真撮りをする以上、普通の一輪挿しではだめだと思っからかもしれない。たった二本のいけばなののに、とても奥が深い。

新鮮な出合い。

とっておきの器えらび。

この二つのテーマをクリアしなければならぬ。

でも、日常の中で、たとえば来客前に急いで花のいけかえをしているような時に、いい感じの出合い花を自然にいけていることも多い。そんな時には、「新鮮な季節の花を、洒落た器に」と考えながらいけている。「出合い花」にはいけばなのエッセンスが凝縮していると思うので、是非みなさんにも挑戦してみてほしい。新たな発見がきつとある。

大好きなイブピアッチェという薔薇に、優しいフランネルフラワー。あまり考えすぎずに、本能的に好きな花を組み合わせてみた。

花材 薔薇「イブピアッチェ」

（薔薇科）

フランネルフラワー

（芹科・オーストラリア原産）

花器 結晶釉細口花瓶

（前田保則作）

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2014年  
8月号  
No.614

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





サラセニア ▲表紙の花▼ 櫻子

サラセニアは、長い筒状の葉で虫を捕らえる、いわゆる食虫植物だ。北アメリカ東部からカナダの湿地に分布する。

珍しく切り花でサラセニアが売られていた。筒と蓋の部分にある赤い網目模様が綺麗だったので、それが目だつようなとり合わせにした。

花材 サラセニア(サラセニア科)

アンスリウム(里芋科)

スモークグラス(稲科)

花器 赤黒ガラス花器

タニワタリノキ ▲3頁の花▼ 櫻子

谷渡の木は茜科の常緑小高木。日本の九州中部以南から中国、東南アジアまで分布する。球形の花が愛らしく、鉢植や切り花でもお目にかかるようになってきた。

作例の枝はアメリカカタニワタリのような。こちらは北アメリカ原産の落葉低木。明るい葉色が爽やかだ。いずれも谷などの湿地に生える。

花材 姫百合三種(百合科)

谷渡の木(茜科)

花器 通草蔓手付籠



## グリーンカトレア

櫻子

知性があり完成度が高く、最も調和のとれたかたちである植物は蘭の花らしい。昆虫に与える花蜜も、正確に運んでもらう花粉も、緻密に計算して失敗のないように考えて、自分達の美しい姿を守ってきた頭の良い花の一族。

カトレアは熱帯の植物だが、ブラジルから苔や地衣類を運び出す際に、それらを梱包するために使われたらしい。この荷物を受け取ったカトレイ氏は梱包用に使われた葉の厚い植物に興味を持ち、育てたところ大輪の花が咲き人々を驚かせたという。1824年の事である。その蘭は増殖が遅く栽培に多くの経費がかかった。

特にカトレアは高嶺の花だが、こんな劇的なデビューだったとは！

その後、この蘭は高値で取り引きされ、西欧で品種改良が進んで、今では四輪立ちのグリーンカトレアも栽培されている。

この珍しい花を咲かせるまで何年かかったことだろう。

同じ蘭科のオンシジウムと取り合わせて、ミントグリーンの色を際立たせた。

花材 グリーンカトレア（蘭科）

オンシジウム（蘭科）

葱坊主（ユリ科）

花器 紺色ガラス花瓶





明るい洋花

櫻子

ブルーベリーは夏櫛の仲間だが、北アメリカ原産。南アメリカ原産のグラジオオラスと北アメリカ原産の向日葵を合わせると、明るいいけばなになる。

花材 ブルーベリー（薔薇科）

グラジオオラス（菖蒲科）

向日葵（菊科）

花器 角形花瓶（ヘレンド）

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2014年  
9月号  
No.615

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





## 山の風情

△表紙の花▽ 櫻子

山地の夜風の冷たさに色付き始めた七竈。夏の名残の高砂百合と、弾けはじめた山芍薬の実、山野草の鉢植で売られていた田村草といっしょに水盤に低く広がるようにいけてみた。水際に見えている七竈は、かなり前へ張り出している。器に水をはると、草木がほっとした表情を見せてくれる。

花材 七竈（薔薇科） 高砂百合（百合科）  
山芍薬の実（牡丹科） 田村草（菊科）  
花器 黒花模様水盤

## 秋色のアンズ

△3頁の花▽ 櫻子

丸葉の木が秋色に色付きはじめた、かと錯覚するが、これはアンズリウムで、みんな少しずつ色が違う。季節の草花とあわせてみるとまさに秋の風情。「花の色は、こだわりをもって生かす。」ことができるかどうかが鍵になる。

花材 三島紫胡（芹科） 黒緯（榴科）  
アンズリウム（里芋科）  
花器 手付陶花瓶



## 花と葡萄

櫻子

花屋さんに一輪だけ柳蘭やなぎらんが残っていた。

背が高くピンクの濃い色の花なので、とてもよく目立つ。空気のきれいな信州の草原から送られてきたのか。多分近くに咲いていたであろう鬼百合、金水引も一緒にいけたいと思って買って帰った。

岡山から届いた新鮮なもぎたての葡萄とカラフルな高原の花。暑さも少し和らいで、秋の気配を感じる。

柳蘭は葉が柳に似ていて、花を蘭にたとえてこう呼ばれる。北米では針葉樹林帯の山火事の跡にこの花が大群落となるので fire weed (火の雑草) と呼ばれている。夏の終わりには雪のような真っ白な種子が風にとって舞い、それは雪のようにも見えるらしい。多数の種子を作り、風で飛ばし、常に新しく群生できる場所を探す花なのだ。

花材 柳欄 (豆科)

鬼百合 (百合科)

金水引 (薔薇科)

葡萄 (マスカット)

花器 陶茶碗 塗盆

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2014年  
10月号  
No.616

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



花梨<sup>かりん</sup>

△表紙の花▽ 櫻子

花屋さんで花梨を見つけた。しなやかな枝の雰囲気は惹かれて活けたくなつた。かりんの実はとても重い。重すぎて枝から落ちることもあるらしい。その実を支える枝はとても硬い。

硬くて重い木を活けるのは難しいので、そんな時は盛花はまずやめた方がよい。投げ入れて安定の良い花器を選ばないと倒れる事もありうる。

余分な葉は取り去り実の艶やかな美しさを見せたいと思う。この秋一番の大輪の一字菊と赤いボリスベッカーを取り合わせて。

花材 花梨(薔薇科)

菊2種(菊科)

花器 焼締花器



## 稲科の植物

△2頁の花▽ 桜子

夏の終わり頃から好んでグリーンスケールを活けている。

偽小判草という和名だが、本来の小判草よりも花穂が平たくて艶がある。稲科の植物だが、葉も花穂も良く日持ちしてくれて、少しずつ枯れ色になりながらも足元の花を引き立ててくれた。

稲科の植物たちも多彩になってきた。昔から使われてきたのは薄や粟、唐黍、パンパスグラスなどだが、今回のグリーンスケールを始め、オバタス、バニカム、スモークグラス、などはまだ知らない人も多いかも。

一本ならとても優しく弱々しいが、集めていけると稲科らしい強さが現れる。実際見た目だけでなく丈夫な草花だ。取り合わせた花が終わっても、又新しい花といけ直したり、ドライフラワーとして暫くの間飾って楽しんでい

る。稲科は、食物としていけばなどとして、本当に感謝すべき植物。

花材 グリーンスケール（稲科）

ビバーナムの実（忍冬科）

鶏頭4色（苺科）

花器 波文陶花器



仁清生地の花入れ

櫻子

仁清生地とは京都の清水焼を形にした野々村仁清の作風を生かした生地の事。淡い卵色の生地で暖かみのある焼き物である。

縦線の柄が素朴で優しいので、秋の風情を感じる花を取り合わせた。

花材 チョコレートコスモス(菊科)

アスチルベ(雪の下科)

オランダセダム(丹慶草科)

花器 仁清線模様花瓶



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2014年  
11月号  
No.617

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 山野草の紅葉こうよう

△表紙の花▽ 櫻子

山芍薬やましかくやくの葉はバラバラで間が空いていけにくいと思っていたが、見事に茂ってしかも色づいている。2本花瓶にいただけだけでも充分迫力がある。長くは持たないが、一時でも山の命を感じることができる幸せ。山採りか栽培か、いずれにしても採る人や育てる人に感謝の気持ちをもつて、大切に花をいけたい。

特別な花材には、いい器を。蔵の奥から大きな花器を出してきて、山芍薬をいけるとびたりとおさまった。鍾馗水仙しゅうだうすいせん（リコリス）と紅葉した薄すすの葉は、季節の色と空間のひろがりに。

花材 山芍薬の実と葉（牡丹科）

薄（稻科）

鍾馗水仙（彼岸花科）

花器 掛分花瓶（清水保孝作）



## 西洋陶器にいける

△3頁の花▽ 桜子

糊空木のりうつぎの團雲みづつき種「水無月」は、白い装飾花が無数に集まって大きな花序をつくっている。どこか外国の香りのする花なので、花器にはデルフトを選んだ。デルフト陶器はオランダの焼き物。「花ふたり旅」ではこの器に母が二種類の向日葵をいけている。絵付けに赤色が入っているためか、秋色の花が似合う。私も母と同じ色合いを合わせている。

水無月の優しい秋色はあえて後ろに配置し、木苺の濃い秋色を前に重ねて全体を引き締めた。明るい黄色の薔薇で、色調にメリハリをつけた。

花材 糊空木のりうつぎ(紫陽花科)

薔薇(薔薇科)

木苺(薔薇科)

花器 デルフト陶花瓶

■ 冒頭発言

和食と京と広島 世界が認めた自然の恵み (詳報)

祝いや弔事の場に不可欠 荒木さん



京都の伏見で、魚三樓とい... 料理といたって、食べる機会... 64年に初代が四国の讃岐... 今ではなかなかりません。け... 京都府から出てきました。江... 江戸時代、伏見京都は違う... 町でした。江、大坂、京、の... 三都に次ぐ都市の一つで、... 伏見港という港がありました。

普段のご飯作りを大切に 桑原さん



私は、京都の真ん中、中京... 区に住んでいます。またまた... 京都には、街中にも町家がた... くらあります。江戸時代か... ら続く、いけばなの家に生ま... れ、夫が15世家元を務めてい... ます。

広島湾北側は「箱庭の海」 川上さん



広島湾の魚介類で一番に... 挙げられるのがカキ。養殖の... 始まりは、江戸時代の初期、... 広島に移封された浅野長晟... が紀伊(和歌山県)から持ち... 込んだとされる。石に種を付... けて沖にまいて大きくするの... で、家で食べるくらいしか採... れないが、それが、浅瀬に... 置いた竹や細い枝に幼生を付... 着させて育てる「ひび建」が... 導入された。

多彩な味わいや... ヘルシーさから、... 海外の人たちも魅... 了する和食文化を... 再発見しよう。「和... 食と京と広島 世... 界が認めた自然の... 恵み」をテーマに... 9月20日、広島市... 中区の中国新聞ビ... ルで「広島・京都... 文化フォーラム... 2014」(中国新... 聞社、京都新聞社... 主催)が開かれた。

コーディネーター  
中国新聞社文化部長  
渡辺拓道

「魚三樓」主人  
荒木 稔雄  
華道桑原専慶流副家  
元・料理研究家  
桑原 櫻子  
元広島市丹那漁協組  
合長  
川上 清

# 目と舌で季節を味わう

■ 幸せな思い出  
 一昔さん、食にまつわる幸せな思い出をお持ちだと思います。紹介していただけますか。  
 川上 18歳から力キ養殖をし、現在84歳。元気にこれからは、ずっと力キを食べてきたからでしょ。大自然の恵みである力キやイシ、そういったものをかり食べてください。十数年前、日本全国から千々に集まる魚料理のコンクール「力キのコンクール」を持って行き、それが賞されました。その後には、あな井でも入賞、それはうれしかったです。千葉県の鎌千長さんから、小ワシ料理教えてほしいと現地へ招かれたこともある。海流の影響が、大きなイシが捕れなくなつて小ワシが揚がるようになった。でも、食べ方を知らぬのじゃあ。刺身に天ぷら、ぬた。奥さん方に言われました。

■ 食習慣はいま  
 フランスワードが当たり前になるまで、日本人の食習慣が変わってきました。食文化として気になると、心配などを聞かされた。荒木 フランススタイルの変化といいますが、特に若い人たちは走り回っているような時世です。何かをさじりながら電車に乗っている。行儀は悪くはなかなかなし、そんな時しか食べられないのかなとも思っています。日本食のそば、天ぷら、すし、江戸時代はフランスワードです。ローフードとだけ聞くと、どうもなかなかなし、やと思うんですね。もしなかったら、今の家庭でみそ汁はどうなっているのかなと。だしのもとも日本料理の一種です。削っている部分はあやうです。ただ、おひつとかけにきい。ええもんを食べに行かない。

■ 自分で作った味が最高  
 仕事を終えて家内が帰るころまでに娘たちが何か作っていたり、長男がそこに帰ってきたら、そんな光景をみるのがうれしな。家で醤油料理みたいなものは出さず、何かというチーズだったりハムだったりしますけれど、家族が和気あいあいしている姿のほうが、本心で幸せなことじゃないかと考えています。

■ 何ができるか  
 一これからの和食文化はどうあるべきか。また、何が期待できるのか、私たちが市民には何ができるか。私たちが、何をすべきか。荒木 日本料理は一番大事なのはだし文化です。いりこ、カツオ、スッポン、フグ。いろんな魚があります。中でもカサゴ、昆布のだしがとりわけ重要だと思います。フランスでは近々、かつお節を作ることがあります。世界

■ 川上 公民館で「漁師の作る魚料理」の講師をして、力キも時々やります。コンテストで入賞した力キのコンクールの一番簡単なのは「ニナオイ

■ 川上 若い人へ魚を食べる習慣をどうつけてもらうか、結論は出ません。戦時中は米ぬかと表ぬかをベースに「毛ぎ」を混ぜた蒸し団子が多かった。戦後

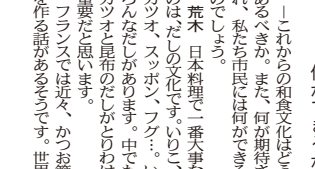
■ かわらえ・まきし 1930年広島市生まれ。広島一中（現国泰寺高）を卒業し、48年から地元丹那町で力キ養殖を中心に漁業に従事。78年から2004年まで丹那漁協組長。公民館講座で魚料理を教え、江戸時代の「かきこ」料理を復元した。著書に「箱庭の海」「続、箱庭の海」など。

■ 広島や京都の豊かな食材を生かした和食の魅力や継承について語り合うパネリストたち  
 (広島市中央区の中国新聞ホール)

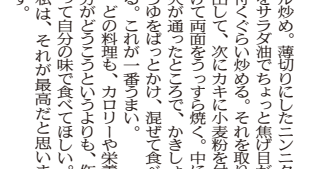
主催 中国新聞社、京都新聞 後援 広島県、広島市、京都市観光協会



桑原さんの創作料理「焼き薬と蝦と里の田楽」



来場した人たちは、和食の奥深さに触れ、興味深そうに聞き入った



来場した人たちは、和食の奥深さに触れ、興味深そうに聞き入った

第47回 日本いけばな芸術展

テーマ「花という未来。」

会期 10月8日(水)～13日(月)

会場 大阪高島屋7階





### 白玉椿をいけて

△3頁の花▽ 櫻子

今年庭の山茶花や椿が例年よりも早く咲き始めた。蔵の前の山茶花が大好きで、咲く時期をいつも心待ちしている。蕾も早い時期から沢山つけ始めて、十月末には一斉に咲き始めた。いつもなら十一月に入ってから先ず最初の一輪が開くのだが。

昨年植えた白玉椿も同じ頃にひと花咲いた。椿の木は庭に多いのに、今まで白玉椿が無かったのは不思議なくらい。椿の種類は多いが、葉が形良く格好も良くていけやすい椿はそんなに多くない。藪椿や白玉椿はさり気なく足元に収まってくれる。

台切りデンファレと若松と取り合わせた。

花材 若松(松科)

白玉椿(椿科)

デンファレ(蘭科)

花器 陶花器



## シチュー鍋に付けて

櫻子

シチューの中味がブクブクと煮え立つ様な雰囲気です。青文字や枯れ紫陽花を付けてみた。

青文字は枝が折れやすく、先が尖っていて枝を集めるようにいけるのは難しい。

もっと沢山枝を買えば良かったなと反省。

青文字は早春の頭花を咲かせる。一つの蕾の中に3〜4個の花が内包されていて、咲き出すと全体がボリュームアップして可愛らしい。

クスノキ科の木なので良い香りがある。切り口は山椒さんしょうの香りに似ているようにも思う。種子は辛いので、生姜しょうがの木ともよばれる。木肌が青いので青文字なのだが、黒文字よりも柔らかい気がする。

時折よく確認せずに黒文字の楊枝を買ったと青っぽい木肌の楊枝であったりして要注意！これは青文字だと思っ。

シチューの中味が冷めない様に、暖かそうなシヨールで包んで。

花材 青文字 (楠科)

紫陽花 (紫陽花科)

薔薇 (薔薇科)

花器 陶製シチュー鍋



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2015年  
1月号  
No.619

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元









## 冬の彩り

△表紙の花▽ 櫻子

葉牡丹は冬の花壇も彩るアブラナ科の植物でキャベツの仲間だ。ヨーロッパ原産の「ゲールズ」<sup>①</sup>と呼ばれる結球にならないキャベツが祖先である。中心の葉の色がピンク→白→グリーンと変化し、まるで薔薇の花のよう。春先には黄色の花が咲くのだが、葉だけで充分美しい。お正月は松や梅の足元に押し込められて窮屈そうに飾られている葉牡丹が気の毒だが、私はいつもスイトピーやチューリップと飾りたいと思う。今年は切れ葉で縮緬状の葉牡丹を多く見かけた。山羊型のトルコ水差しにもとてもよく似合う。

花材 葉牡丹(油菜科)

オンシジウム(蘭科)

スイトピー(豆科)

花器 山羊型陶水差し(トルコ製)



## 森の宝石

△2頁の花▽ 櫻子

パンダも、エビデンドラムも蘭の中ではとても好きで良くいけさせて頂いている。昨年の秋の日本いけばな芸術展では根付きのパンダをコウモリ蘭に絡ませた。パンダという名前は「まとわりつく」という意味なので木や枯れた羊歯に絡みつくようにいけるのも違和感がなかった。根はとても空気を好む性質なので、霧を少し吹く程度で乾燥した会場でも元気で有り難かった。エビデンドラムはカトレアの近縁種でエビ(上)とテンドロン(樹木)で樹の上に着生するという意味になる。エビデンドラムもパンダも野生の姿を見た事はないが、名前から読み取れる雰囲気大切にしている。

花材 エビデンドラム(蘭科)

パンダ(蘭科)

カーネーション(撫子科)

花器 洋陶器(ローゼンタール)



## 花の進歩

△3頁の花▽ 櫻子

紅葉のヒペリカムが珍しくてピンクカラー、赤薔薇と取り合わせた。昨年の11月下旬の花である。赤薔薇は一輪だけ。それで充分なくらい花も茎も葉もしっかりしていて、ヒペリカムの紅葉に負けない。本数が少なくても花の向きを考えていけると良い。秋の日本いけばな芸術展でも横田慶重先生がいけられた花は、仏手柑に三本の赤薔薇と胡蝶蘭を取りあわせておられた。昔の赤薔薇なら10本はいけないと強さがなかったが、今の赤薔薇は強く丈夫で栽培技術の進歩に驚くばかりである。

花材 ヒペリカム(弟切草科)

カラー(里芋科)

薔薇(薔薇科)

花器 陶コンポット(前田保則作)



### 黄色に紫をそえる

△10頁の花▽ 桜子

黄色と紫色は反対色で、黄色は若々しい明るさ、紫色は大人びた高貴なイメージがある。作例では緑色と黄色の構成に、鮮やかな紫色をポイントで加えて色彩をひきしめている。

リュウココリネ（レウココリネ）は南米チリのアンデス地方に分布する百合科・リュウココリネ属の多年草。切り花でもいくつかの花色があるが、紫の花色が多い。ほのかに良い香りがある。

花材 ミモザ（豆科）

チューリップ（百合科）

リュウココリネ（百合科）

花器 結晶釉水盤（前田保則作）



楽しくなる器 桜子

器を買いに街に出ましよう。

私が器を探すとき、何のために花をいけるかによって、見方を変えている。花展用なのか、テキスト撮りのためか、料理教室のテーブル飾りか。飾る場所をイメージして、その場の雰囲気似合う器を探す。

春らしいラナンキュラスと菜の花をいけた器は、私のイタリアン・レッチドのキッチンでよく使っている。どんな色の花でもモダンに飾ることができると、摩天楼のような形が楽しい。

花材 ラナンキュラス（金鳳花科）

菜の花（油菜科）

花器 陶花瓶（伯耆葉子作）

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2015年  
3月号  
No.621

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 金魚草の秘密

△表紙の花▽ 櫻子

今年も寒い頃から立派な金魚草が売られていた。小、中くらいの丈の花は花壇に植えられているが、大きいものは切り花に向いているらしく色も多彩になってきた。地中海沿岸（南欧・北アフリカ）の園芸種の花で本来は5月頃が咲く季節だと思う。

日本や中国では金魚草だが、アメリカでは嘴みつく龍、ギリシアでは鼻のような、フランスでは狼の口という名前で呼ばれる。古代の文明では霊的な力があるとされた。庭に植えると災いから守られ、食べると若さと美しさを取り戻すとか！。エディブルフラワーとして良く料理に添えられている金魚草だが、そうと知ってはいても食べようとは思わない。

花材 金魚草（胡麻の葉草科）

小手毬（薔薇科）

ドラセナ（竜舌蘭科）

花器 ペルシヤ花瓶

ポピー

櫻子

今年は立春を過ぎてても寒い日が多く、花屋さんに並ぶ春の花達も咲くまではしばらく時間がかかったよう。固いつぼみのポピーは最初は下向きで頼りなげ。水切りして暖かい部屋に置いておくと、くつと顔を上げて蕾が二つに割れ、あつという

間に大きな花が咲いてきた。

この瞬間が楽しくて春は必ずポピーをいけている。少し細かったのでも、連翹と取り合わせた。枝ものと同合わせる事は珍しいが、連翹の優しい線がポピーの動きを助けてくれる。

スイスの公園で澄みきった青空の

下、光を集めたように咲く連翹と初夏の小麦畑でしっかりと力強く咲くヒナゲシの花は、今でもはつきりと目に浮かぶ。

花材 ポピー（罂粟科）

連翹（木犀科）

スイートピー（豆科）

花器 白磁花瓶





いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2015年  
4月号  
No.622

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



貝母<sup>ばいも</sup> 〱表紙の花〱 櫻子

貝母は漢名で、中国原産の多年草。球根が漢方薬にされる。和名ではアミガサユリとも呼ばれ、花の内側に網状の模様がある。球根は二枚貝のような形をしている。

父の文章といけばなを纏めた「仙齋彩歳」には初夏にいけられた貝母の実と仙翁、鳴子百合（野生種）の投入がおさまっている（71頁）。6枚のプロペラのような実の面白さと、繊細な葉の枯れ色は、いかにも父好みの不思議な美しさがある。

仙翁は撫子科に属している。記憶の中から父の花が作用したのか分からないが、春の貝母には撫子と鳴子百合を選んでいた。父は白黒の陶花瓶にいけていたが、私は軽やかな漆器に付けて剣山を苔で隠してみた。漆器に花をいけると、特別な感じがする。上品な金彩の花模様、底面の朱色が優しさを添えてくれる。

花材 貝母（百合科）

撫子（撫子科）

鳴子百合（百合科）

花器 金彩高台漆器



## ガイラルディア

△3頁の花▽ 櫻子

花屋で「これはルドベキア？」と聞くと「それはガイラルディアです」と教えてくれた。どちらも北アメリカ原産の初夏から秋まで咲き続ける多年草。ルドベキアはスウェーデン人の、ガイラルディアはフランス人の名前に由来する。明治時代に渡来している。

品種により天人菊てんじんぎく、大天人菊おほてんじんぎくという和名がつけられている。花卉の色が先端で切り替わる不思議な花だ。

はじめていける花なので、相手の選択に迷ったけれど、同じ色が虹のように入るアイリスを選んで、白黒の器にいけると、優しい暖かみを感じさせてくれる花になった。

花材 アイリス（菖蒲科）

ガイラルディア（菊科）

花器 印花文陶花器（近藤豊作）

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2015年  
5月号  
No.623

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 緑から白へ

△表紙の花▽ 櫻子

紫陽花あじさいにも近い植物で、日本の山野にみられるガマズミやおおでまり大手毬の仲間であるビバーナム・スノーボール。ビバーナムには他にも種類があるが、葉の先が3つに裂けているのがスノーボール。

咲きかけのつぼみの頃は若草色の花の固まりだが、真っ白へと変わっていく。柔らかくてフワフワの花で、姿も優しいので出逢えるこの季節が待ち遠しい。

水揚げは良くないので、ライラックなどと同じように足元を削ってよく割り、水切りしてたっぷりの水につける事。花が下向きだが、ちゃんと元気に咲いている。最後は本当に雪の玉のようになって、はらはらと花びらを散らす。紫陽花よりも繊細で頼りないけれどやっぱり好き。オランダ製のガラス器にバンダと取り合わせた。

花材 ビバーナム (忍冬科)

バンダ (蘭科)

花器 淡紅紫色ガラス花瓶



## ライラック

△2頁の花▽ 櫻子

四月末に岡山の桑原専慶流展に行く时必须ってよいほどライラックをいけておられる。庭に咲いたライラックを切つてこられるので、大きく伸びやかで良い香り。いつも羨ましく拝見している。

ヨーロッパ原産で、フランスでもよく庭に植えられている。フランス語ではリラ。シャンソンにも「白いリラの咲く頃」があり、宝塚歌劇の「すみれ華の花咲く頃」はこの曲が元になっているぞうだ。

ドイツやフランスでお世話になった方の庭にはライラックとともに薔薇や蔓薔薇も必ず植えられていた。ともに芳しい初夏の花だ。

花材 ライラック(木犀科)

薔薇2種(薔薇科)

花器 青色ガラス花器



### 初夏籠花

櫻子

宝鑑草を庭から切ってきた。鳴子百合に似た花の付き方で、百合科・稚児百合属の多年草。水揚げもいい。花屋で初夏の草木を買い足して籠にいった。白い小さな花は姫空木。花が2本立つのは、二人静。淡紫色は都忘れ。野に咲く姿を想像しながらいけるのは楽しい。繊細な籠花生けには優しい風情の花が似合う。





いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2015年  
6月号  
No.624

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





## 「水生華」

この度、縁あって陶芸・美術作家の近藤高弘さんと、当流副家元の桑原櫻子との二人展を「富春軒」で開催させていただいた。

近藤さんは京都清水で磁器の染付で人間国宝となられた近藤悠三氏の孫にあたり、伯父様の近藤豊氏の死去を機に陶芸の道に入られた。制作にあたっては「水」を常に意識されて、水滴を表した「銀滴」シリーズで独自の境地を開拓してこられた。

櫻子は京都で330年の歴史をもつ花道・桑原専慶流の14世家元の長女として、幼少より花の道に携わる一方で、料理研究家としての顔ももち、自然の恵みと美しさを伝える活動を続けている。

今回の「水生華」では、近藤さんの「水」をテーマにした作品群が、和の暮らしの中でどんな反応を見せてくれるのか、そこに「華」が加わることで何が生まれるのかを体感する中で、アートについて、花道について、深く考える機会を得ることができた。

「水生華」の余韻を今後に生かすため、写真と文章で記録に留めたいと思う。

### 「水生華」特集

## 水の町家に 風を感じて

会場となった「富春軒」は花道の道場であり、花道家元の住居でもある。祖父の代で花を養う細長い水溜が十間につくられ、父と母の代で水溜は3つに増えて、季節の葉や花を浮かべるようにしている。

今回、近藤高弘さんはこの家を「水の町家」と表現してくださった。日頃とくに意識していなかったが、言われてみると「水」を生かして暮らしていることに気付く。母がうるさく花の水換えの大切さを言ってく



近藤高弘 ガラス・インスタレーション 桑原櫻子 花：黄金板屋楓 鉄線数種 八角蓮 白花敦盛草

れていたことも、「水の町家」の要素になっているとも思う。

二階の上段の間は一尺だけ高くなっている。そこがタイトル「水生華」の舞台になった。氷のような、雪のような作品を近藤さんが配置していく。「僕の作品を水だと思つて花をいけてください」との投げかけに応じて、季節の自然を櫻子がいけていく。

そして「水の器」と花たちが明かりに浮かび上がる。

このイベントには、近藤さんの推薦で、現代アートの旗手の一人、大船真言さんにも協力をお願いし、一階の2つの床の間に大船さんの絵が加わった。

表紙掲載の絵は深い青色に縦に白い筋、9頁の絵は淡い青色にぼんやりと横に白い帯。事前に床の間を見に来られて描いてくださったもので、材料は天然岩絵具である。空間にも近藤さんの器にもびたりと調和していた。

その床の間に櫻子が花をいけた瞬間、見ていた大船さんは「風」のようなものを感じたと、後で教えて下さった。そんな風を自分の作品にも吹かせたいと。

「命は水から生まれいずる」水から生まれいずる華。水生華。近藤さんの水の表現は、水の町家を潤し、櫻子の生けた花たちは、水を得た命の美しさを見せて、人の心に風を送ってくれた。家と器と花と絵とが心地よく響き合った。

桑原専慶流十五世家元 桑原仙溪

「水生華」 桑原櫻子×近藤高弘

日時…5月9日(土)・10日(日) 11時～17時

場所…富春軒「桑原専慶流家元宅」

入場料…500円



近藤高弘 坐像：Reduction - 滝 - 桑原櫻子 花：乙女百合 屏風：山田古香筆 「赤壁の賦 前編」



近藤高弘 器：「Mist」 桑原櫻子 花：有馬の馬の鈴草



階段を上がった二階、上段の間が「水生華」の舞台に。



瞑想 (4頁)

玄関の間で迎えるのは、滝に打たれて瞑想する坐像。組まれた手の上で可憐に咲く乙女百合。震災と原発事故を経て、人と自然との関わりを問い直す近藤さん自身の姿に、東北ゆかりの花が寄り添う。屏風に書かれているのは中国・宋代の詩人、蘇軾(蘇東坡)が、長江の戰場趾を訪れ、人の儂さ愚かさ、自然の雄大さを対峙させた韻文。  
文字の滝の前で、人と花とが一つになる。



## Tradition and Modernity: “*Suishōka* (Water, Life, and Flowers)”

Takahiro Kondo, ceramic artist

Kyoto often makes me feel and consider its deep and essential traditions that have been passed down for generations. Such an encounter with traditions is very inspiring for me, as I am always seeking new and modern ways of expression, and it drives and motivates me to create art standing face-to-face with each key element of such traditions. While it is often said that Kyoto is a city of “traditions and innovations”, I believe that innovations only come from authentic traditions that live on in the historical city and not from those that appear to be traditional on the surface.

It was two years ago that I first visited Fushunken, the house of Mr. Kuwahara, the Grand Master of the Kuwahara Senkei School of Ikebana. After going back and forth along the Rokkaku Street, I finally found and entered Fushunken’s front gate. I walked down a long and narrow path, when suddenly, I saw flowers floating in a small stone pond glowing in the sunlight. At that moment, it felt as if my entire body was taken into a completely different dimension. I was also impressed by the greenness of maple leaves in another pond near the front door, and I instantly thought that this place is a “*Machiya* of Water”. I was also amazed by the inside of the *Machiya* where the space and atmosphere were created meticulously with fine materials including lamps and shades of discerning taste, and flowers in vases of different materials, colors and shapes. When I saw the upstairs salon used as a room for learning *Ikebana*, I thought that “the students here must be very lucky to have the opportunity to learn *Ikebana* in such a place.”

At the age of 25, I left the company employment in Tokyo and decided to start my career as a ceramic artist, driven by the shocking death of my uncle Yutaka Kondo (ceramic artist) who took his own life. Up until then, I was an athlete, a table tennis player, and had little interest in art, and it was only when I came back to Kyoto that I started learning ceramics and art from the beginning. It was around the age of 30 when I acquired the minimal standard of the basic ceramic skills and techniques I needed for my work. However, I had been struggling for a long time to find my own unique theme for my art. Around 1994, when Kyoto commemorated the 1,200th anniversary of its foundation, I came up with the idea of “fusing contradictory elements” inspired by the city of Kyoto where old and new elements are all mixed and combined. Then, I began to create my artworks with the keyword of “representation of

water born from fire (kiln) through earth”, based on the image of **fire** and its opposite, **water**, which are both essential elements of ceramics. Since then, I have been working on various expressions of water using glass and *Gintekisai* (silver mist overglaze), my original patented technique.

When Mr. Kuwahara asked me if we could create some kind of exhibition at *Fushunken*, it was easy for me, whose main theme is water, to visualize the installation of artworks in this *Machiya*. Accordingly, we collaborated to create this exhibition and demonstration of *Ikebana* (*Hanadēmae*) with the concept of “*Suishōka* (Water, Life, and Flowers)” . This event was also a part of “PARASOPHIA: Kyoto International Festival of Contemporary Culture 2015” the first international art festival in Kyoto, and was held on the last day of the art festival. I believe we have succeeded in presenting some of the interesting aspects unique to Kyoto where tradition and modernity integrate. The number of foreign tourists visiting Kyoto continues to rise every year, and I think that it will become increasingly important to introduce our culture through the presentation of Japanese aesthetics and sensibility from Kyoto to the world.

The devastating earthquake that hit Japan in 2011 made us, the Japanese people, reconsider our way of living and the relationship between nature and the human. In our hectic daily lives, we sometimes forget about simple and natural things such as a flower (life) living in **water**. However, there is sometimes a brief moment where you realize that nature, body and soul have become as one; for instance, when you are arranging flowers in a vase, or for me, when I am working with clay and fire. I want to cherish such momentary feeling and let them permeate every cell of my body.

### Takahiro Kondo

1994 Kyoto City Emerging Artist Award.  
2002 supported by Japanese Ministry of Culture grant for overseas study.  
Public Collections  
Metropolitan Museum of Art, N.Y.  
National Museums of Scotland, Edinburgh etc.

### Sakurako Kuwahara

Born in Kyoto as the first daughter of the Grand Master of Kuwahara Senkei School whose history dates back to the 17th century, Sakurako has learned *Ikebana* since the age of six.  
Currently, teaching *Ikebana* as the Vice Grand Master, she also runs the cooking salon “Cherry Kitchen” .

翻訳：佐藤美奈子



## 伝統と現代

近藤高弘

京都は、深く本質的な伝統が脈々と流れていると体感することがある。現代の新たな表現を模索してきた私にとって、それは、とても刺激的な出会いであり、そこからその重要な要素のモノやコトと対峙しながら、制作へと向かう意欲へと駆り立てられることがある。京都が、「伝統と革新」の都とよく言われるが、うわべだけの伝統的なものではなく、本当の伝統が息づいているからこそ、革新が生まれるのだと思っている。

さて、ご縁があって桑原さんと知り合い、2年前に初めて富春軒におじゃまさせていただいた。六角通りで何度か入り口を通り過ぎてしまい、やっと見つけて長い路地に入っていくと、パッと光がさし水のはられた石囲いの中に迎え花が浮かべてあった。その瞬間、私はまったく異次元の世界に引き込まれたような感覚が身体に走ったのを記憶している。そして、次に中玄関でも水の中に沈められた楓が青々としているのが、また印象的でその時、ここは「水の町屋だ」と思った。家の中にも、様々な花器に花が生けられ、またセンスの良い照明器具など、細部にこだわった素材や空間造りがされている町家に驚くとともに、2階大広間が、お花のお稽古場になっていることを見せられて、「ああ、ここでお稽古される生徒さんたちは、なんて幸せなことだろう」と、思った。

私は、叔父（陶芸家・近藤豊）の自死の衝撃で、25歳の時に東京の会社を退職して、この道に進むことを決めた。スポーツ選手（卓球）だった私は、若い時は美術にはほとんど興味がなく、京都に戻ってから陶器やアートのことなど一から学ぶこととなった。30歳を過ぎてようやく、何とか基本的な技術は身に付き始めたが、個人作家としてどのようなテーマで自分独自の作品を作っていくのかという暗中模索が続いていた。ちょうど

1994年京都が建都1200年の年を迎えるころ、古いモノと新しいモノが混然一体となっている京都の町を客観的に捉えることで、「相反する要素を融合する」というテーマが生まれ、その後、焼きモノの重要な要素である「火」と対極にある「水」をイメージし、「土を媒介に火（窯）の中から生まれる水の表象」というキーワードを素に、作品を制作するようになった。そこから、銀滴彩のオリジナル技法（特許取得）やガラスなど水をテーマに様々な表現を試みている。

桑原さんから、この富春軒で「何か展覧が出来ませんか」という打診をいただいた時、水をテーマにしてきた私にとって、それは、直ぐにこの町家での展示イメージが拡がり、今回の「水生華」というコンセプトも生まれ、コラボレーションの展覧会と華手前というイベントが実現した。丁度、京都国際現代芸術祭2015「パラソフィア」という京都で初めての国際アート展が開催されている、その最終日に合わせての関連イベントということにも連携でき、京都でしかできない伝統と現代が融合する面白さの一端を提示できたのではないかと考えている。

年々、京都には多くの海外からの観光客が増え続けているが、京都から日本人の美意識や感性を世界に伝えることは、今後益々重要な文化発信となるであろう。

2011年3・11の災害と事故を経験した我々日本人は、改めて自らの生き方や自然と人間の間を関係性を考えさせられる大きなきっかけとなった。「水」に生きる華（いのち）という当たり前の事に、つい日常に追われて忘れてしまうことも多いが、たとえば、花を生けるという行為や時間、私であれば、土や火に向き合って制作しているときに、ふっと立ち現れる自然と身体と魂の一体感の余韻に気が付くときがある。そんな瞬間の感覚を大切に、その一瞬を自らの細胞の中に染みわたらせたいものである。













近藤高弘 器：銀滴彩器 桑原櫻子 花：薔薇 板屋楓 大船真言 絵：「STILL WAVE #7」

### 華手前

近藤さんの銀滴碗ぎんでてまわんを使った少人数での茶会を行って、櫻子による華手前をご覧頂いた。水を打った路地を入り、庭をめでもお茶室へ。はりつめた空



気の中に、亭主が花を切る鉄の音が心地よく響く。季節の花のみずみずしさが、部屋の空気を優しくしてくれる。

謙虚な心で、精一杯のもてなしの演出を。亭主の気持ちをはかりに伝えてくれる。なによりも花をいけた櫻子が感動していた。花道の本質に触れたのだろう。

櫻子を選んだ花は朱鷺芍薬しよじやくやくと斑入葉ふりはいはの紫蘭むらさきらん。折り鶴に似た器に乗って空を飛んでいるようだ。お茶は冷煎茶。使われた水は近藤さんが大峰山から持ち帰って下さった「ごろごろ水」。菓子には「青洋」青山洋子あやまろこさんがこの日のために作った「潤」うるむ。丁寧に削られた青竹の楊枝を添えて。





水生華を終えて 櫻子

近藤さんの銀滴碗ぎんたつわんを初めて拝見して手に取った時、零れ落ちる様な水滴が表現された美しき器に驚きました。

自然が生み出す一瞬の造形のような姿が銀の滴たぎとなって表れ、焼きものとして完成されていました。今までに見たこともないような作品でした。

ガラスインスタレーションも溶けていく水に見立てた作品でした。儂ほろく溶けて追いかけても追いかけても消えていく美しい雪の結晶けつしょう。どんな花が似合うかしら。

この器のように繊細で、出逢う事の少ない特別な花。敬意と愛情を込めていけたと思う。

ずっと想い描いていた夢を実現出来た三日間でした。

氷達こぼりに包まれて、木や花達がしなやかに力強く咲いてくれました。水生華せいせいけに関わって下さった方々の想いが、花と器と家を生き生きと輝やかせたのだと思っています。



## 季節の洋と和 櫻子

カットガラスにいける

△10頁の花▽

花材 向日葵(菊科)

アンズリウム(里芋科)

ヒペリカム(弟切草科)

花器 カットガラス花瓶

宗全籠にいける

△11頁の花▽

花材 竹島百合(百合科)

珍至梅(薔薇科)

下野(薔薇科)

岡虎の尾(桜草科)

花器 宗全籠 手なし

10頁のガラス花瓶は口が広く、厚みがあつてかなり重い。このガラス花瓶も11頁の籠も、どちらも夏むぎの涼を感じる器だが、一方は重量があり、一方は軽いので、おのずといける花もそれなりのものを選びたい。

ガラス花瓶にはアクリルの石を入れ、剣山を使って重厚な感じにしている。大好きな八重咲きの向日葵を主に、臙脂色のアンズリウムと赤い実が可愛いヒペリカム。色の組みあわせを楽しんだ。さらに、明るい緑色を加えたくて、アクリル製のランチョンマットを敷いている。



宗全むねぜん籠は江戸時代前期の茶人、久田ひさだ宗全が作った置籠おきかごで、本来は篠の手が付いている。籠の中では安定がいい方なので、竹島百合もすっかり受け止めてくれる。その足元には軽やかな珍至梅、下野、岡虎の尾を選んだ。籠の雰囲気に合わせて野趣を感じる花で統一している。

両方の写真を見比べてみる。花器はそのまま、左右の頁の花だけを入れ替えたところを想像してみると、どちらも微妙な違和感を感じてしまう。重量的なバランスだけではなくて、自分が表現したい雰囲気との違和感。

表現したいものが何なのかはつきりしていれば、それにあつた器を選ぶべきだし、花材のとり合わせもそれに随したがえばいい。洋花・和花という区別よりも、花の風情を統一することを心がけたいと思う。なかなか難しいけれど、とても大切なこと。

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2015年  
8月号  
No.626

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





## 為朝百合

△表紙の花▽ 櫻子

「立華時勢粧」には花材について詳しく解説されていて、その中に為朝百合も出てくる。そこには「為朝百合。鬼ゆりに対して名付く。富士ゆりとも、うたゆりとも所に替わりて名異なるなり。」と書かれている。為朝とは平安時代末期の武將、源為朝のこと。鬼にも勝る鎮西八郎ちんせい、はちろう為朝の勇ましさにあやかした命名だろうか。

現在の植物図鑑で調べると、タメトモユリは伊豆諸島に咲くサクユリのことである。とても大きく咲く百合で白色大輪のカサブランカの母種らしい。源為朝は伊豆に縁があるためそう呼ばれてる。

しかし、現在京都で為朝百合と呼んでいるのはサクユリではなくて表紙にかけた百合をさす。黄色い帯に赤い斑点はヤマユリに似ている。おそらく古くからヤマユリの一種を京都周辺で栽培し、為朝百合と呼んでいたのだろう。この百合の美しさと風格は、人気絶大な人物の名をつけるのに相応しいと思う。

為朝百合の名がつけられた二つの百合。豪傑の武勇伝を語り継ぐということも、今ではなくなりつつあるけれど、花を通して古の時代の空気を想像するのは面白い。いつか伊豆諸島の為朝百合にも会いに行ってみたい。

花材 梅花躑躅（躑躅科）

為朝百合（百合科）

唐糸草（薔薇科）

花器 飴色釉花瓶



## ブルーベリー

△2頁の花▽ 櫻子

ブルーベリーは夏櫛と同じ躑躅科・酢の木属の低木で、原産地は北アメリカ。近年、果樹として日本でも栽培が盛んになってきた。

私も数年前に、ブルーベリー狩りをしたことがある。熟した果実を夢中で集めるのは楽しかったが、上を向いて採るので、帽子をかぶっていても鼻の頭が日焼けして暫く痛かった。

撓たわわに稔たった実はとても健康的で、太陽のよ  
うなファッションピンクの薔薇とよく似合っ  
ている。トルコで買ったブルーの絵柄の花瓶にも  
ピッタリと合った。赤紫色のアンズリウムを加え  
て、実が熟した色を想像して楽しんでる。

花材 ブルーベリー（躑躅科）

アンズリウム（里芋科）

薔薇（薔薇科）

花器 トルコ花文陶花瓶



## 花摘み

櫻子

少しでも涼を感じるようにと、白竹の平籠に付けてみた。タニワタリノキとミヤマナルコユリで緑の繁みをつくって、その間から小さな花たちを覗かせる。籠に野菜を盛るような感覚で付けてみた。こんな野の花を集めたようないけばなも好きなのだ。

最近、庭木や花の手入れをするようになった。米の磨ぎ汁も活用している。庭の草花が元気に伸びると、玄関の掛け花などにいけたりできるので嬉しい。

野の花を摘む楽しさは、太古からの遺伝子に書き込まれているのではないかと思う。摘み草料理が人気があるのも頷ける。自然の中で宝探しをしているような感覚。それによって、心と体がよくなる感覚を、私達はきつと生まれた時から持っているのだ。

作例のタニワタリノキも、数年前に岡山の先生が庭から切っていけておられたので初めて知った花だ。不思議な白い球形の花だが、もとは南国の谷間や湿地の植物とのこと。今回は花屋に売られていた。他の花も、花屋さんで目に付いた花たち。これも私の花摘み。

花材 姫百合 (百合科)

姫金魚草 (胡麻の葉草科)

谷渡の木 (茜科)

深山鳴子百合 (百合科)

赤花歌仙草 (菊科)

花器 楕円形平籠 (公長齋小萱)

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2015年  
9月号  
No.627

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





紅満作べにまんざくと白い蘭

〈表紙の花〉 櫻子

徳島県内の洋蘭園でつくられた新品種。東洋的な風情を感じたので、季節の枝と合わせてみた。花器の銀彩と白い蘭、金彩と葉の色づきがそれぞれ調和してくれた。

花材 丸葉の木・紅満作(満作科)

蘭「ホワイト・フェアリー」(蘭科)

鶏頭(莧科)

花器 黒地金銀彩陶花器

柴栗しばぐりと鉄砲百合

〈3頁の花〉 櫻子

「美白」という鉄砲百合は蕾が雪のように白く、不思議な存在感がある。栗の枝を広げ、野の花と挿すと、草木を照らす月光のように見えてきた。

花材 柴栗(山毛櫨科)

鉄砲百合「美白」(百合科)

金水引(薔薇科)

ポリゴナムの赤花(蓼科)

花器 青色釉陶花瓶

## 花フオーラム（in倉敷）

### 竹取物語 櫻子

今日は皆さんをいけばなで竹取物語の世界へお連れしたいと思えます。

「竹取物語」は文章というよりも、絵としておぼえていらっしやる方が多いのではないのでしょうか？

最初の竹林の中で翁がパーと光る竹を見つげる場面。

クライマックスの、月の世界の御使いが降りてきて、かぐや姫がのぼっていく場面。絢爛豪華。にしき絵のような。印象に残りますよね。

子供のころ絵本で読んで、その美しい場面にほれ惚れしたという方も多いのではないのでしょうか。

今舞台では竹の大きな提灯にグロリオーサのあかりが灯っていきます。百合の仲間の花ですが、まるでかがり火のように舞台を照らしてくれます。

そして竹林には夏の美しいもみじが生けられていきます。

緑の濃淡、波打つ竹林の美しさ。風を感じるように。竹林に翁が入って行く様子を皆さんにも感じていたできたと思います。

桑原専慶流にも竹の翁のような方が居て、綺麗なこの竹を切ってきてくださいました。竹をいつも大切に扱っておられるので、こんな提灯の形や窓の開いた竹を作る事が出来るのだと思います。いつも本当にありがとうございます。

「竹取物語」は、仮名文字で書かれた日本最古の物語といわれます。

成立は9世紀終わりから10世紀はじめとされますが、正確な成立年も作者も、わかっていません。

ただし漢文や和歌や仏教の知識がないと書けない文章ですから、作者はかなり身分の高い教養人であろうと思われます。

また、かぐや姫が帝の求婚をはねのけてしまふなど反体制的な内容が強いことから、当時権力を握っていた藤原氏方の人間ではなく、たとえ僧侶などではなかったかと推測されています。

「竹取物語」のお話は大きく三部に分かれます。

第一部では、翁が山奥でかぐや姫を見つけ、育てる。3か月で大きくなって、きれいな娘さんになるところまで。

第二部は、貴族たちの求婚です。なんと美しい、私と結婚してください。迫る5人の貴族に、かぐや姫は無理難題を押し付けます。

無理難題を押し付けられた貴族たち、ある者はニセモノを作らせ、ある者は金にまかせて中国の商人から取り寄せ、ある者は途中で懲りてほつぽり出し…

いずれもうまくいかず、結婚はできません。

第三部では、いよいよかぐや姫の

うわさが帝の耳に届きます。

そんなに美しい娘がいるのか。ぜひ妻に迎えたいといってくる。しかし、かぐや姫は帝の求婚も拒否。

最後は御使いが迎えに来て、かぐや姫は昇天し、月の世界に帰って行くという、おなじみの筋書きです。

今舞台の中央では翁が白く輝く竹を見つけた時の情景をシマアシとダンクで印象的に表現しています。

翁は野や山に出かけては竹を取ってきて色んな道具を作っていました。

筥、竿、箆、籠、筆、箱、筒、箸、皆さん、お気づきでしょうか、これらの漢字は全て竹かんむりの字です。今日演奏して下さっている箏も竹かんむりがついています。竹と縁が深いのです。

それ程竹を熟知して大切にいられた翁だからこそ、かぐや姫に出逢えたのだと思います。

「源氏物語」には「竹取物語」の影響が強くうかがえます。

源氏物語は平安時代半ばに書かれた物語です。

「源氏物語」17帖「絵合」の章では竹取物語について語られています。

どんな風に語られているのでしょうか？そしてどんな場面でしょうか？

絵合わせとは、宮中のお遊びとして左右のチームに分かれて、互いに

絵を見せあいます。平安時代に貴族の間でおこなわれました。そして優劣を競うわけです。

冷泉帝は絵を好み梅壺の女御の絵を愛好しました。梅壺の女御とは、光源氏の養女で冷泉帝の寵愛を受けておられますが、先に女御としておられた権中納言の娘の弘徽殿の女御もライバルです。帝の寵愛は、どちらも甲乙つけ難いのです。

親である光源氏と権中納言の見守る中、両陣営による帝の前での絵合がわが行われました。

その場面に「竹取物語」の絵巻物が出てきます。

「物語の出で来はじめの祖なる竹取の翁」と紹介されます。

唐錦の縁がつけられてあつて、赤紫の表紙、紫檀の軸で上品な絵巻物です。

絵巻物を鑑賞しながら互いが批評しあいます。ちよつと意地悪な感じですか。お聞きください。

「竹取の老人と同じように古くなった小説ではあつても、思いあがった主人公の赫耶姫の性格に人間の理想の最高のものが暗示されてよいのです。卑近（ひんじん）（俗っぽい事）なことばかりがおもしろい人にはわからないでしょうが」

とある方が言われますと、別の方が、「赫耶姫ののぼつた天の世界というものは空想で作られたものです。この世の生活の写しであるところはあまりに庶民的すぎて美しいものでは

ありません。貴族は多く出てくるのに宮廷の描写などはすこしもないです。

はありませんか。赫耶姫は竹取の翁の1つの家を照すだけの光しかなかったようですね。貴族の若者が大金で買った毛皮がめらめらと焼けたと書いてあったり、にせ物をもって来てごまかそうとしたりと不愉快な事はかりです。」

こんな事を言い合いながらいつまでも中々勝負が決まりません。

結局最後は光源氏の出した絵に誰もが息を飲みました。須磨の風景が描かれたその絵には、源氏が過ごした住まいや海の様子が余す所なく表され、趣深い歌まで添えられていた。

それまでに出された絵のことは全て忘れ去り、人々は、この絵に心を奪われてしまいます。

絵合わせは、光源氏の勝利となり、敗れた権中納言は、娘に対する帝の寵愛が損なわれるのではないかと危惧するのであります。

千年以上前に書かれた長編小説の源氏物語にもこのような形で現れています。

こんな風に竹取物語はその後の日本文学にも大きな影響を与えています。

皆さんにかぐや姫が見えてくれましたか？…輝く光のようなものが見えてこられましたでしょうか。



岡山県本部主催 花フォーラム  
 花 HANA 音 OTO コラボレーション  
 会期…7月12日(日) 会場…ライフパーク倉敷  
 花…桑原仙溪・桑原櫻子 箏曲…山路みほ  
 入場者…260名 公開いけばな教室…20名



## オクラとパニカム

△10頁の花▽ 櫻子

オクラはアフリカ原産の多年草だが、寒さに弱いため日本では一年草として栽培される。ちなみにオクラは英名。パニカムは黍属きびにつけられた名前で、アメリカ原産のいくつかの品種が切り花になっている。脇役としてとり合わせに加えると、季節の風情が深まる感じがする。

赤いオクラをパニカムの中に入れて、優しい表情になってくれた。

花材 オクラあむぎ（葵科）

パニカム（稲科）

薔薇「カルピデュム」

（薔薇科）

花器 トルコブルー手付陶花器



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2015年  
10月号  
No.628

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 籠花

△表紙の花▽ 櫻子

秋の草花が出揃う頃になると籠に花をいけたくなる。

掛花も投げ入れも籠に代わり、又果物や南瓜、さつま芋も暫く籠盛りにして眺めている。

この竹籠は昔から家にあるものだが、唐人笠籠花入とうじんかさかごはないれという籠に似ている。韓国の人がかぶる帽子を逆にしたような形から唐人笠と呼ばれる。

この籠には蔓つるの手が付いているので固苦しくなくどんな花でも気軽に飾っている。前方にやや傾いているような形で口元にもたっぷりの葉を添えられる。

秋明菊しゅうめいぎくと鳥兜とりかぶと、どちらも綺麗に咲く時季の短い季節の花だ。紅葉し始めた楓を添えた。

花材 秋明菊（金鳳花科）

鳥兜（金鳳花科）

楓（楓科）

花器 手付唐人笠籠



◆横から見た、いけばなの奥行き。



コスモス

桜子

今では日本の秋を彩る花の一つになったコスモス。でも、元を辿るとメキシコの植物だ。メキシコ原産の花にはほかにもタリア、ポインセチアなどが馴染み深い。

メキシコというと熱くて乾燥したイメージを持つが、首都メキシコシティの標高は二千メートル以上あり、昼と夜の温度差が大きい。コスモスは雨季から乾季へ変わる9月から10月に咲く野の花だ。

マリアッチのギター演奏のように、情熱的にコスモスをいけてみるのもいいかもしれないが、今回は日本の里の風景に溶け込んだ花としていけてみた。ただし和花と上下に分けて、印象的に見えるようにした。

花材 コスモス(菊科)

雪柳(薔薇科)

桔梗(桔梗科)

ピンポン菊(菊科)

花器 条文陶花瓶

◆横から見た、いけばなの奥行き。





ネリネ アナベル 櫻子

アナベルは北アメリカ原産のアメリカノリノキの園芸種。白い装飾花が半球状に咲いたあと、作例のように緑色に変わって枝に残る。ちなみにカシワバアジサイも同じ北アメリカ原産。また、花序の大きなピラミッドアジサイ（ミナツキ）は東アジア原産のノリウツギの園芸種だ。

ネリネは南アフリカ原産の球根植物で、日本や中国に分布する彼岸花やリコリスと同じヒガンバナ科だが、属は異なる。

私達は現在、昔よりも多くの花をあたりまえのようにいけられるようになったけれど、それらの原種の生態や、栽培のご苦労を知っておきたいと思う。それが一つ一つの花への愛着につながる。

ネリネの茎も生かすようにシンプルな構成にしてみた。

花材 ネリネ（彼岸花科）

アナベル（紫陽花科）

花器 角柱陶花瓶（宮下善爾作）

◆横から見た、いけばなの奥行き。





ぶらさがる

△2頁の花▽ 櫻子

春には美しい花の房を下げていた藤も、秋になると剝離な長細い実が蔓にぶらさがっている。藤棚であれば、さしずめ自然のシャンデリア、ではないにしても、見ていて楽しい気分になる。

とは云え、これだけ沢山ぶらさがった枝をいけるのは容易ではない。重量バランスを考えつつも、花は前方へ出すことで、藤の実のボリュームに負けない奥行きをつくる。

取り合わせには4色のピンポン菊を選び、藤色の杜鵑をたした。藤の実にカラフルなピンポン菊がよく似合っている。

花材 藤の実(豆科)

ピンポン菊4色(菊科)

杜鵑(百合格)

花器 市松模様陶花瓶

◆横から見た、いけばなの奥行き。



## しなりの美

△3頁の花▽ 櫻子

頭こえを垂れる稲穂を見ると、自然の恵みに感謝の気持ちが湧いてきて、心の中でこちらも頭を下げています。

今年も新米の季節がやってきた。

この時期、花屋にも少量の黒米が売られる。赤米や黒米は古代米と名付けられてから栽培が増えてきたそう。うだ。いけばなでも独特の存在感が出せる花材だと思う。

私達の命の糧かて、その元の姿を愛でることもまた、心の糧となつて、より深く自然との関わりを感じる事ができる。

相手には、同じくしなる姿の上臈じょうろう杜鵑ばけいに大輪のピンクの菊を選んだ。

垢あか抜けた華やかさと可愛さを兼ね備えた菊は、恵みへの感謝の気持ち。

花材 上臈杜鵑じょうろうばけい(百合科)

黒米(稻科)

菊「飛驒マム」(菊科)

花器 籠花入(桑原健一 作)



◆横から見た、いけばなの奥行き。

## 赤芽柳

△表紙の花▽ 仙溪

花型 生花 草型 留流し

花器 耳付銅花瓶

赤芽柳は別名をフリソデヤナギ(振袖柳)とも呼ばれ、花芽が大きくなつて、赤い芽鱗片が落ちたあとの花穂はいかにも春らしい。

しかし、生花にいけるなら、まだ花芽が小さくて固い初冬がいい。

日の当たる側、いわゆる日表ひおもては、枝肌も花芽も赤みが強いので、日表の側が手前になるようにいける。

本数多くいけるなら、銅器がよく似合う。

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2015年  
12月号  
No.630

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 役目を終えて

△表紙の花▽ 櫻子

ノイバラや鈴バラが終わる頃、立ち姿のバラの実が少しだけ出回る。美しい花が咲き終わり、これだけ沢山の実をつけるには、株はかなりのエネルギーをつかうのだろう。

丈は短い、実は大粒で艶々としていて美味しそう。でも実際は食べても種ばかりで野鳥も見向きもしない。餌の少なくなった冬の頃仕方なく食べるらしいが。

グロリオサとアンスリウムの葉は片方に寄せておき、反対側にバラの実をかためて釣り合いをとっている。赤い器に、赤い実と赤い花。そこへ白いアマリスを立てると12月らしい雰囲気になる。

花材 アマリリス（彼岸花科）

グロリオサ（百合科）

薔薇の実「センセーション」

ルファンタジー」（薔薇科）

花器 赤色釉花器

◆横から見た、いけばなの奥行き。







季節感ととり合わせ

櫻子

色鮮やかな実がたわわについたマユミ(檀)の枝。まさに季節の輝きそのものだ。黄色の嵯峨菊で華やぎを加え、白椿で品良くまとめた。花器の紫色も格を高めてくれている。

作例の3種の花材と器。この4つのとり合わせのどれか一つが別のものになれば、違う雰囲気はいけなくなるだろう。この組みあわせがベストとは思っていない。でも私が出したいと思った晩秋の色合いは出せないかと思っ

たのじゃないかと思っっている。マユミと白椿は組みあわせの定番だが、そこに鮮やかな黄色でしかも可愛らしさを備えた季節の花を加えたかったのだ。嵯峨菊がとてよく似合うと思う。

花材 檀(マユミ)  
(錦木科)

椿(ハナツバキ)  
(椿科)

嵯峨菊(シロキリ)  
園芸種 (菊科)

花器 紫紅釉花器

◆横から見た、いけばなの奥行き。





プリンセチア 桜子

ポインセチアが花屋さんの店先に並ぶと、ああ、もう12月なんだなと気づかされる。最近はクリスマスカラーのポインセチアばかりでなく、白やピンクの花も作られるようになった。

今年とても綺麗な色だなと買い求めたのはプリンセチアという品種。華やかなピンクの葉が隙間なく広がる新品种だ。軸も長いので、鉢植えから切り取り、オンシジウムと投げ入れにした。

メキシコ原産。トウダイグサ科のユーホルビアの仲間なので水切りして、切り口から白い樹液を流してかからいけると、良く水を吸い上げて日持ちしてくれる。暖かな場所に飾りたいクリスマスマスの花。

花材 ポインセチア（燈台草科）

オンシジウム（蘭科）

花器 金彩ガラス花器

◆横から見た、いけばなの奥行き。





横から見た奥行き

新春の彩り  
の花▽ 櫻子

△3頁

こんなに大きな仏手柑をいけるのははじめてだ。家元に頼んだら丈夫な枯れ枝に乗せる形で花器にとめてくれた。びくともしない。

仏手柑は文人的ないけ方が多いけれど、私は明るくモダンにいけたい。3色のバンダと白椿の組み合わせで、新春の彩りを。

花材 バンダ3色(蘭科)

仏手柑(蜜柑科)

白玉椿(椿科)

花器 陶コンポート(柳原睦夫作)



## カトレア

△11頁の花▽ 櫻子

徳島県の蘭栽培園からカトレアをいただいた。カトレアは栽培が難しく、また切り花は花だけが切られるのでとても短く、いけるのはカトレアホルダーが必要となる。

いただいたカトレアはバルブ（親茎）つきで立派な葉もついている。大変貴重なものなのだ。

カトレアの色が映えるように、濃紺のガラス花瓶と南京櫛の白い実を選んだ。

見事な大輪の鮮やかさは、まさしく蘭の女王だ。

花材 南京櫛（燈台草科）

カトレア（蘭科）

ミリオクラダス

（百合科）

花器 濃紺ガラス花瓶

（コスタボタ製）

横から見た奥行き





### クロコダイルフアーン

△3頁の花▽ 櫻子

花材 クロコダイルフアーン

(裏星科)

カザリシダ (裏星科)

ガーベラ (菊科)

花型 盛花

花器 陶コンポート

羊歯の仲間を2種類一緒にいけてみた。後ろに2枚左右に立てたのがクロコダイルフアーンで、まさに鱗皮のような凹凸がある。手前2枚と後方に入れたのがカザリシダの一種で、尖った葉の付き方が左右交互にギザギザに付いていて格好いい。クロコダイルフアーンだけだと夏向きのいけばなだが、濃い緑色のシャープな形のカザリシダを加えることで、冬の部屋にもしっくりと馴染む。観葉植物の葉を2種組み合わせることで、表現できる雰囲気というものもあることに気付いた。今後いろいろ試してみたい。

横から見た奥行き





バンダとカーネーション

櫻子

先日雪柳とバンダをいける機会があった。枝の姿が自由に広がる真っ白な雪柳と濃いピンク色のバンダを取り合わせると、今年の満開の桜を思わせるように華やかに。

バンダは、東南アジアやオーストラリアで育つ蘭で、樹木や岩肌に根を張り付けさせて伸びていく着生植物である。上へ上へと伸びて大きな姿になる。野生の原種を原産地で見てもたいと思ってしまう花だ。

長く伸びた気根から空気中の水分を吸ってくれるので、花器に収めずにそのままの姿を飾ることもでき、時折霧吹きで水をかけてやると立派な姿で美しく花を咲かせた。

花会が終わった後も家に持ち帰り、飾っているが、途中で花茎から折れてしまった花を食卓に。小さな姿になっても、花器の水が新鮮で澄んでいれば生き生きしてくれている。

元気がないときに、この花を見ると気持ち晴れやかになるのは、きっとこの花が美しい鳥が飛び交う樹林の緑と強烈な太陽の輝きを想像させるからだと思う。

花材 バンダ2種(蘭科)

カーネーション(撫子科)

手毬草(撫子科)

花器 アンティーク・ガラス花器

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2016年  
3月号  
No.633

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 桃とアナスタシア

△表紙の花▽ 櫻子

花材 桃 (薔薇科)

菊 品種名アナスタシア

(菊科)

花器 飴色釉陶壺

桃といえば菜の花と取り合わせる事が多いが、今回はアナスタシア(大輪菊)といけてみた。

アナスタシアは一年中出荷されているようで、見慣れているけれども毎回その見事な咲き方には驚く。満開の状態で出荷されるので花が痛まないように一つずつネットで包んで守られている。固い蕾から咲く菊とは随分イメージも違うが、日持ちはそれほど変わらない。

おお振りで伸びやかな満開の花桃にも負けない力強さだ。桃の花がアナスタシアと美しさを競い合って、より美しく感じられる。



横から見た奥行き





## 春の草花

△3頁の花▽ 櫻子

花材 薇(げい)(ぎんまゐ 薇科)

ラッパ水仙2種(彼岸花科)

スイートピー(豆科)

青麦(稲科)

花器 小判型陶水盤(伊藤典哲作)

春先になるとよく使う食器に乾山(けんざん)写し春草紋向付(むかうつけ)というのがある。

スマシレやワラビ、ツクシが描いてあって色絵の焼きものではないのに、その器に春のお料理を盛るとぱっと華やかで美味しそうに感じられる。

いけばなでもゼンマイやムギを添えるとほのぼのとした春の暖かさを感ずるような季節感あふれる花になる。

実際に里山に行きゼンマイやワラビ、コゴミなどを摘むこともないし、自然の中ではその区別にも自信がないが、やっと訪れた待ち遠しかった春を料理でも花でも実感したい。

横から見た見た奥行き





## エピデンドラム

△2頁の花▽ 櫻子

花材 エピデンドラム4色(蘭科)

スイトピー2色(豆科)

たましだつるしだ

玉羊歯(蔓羊歯科)

花器 粉引陶水盤(伊藤典哲作)

色鮮やかなエピデンドラムを伸びやかに出して、スイトピーは水際近くに前方へ集めるようにいけている。広がるものと集まるもの。この対比がいけばなに躍動感を与える。

ピンクの濃淡と紫の濃淡。そこに黄色を効かせて。淡い春の花色で絵を描くようにいけた。

横から見た奥行き





### キンクサリ

△3頁の花▽ 櫻子

花材 金鎖きんせき(豆科)

ギガンチウムギガンチウム(百日科)

花器 ブルーガラス花瓶

(ヨーラン・ヴァルフ作)

大好きな花の一つ、キンクサリ。ヨーロッパ中南部原産で藤に似た黄色い花が房状に垂れ下がる。寒冷地ではかなり大きく育つそう。安定のいいガラス花瓶に挿して紺色のバックに置くと、黄色い花が鮮やかに浮かび上がった。

キンクサリには十分な葉がついていたので、相手には大きな紫色の玉のように咲くギガンチウムを2本選んだ。反対色の紫色が黄色をさらに印象的にしてくれた。



ラナンキュラス 櫻子

花材 連翹(木犀科)

ラナンキュラス8色(金鳳

花科)

菜の花(油菜科)

花器 中近東手付花器

シャルロット、オーロラ、ハーマイオニー。ここにいたラナンキュラスの品種名だ。さてどれがどれでしょう。

ラナンキュラスは地中海原産。花びらの枚数が多いのが特徴で玉のように大きく咲く。普通は単色なのだが、シャルロットは色の濃淡が絶妙だ。数年前から市場に出ており、値段も高いが花持ちもいい。

そして今年はじめに見たオーロラとハーマイオニー。どちらも花卉がフリル状に縮れている。

春の太陽のような連翹の太枝に8色のラナンキュラスを添わせ、葉が厚く茂った菜の花で水際を隠した。

微妙な花色の変化が、地中海の碧海と空の色をした花瓶に美しく映える。

横から見た奥行き



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2016年  
5月号  
No.635

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## カーネーション

△表紙の花▽ 桜子

花材 カーネーション3色

(撫子科)

シゲレープ(蓼科)

五月で十五世家元襲名から十二年になる。その同じ年の八月に母が亡くなった。今も多くの人の思い出の中に母はいてくれる。お弟子さん達のいけばなの中にも母の教えは生きている。

「大切なことは何度も何度も言っ  
てあげたらいい」繰り返し繰り返し、  
丁寧に指導していたが、私も同じこ  
とをしているようだ。そんなことを  
思いながら、優しい色合いでカー  
ネーションをいけた。

横から見た奥行き





藤ふじ  
牡丹ぼたん

へ2頁の花▽ 櫻子

花材 藤(豆科)

牡丹(牡丹科)

花器 掛分袖大壺(清水保孝作)

藤の切り枝、牡丹の鉢。花屋で出逢った特別な花を、直感をたよりに大きな壺にさらっとつけた。藤も牡丹もめつたにいけない。どちらも水揚げが難しい。経験と判断力が要る花だが、いける度に自然の奥深い美しさに少し近づけたかなと思う。

横から見た奥行き



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2016年  
6月号  
No.636

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





おおよまれんげ  
大山蓮華

△表紙の花▽ 櫻子

大山蓮華は山に咲く蓮に似た白い花で、奈良の大峰山系などの自生地では国の天然記念物に指定されている。5～7月の梅雨時期に開花する。深山の林間に野生し簡単には見る事が出来ないで「天女花」とも呼ばれている。枝は分岐し幹は直立しない。

花は横を向いて咲く。同じモクレン科の木蓮や朴の木は大きな花が真上を向いて咲くのに、この花は不思議だ。蜜を出して蝶や蜂をおびき寄せるような事はしないらしい。そのかわり白く可憐な姿と素晴らしい香りだけで、虫も人もとりこになる。

この花は花屋で買い求めたのだが、多分中国原産の園芸種で、ホオノキとオオヤマレンゲの雑種であったウケザキオオヤマレンゲだと思う。ホオノキに似て葉が大きく成長が早いので出荷できるのだろう。それでも一年に一度出逢えるかどうかの花。無垢な美しさを鉄線と合わせてみた。



岐阜花フェスタ記念公園にて  
横向きの花を上に向けて撮った



花菖蒲と紫陽花

ハ3頁の花

櫻子

花材 花菖蒲 (菖蒲科)

紫陽花 (紫陽花科)

花器 カットガラス花器に立てた沢山の

白い花菖蒲。大輪ビシクの紫陽花と

の色と量感のバランスを楽しんだ。

美女二人と貴公子達？。



ネオレゲリア 櫻子

花材 ネオレゲリア・アネックス

(パイナップル科)

胡蝶蘭(蘭科)

花器 ガラス花器

胡蝶蘭と取り合わせているのはネオレゲリア。熱帯から亜熱帯アメリカに分布するパイナップル科の着生植物。薄いピンク色に色づいているので花のようだが、硬い葉がこの様な形を作っている。花は株中心の筒部分に咲くが、あまり目立たないので葉が花の代わりをしているようだ。

4月の岡山での流展でもネオレゲリア・レッドパウワウとアマリスの投げ入れをいけさせていただいた。このネオレゲリアの花は赤紫色の子株を沢山つけた形で面白く、変化がつけやすかった。エアープランツに近いので、水に浸けなくても良いが、中心部の筒に水を溜めるように与える。もともと真上を向いている植物なので、前に向けていける事は溜め込んだ水がこぼれてしまうから、迷惑な事だろうなと思いつつながら霧吹きで朝晩水をやり続けた。花会の間は寝ても覚めても花のご機嫌を伺いその変化を眺める事ばかりだ。胡蝶蘭も流展が終わってから松村先生から頂戴した。岡山産の切りたての花だったので、京都に持って帰らせていただいた。60℃程のお湯の中で水切りしてもと通りに。一ヶ月以上もの間美しく元気で嬉しかった。岡山流展の思い出に何度も浸りながらこの花を見つめている。

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2016年  
7月号  
No.637

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## フアーン (シダ類)

△表紙の花▽ 櫻子

花材 デイサ3種(蘭科)

アンブレラ・フアーン

(羊歯科)

擬宝珠(百合科)

花器 ガラス鉢

オーストラリアにはユーカリ、プロテアやピンククッション、リュカデンドロン、カンガルーポーのようなオーストラリア固有の花であるワイルドフラワーがあり、普段のお稽古にもよくいけさせてもらっている。又最近ではユニークなグリーンの種類も増えてきた。

フアーンと呼ばれるシダ類は原生林の高木の下に一面に広がるように自生している。

今回初めて使ったアンブレラフアーンは輪生の広がりを持つシダで、日本の山野草にもよく似合う。そして大変強いので二ヶ月以上も取り合わせを替えて飾って楽しんだ。

南アフリカに自生するデイサという名前の蘭の花。これも海外から輸入されたもの。日本での栽培はとて難しいらしい。斑入り擬宝珠を加えて三種でいけたが、それぞれが違和感無く馴染んでいる。



## パイナップル

△3頁の花▽

櫻子

花材 パイナップル

(パイナップル科)

オクロレウカ(菖蒲科)

薔薇(薔薇科)

花器 赤色ガラス鉢

形は松笠に、味はリンゴに似ているところからパイナップルとアップルでパイナップルだそうだ。美容と健康に良い栄養素が多く含まれて、夏ハテにも効果的。そんなパイナップルに感謝をこめて同系色の薔薇と盛花にした。オクロレウカをエネルギーッシュに広げて。



第 49 回 日本いけばな芸術展    テーマ「みらい、かける。」    5月11日(木)～16日(月)    大阪高島屋7階

5人合作

花材／虫狩    オーク    芍薬 数種    花器／焦茶色陶花器、黒釉陶花器2鉢    竹内眞三郎作    (写真④)

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2016年  
8月号  
No.638

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元







## エレムルス

△表紙の花▽ 櫻子

花材 エレムルス(百合科)

トルコ桔梗(竜胆科)

モンステラ(里芋科)

花器 陶花器(市川博一作)

エレムルスはイラン、アフガニスタン、ヒマラヤ等に分布する宿根草。英名はデザートキヤンドル(砂漠の蠟燭)またはフオックスステイルリリー(狐の尻尾百合)。1本に300から500の花をつけ、高さ2mになるものもある。

花色は黄色を中心に、オレンジ、白、サーモンピンクなど。5月から7月頃に出荷される。

以前、飼った猫のレモンちゃんが野良猫と喧嘩したとき、相手を威嚇するために尻尾がいつもの何倍にも膨れていたのを思い出す。表紙の満開のエレムルスはまさにその時の尻尾みたい。きっとエレムルスも乾燥地の厳しい環境に負けないぞ!と咲いてきたのではないかしら。

横から見た奥行き





クルクマ3色

△2頁の花▽ 櫻子

花材 クルクマ3種 (生姜科)

向日葵 (菊科)

ミリオクラダス (百合科)

花器 練込陶花器

クルクマの小輪種は優しいイメー  
ジ。夏には爽やかな白花を主に。

横から見た奥行き



ヒマラヤの百合

△3頁の花▽ 櫻子

花材 百合「クシマヤ」(百合科)

京鹿の子 (薔薇科)

羽団扇楓 (楓科)

花器 陶花瓶 (鈴木爽司作)

ヒマラヤの百合「ネパレンセ」の  
改良種「クシマヤ」。淡緑色に臘脂  
色が入る。神秘的で美しい百合だ。

横から見た奥行き



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2016年  
9月号  
No.639

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



囁くような・・・

△表紙の花▽ 櫻子

花材 竹似草（芥子科）

女郎花（女郎花科）

大手蓼（蓼科）

花器 白黒陶花瓶

山の林道脇などの日当たりの良い場所に背高く白っぽい姿で群生するタケニグサ。

初秋の秋草ととり合わせると、力強い姿が目立つ存在だ。

葉の形も複雑で、裏側が白く、とても柔らかい。ケシ科の毒草なので、鹿にも食べられず伸びやかに育つたようだ。

作例は実の出来た状態でいけているが、カシヤカシヤと静かな音が感じられる。ささやきぐさ「囁草」と呼ばれる所以。

茎が竹のように中空なので「竹似草」。竹と一緒に煮ると竹が柔らかくなり細工しやすくなるので「竹煮草」ともいわれるらしいのですが、本当でしょうか？

横から見た奥行き





月桃 げつとう

へ2頁の花▽ 櫻子

花材 月桃 しょうが (生姜科)

薔薇2種 (薔薇科)

ミリオクラダス (百合科)

花器 赤色釉花器

ゲットウの実を見てキャンディを想像する人は多いと思う。とても不思議な形をしている。去年の6月初旬、屋久島でゲットウの花に出逢った。白い蕾の先がほんのり赤くて、中国絵画に出てくる桃が頭に浮かんできた。

月桃という名前も不思議な名前だ。なぜ月なのだろう。

沖縄ではゲットウの葉で餅を包んで蒸したムーチャーという菓子がある。葉の良い香りがするそうだ。いつか食べてみたい。

右・フイリゲットウの蕾。

左・ゲットウの花 (屋久島にて)





## 真主型の花

△3頁の花▽

櫻子

### 花材

唐胡麻 (燈台草科)  
とうごま (とうたいくさ)

鳥兜 (胡麻の葉草科)  
とりかぶと (ごまのあせう)

岡虎の尾 (椴草科)  
おかとらのおしり (あせう)

### 花器

青色釉花器

トウゴマ、ニューサイラン、トクサは真主型の花として小さい頃からよくお稽古した花で馴染み深い。子どもでも切りやすく挿しやすいからだろう。

トウゴマは長く直立した形にいけられることが多い。赤い茎や実が目立つようにかもしれないが、短く前に倒す形も軽やかで、葉を支える赤い茎が細くても力強いのがよくわかる。ヤツデに似た形の葉の葉脈も赤くて淡緑色を引き立てている。

うしろに高く立てるのではなく、前へ倒す花型。真主型では気がつかなかった姿を見つけた。

彩りを考え、トリカブト、オカトラノオと取り合わせた。



横から見た奥行き



南京櫨 なんきんはぜ

〈2頁の花〉 櫻子

花材 南京櫨(燈台草科)

鶏頭(莧科)

ピンクツシヨン

(ヤマモガシ科)

花器 デルフト焼陶花瓶

ナンキンハゼは白い実が印象的な花材だが、弾ける前の緑色の実も面白い。

作例では枝からぶら下がる実を造形としてとらえ、レモンイエローの鶏頭と鮮やかなオレンジ色のピンクツシヨンを取り合わせて、西洋の陶花瓶に付けてみた。

ナンキンハゼは中国原産。ピンクツシヨンは南アフリカ原産。ケイトウはインド原産。ある意味ミスマツチな出逢いでも、洋陶器に比べると違和感がなくなる。ただし花器の絵柄と花の色合いには注意したい。

横から見た奥行き





蓮台<sup>れんたい</sup>

△3頁の花▽ 櫻子

花材 蓮台<sup>れんたい</sup> (蓮科)

アンズリウム (里幸科)  
偽小判草<sup>にせごばんそう</sup> (稲科)

花器 白黒陶扁壺 (林平八郎作)

見た感じが渋く暗い印象の花材でも、とり合わせを工夫することで、意外に面白いけばなになることがある。

蓮台がその一つで、例えば蓮台に菊では面白みに欠けるが(菊の品種にもよる)、アンズリウムとは違った印象になる。アンズリウムは赤薄ピンク、グリーンと変化をつけ、さらにニセコバンソウ(西洋小判草、ワイルドオートツ)を加えると、全体に優しい雰囲気になる。

器の選択も重要なポイントだ。この白黒の花器は、まるで救世主のように花たちを一つにまとめてくれる。有難い特別で不思議な器だ。

横から見た奥行き







山保呂之

櫻子

花材 山保呂之の実(茄子科)

秋明菊(金鳳花科)

桔梗(桔梗科)

花器 陶花器

大好きなヤマホロシの実。自然な動きの枝が器に留まると、なんともいえない愛らしさを感じる。この愛おしい感じは何なのだろう。森の中で宝石を見つけたような感覚。ここに居るよという声が聞こえてきそう。

ヤマホロシはヒヨドリジョウゴとよく似ている。茄子の花を小さくしたような白または薄紫色の花が咲いたあと、実が緑色から黄色、赤色へと色づいてゆく。

作例のヤマホロシは、葉の形もなんだか可愛い。小さいのに、アピールがとても上手。

シュウメイギクとキキョウは充分に水揚げしておいて、さっといけた。

野山の風情だが、緑色の斑点の器にいけると、明るく飾っておける。花形は自然体で。

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2016年  
11月号  
No.641

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 梅擬と紫蘭

△表紙の花▽

櫻子

花材 梅擬（うめもじき）（繭の木科）

紫蘭（むらさきらん）（蘭科）

白椿（しらつばき）（椿科）

花器 耳付陶花瓶

梅擬の小枝を使って軽やかな投入にしたいと考え、色付き始めた紫蘭をとり合わせて、白椿で口元を引き締めた。

梅擬の艶やかな赤い実に白椿を添えると、凛とした美しさが生まれる。そこに紫蘭が加わることで雰囲気はずいぶん変わって見える。表情が柔らかくなり、優しさが加わる。

器も優しさを感じるものがない。ほんのり赤みのある温かな風合い陶花瓶を選び、朱の敷板に飾った。

横から見た奥行き





## ムラサキシキブ

櫻子

花材 むらさキシキブ 紫式部(熊葛科)

じょうたつこ 上臈杜鵑(百合科)

あきば 秋桜(菊科)

花器 陶花瓶

ムラサキシキブのような色の実ほ他にあるだろうか。独特の美しさがあつて好きな花材だけれど、とり合わせに悩む。でも今回のとり合わせは自分でも気に入っている。

紫とは反対色の黄色。そこに桃色が少し加わることで紫の鮮やかさが増した。

立ち上るムラサキシキブと垂れ下がるジョウロウホトトギスの形の対比も面白い。コスモスの優しい葉の緑が、紫色の小さな実の足元をほどよく包んでくれた。

濃色の艶やかな花瓶が、色彩の引き締め役になってくれた。

横から見た奥行き





赤い実に見た紅葉を

△4頁の花▽ 桜子

花材 鈴薔薇(薔薇科)

木苺(薔薇科)

薔薇(薔薇科)

花器 三足蓋付陶深鉢

赤い実に見た紅葉が重なる、互いの相乗効果でより強く秋を感じられるのに加えて、実と花だけでは表現できない華やいだ明るさを感じることが出来る。そしてなによりも実の表情が優しくなるような気がする。

秋色を際立たせようと、純白のバラをとり合わせた。子孫を残す実とやがて散る赤い葉と大きく咲こうとする花の対照が美しい。

3種の花材を料理するような気持で、鍋型の器に付けてみた。

横から見た奥行き





## 黄金の舟形花器

△3頁の花▽

櫻子

花材 ネリネ（彼岸花科）

檜鶏頭（舅科）

ドラセナ（竜舌蘭科）

花器 金彩舟形花器

この舟形の器は両親がニューヨークで買ってきたもので、「花ふたり旅」にも使われている。金箔で装飾が施された煌びやかな器だ。軽い器なので重たい花材は似合わない。白いネリネと檜鶏頭、赤い縁取りのドラセナを膨らみのある扇型にいてみた。

12月は赤と白の組み合わせをモダンにしていきたい。そんな時の為の器を普段から見つけておきたい。



スターリンジア

櫻子

花材 スターリンジア(フトモモ科)

ガーベラ2色(菊科)

ステンレス玉

花器 赤色ガラス鉢

この白い小さな玉はスターリンジアといい、オーストラリア原産のフトモモ科の植物だ。フトモモ科といえばユーカリが思い浮かぶが、他にもワックスフラワー、ブラシノキ、それにゲアバ、フェイジョアといった果樹などもフトモモ科の植物と覚えておきたい。

スターリンジアは赤や青に染められたドライフラワーのこともあるが、生の切り枝ははじめていけた。細い銀色にも見える毛が球形に生えて可愛い。赤と白のガーベラの鉢を見つけたので、鉢から土ごとはずしてビニールで包み、そのまま花器に入れて使った。毎朝少量の水を土に染み込ませて、長く飾っておけた。

横から見た奥行き





## 赤いメラレウカ

櫻子

花材 メラレウカ（フトモモ科）

ダリア2種（菊科）

花器 白地黒絵陶壺（森俊山作）

11月号では黄色のメラレウカに濃いオレンジ色のダリアを合わせている。日持ちがして香りもいい。色も鮮やかで、これから人気がでるだろうなど思っていたら、今度は赤いメラレウカが出てきた。

赤い葉は枝先だけなので、赤と緑が混じった感じ。若い葉が寒さで赤く色づくのだろうか。そういえばオタフクナンテンも常緑の葉が冬の間は赤く色付く不思議な木。この赤色のメラレウカも冬のいけばなに向いている。

今回は優しいピンク色の大輪ダリアを選び、赤いポンポン咲きを一本効かせてみた。モノトーンの広口壺に付けて朱塗りの敷板に置くと、花の品格が鮮やかに映える。

横から見た奥行き







ハート形のユーカリ

櫻子

花材 ユーカリ・ポボラス

(フトモモ科)

アメリカネス(彼岸花科)

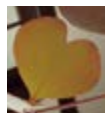
スイトピー(豆科)

花器 白条文陶花瓶(宮下善爾作)

このユーカリは葉が枝から少し離れたところについているので軽やかに見える。生まれたての葉は赤味が残り、暖かみを感じられる。

ユーカリ・ポボラスと呼ばれている。葉はおよそ丸形

だが、希にハート形のものも混じっている。とても可愛らしい。



とり合わせたアメリカネスは初めて見る花材で、アマリスとネリネの交配種。エクアドルからの輸入だそう。薄紫色のスイトピーと合わせると、優しい色の変化が楽しめる。器と敷物はユーカリの赤葉に合わせて選んだ。

横から見た奥行き





庭の千両

櫻子

花材 アスコ(蘭科)

千両(千両科)

黄実千両(千両科)

花器 結晶釉花器(前田五雲作)

家の庭には赤と黄色のセンリョウがある。2年前に植えたのが少しすっかりしてきたようで、実がついたのが嬉しくて、惜しいけれど、小枝を切ってオレンジ色の蘭といけた。アスコと呼ばれるランには葉がついていないので、艶やかなセンリョウの葉がよく似合う。  
雪の結晶がちりばめられたような一輪挿し。オーロラのように輝いて、いつまでも眺めていたくなる。



### 雪柳

櫻子

花材 雪柳（薔薇科）

アイリス（菖蒲科）

スイートピー（豆科）

花器 波文陶花瓶（竹内眞三郎作）

3月になると京都御苑の雪柳が満開になる。小さい梅のような花がこんもりと枝先まで咲いて雪が積もったようになるほど力強い。鴨川の土手の雪柳も鮮黄色の連翹と咲き競いあって、それに急かされるように桜の蕾が膨らんでいくような気がする。

雪柳の香りや景色を思い浮かべながら、アイリス、スイートピーを取り合わせた。



3月、京都御苑にて。



## 蘭2種と菜種

櫻子

花材 パフィオペディルム2種

(蘭科)

カトレア(蘭科)

菜種(油菜科)

花器 乾山写手付鉢

パフィオペディルムという名前はギリシャ語のパフィア(ヴァイナス)とペディロン(サンダル、上靴)の二語からなり「ヴァイナスのスリッパ」という意味だそうだ。不思議な姿をしているので、よく食虫植物に間違われるが、花弁の一部(リップと言う)が袋状になっている。これは手前にいけたカトレアも同じで、この袋の中に虫が入ると花粉が付着して虫を介して受粉する仕組みになっている。

世界4大洋ランのパフィオとカトレアを一緒にいけるなんてとても贅沢な花だが、どちらも短くて悩んだ末、乾山写手の手付き鉢に盛り込んだ。

珍しいかたちを上から眺められるように。

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2017年  
3月号  
No.645

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 春の息吹

△表紙の花▽

櫻子

花材 薇(せい)(ばい科)

アネモネ(あんもね)(きんせう科)

ミリオクラダス(みりおくらだす)(ひやく科)

花器 手付陶水盤(てつけとうすいばん)(柳原睦夫作)

ゼンマイはいけばなに春を感じさせてくれる。家の庭にも何種類かの羊歯しだが生えているが、若芽が伸びて、可愛い渦巻きに今年も出会えるのを楽しみにしている。

花屋さんで茎まで渦を巻いているゼンマイを見つけたので、アネモネと盛花にいけた。花器に選んだ水盤の底には紺地に桃色と黄色で雲のような模様が描かれていてなんとも春めいている。そして偶然にも金色の手も渦巻き状だ。なんという偶然。などと、一人で興奮しながら楽しくいけた。アネモネを低く挿して、ゼンマイの茎の動きを際立たせている。

横から見た奥行き





アルカンタレア・

サンガイネアルブラ

△9頁の花▽ 桜子

花材 サンガイネアルブラの実

(バイナツプル科)

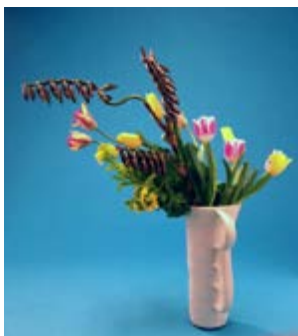
チューリップ3種(百合科)

菜の花(油菜科)

花器 手付陶花瓶

ロケット状の硬い実が串の歯のようについでいて結構な重みがある。サンガイネアルブラという名でフィリピンからの輸入だそうだ。濃い色の花でシックにまとめるのもいいが、春らしい色彩の花と共に白い不思議な形の器に付けてみた。トロピカルに、リズミカルに。

横から見た奥行き



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2017年  
4月号  
No.646

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





## おしゃべりな花達

△表紙の花▽ 櫻子

花材 ユーカリ(フトモモ科)

アマリリス(彼岸花科)

シンビジウム(蘭科)

花器 赤色ガラス鉢

毎年珍しくて美しいアマリリスに出会う。

今年はアマリリス・カリスマという品種。紅のインクを滲ませたような発色。花卉によって滲み方が違い単調ではない。

園芸品種ではあるが、偶然この色に染まったのか、自然の芸術家がこんな花を作り上げたのか不思議でしようがない。すでに数百品種作られて今も増え続けている。

アマリリスはヒガンバナ科のヒツペアストルム属だが、ヒツペアストルムとは馬のように大きくなって星のような花という意味らしい。

大輪のアマリリスには葉が付いていないので、今回はユーカリを添えた。

アマリリスがどっしりと豪華な花なので、動きのあるユーカリとピンクのシンビジウムを合わせて。

凄く賑やかな花だ。

皆さんが好きな方向を向いてペチャクチャおしゃべりしているようになっちゃった。



横から見た奥行き



## オンシジウム 櫻子

花材 オンシジウム・ハニード

ロップ(蘭科)

都忘れ(菊科)

花器 結晶釉水盤(前田保則作)

テーブルに低く花を飾りたい時、この平たい水盤は重宝する。主張しすぎず、上品な形。飾る場所に合った器を選ぶようにしたい。



カラー・エチオピカ

桜子

花材 カラー「エチオピカ」

(里芋科)

ポピー (罂粟科)

シンピシウムの葉 (蘭科)

花器 黒色ガラス花瓶

花茎も太くて長いカラーエチオピカ。南アフリカ原産である。

この様な咲き方を吹き詰(ふきづめ)咲きという。日本では長野県だけで作られているらしいが、今までに数回しか見た事がないカラーだ。

根気よく育てられたらこんな風に咲くのだろうか。湿地を好む宿根性で肥料の与え方も難しいのだろうが、肥沃で暖かな土地も必要だろう。

日本では情熱をかけて野菜も花もめずらしいものが作られていて有難いと思う。

私もあと何度この花をいけることが出来るだろうかといつもその瞬間を大切にしている。

ポピーに精一杯開いてもらって足元に添えた。

切りたての一番綺麗な蘭の葉で軽やかな姿に変えて、とっておきのガラス器に飾った。

横から見た奥行き





薄暑の花

櫻子

花材 花水木 (水木科)

イリス・オクロレウカ (菖蒲科)

花器 陶花瓶 (メキシコ人作)

八重桜が終わる頃、春の花会などの行事が一段落するせいか少し淋しい気分になる。そんな頃に一斉に咲き始めるハナミズキのお陰で又気分も新たになれるのが嬉しい。夏の最初、「薄暑」だ。初夏の服に着替えて、颯爽と出かけなければ！

水木の仲間で花が美しいので、ハナミズキと呼ばれている。初夏の日差しを受けて新緑の輝きが増す中で、枝を横に広げてのびのびと目立つ花を咲かせてくれる。投げ入れでそんな風にいけてあげたい。

オクロレウカはギリシャ語で、Iris (虹) Ochroleuca (黄色みを帯びた) という意味。トルコ原産のアヤメ科の多年草で湿地に育つ。

今年は花菖蒲に代わってオクロレウカの方が花も葉も育ちが良く、お稽古花としても何度もいけさせてもらえた。

五月晴れの爽やかな青空を背景に元氣いっぱい咲いてほしい。



横から見た奥行き



クロウフィッシュの器

櫻子

花材 カラー(里芋科)

カーネーション(撫子科)

玉羊歯(玉羊歯科)

花器 絵付陶鉢

ニューオリンズでは冬が終わり暖かくなり始める春頃からクロウフィッシュ(ザリガニ)のシーズンが始まる。釜茹でした真っ赤なザリガニをこの器に山盛りして、皆で味わうのだろう。

ザリガニと一緒にコーンやジャガイモ、ネギ、ニンニク、レモンも描かれている。レシビを忘れてもこの器を見れば買い揃えるものを忘れない。きつと待ちどおしい旬の器なのだろう。

そんな器に花をいけるなんて、ニューオリンズの人はどう思うかしら。両親が買ってきてくれた器なので、花器としてずっと大切に扱っている。苞の大きく開いたカラーとギザギザな花弁のカーネーション、玉羊歯。5月の旬をいけてみた。

横から見た奥行き



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2017年  
6月号  
No.648

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## フリチラリア

△表紙の花▽ 櫻子

花材 フリチラリア(百合科)

アンズリウム(里芋科)

アロカシア(里芋科)

ミリオクラダス(百合科)

花器 ガラス大鉢(近藤高弘作)

フリチラリアは黒百合や貝母百合の仲間、イラン、トルコ、アフガニスタンなどに分布する多年草。頭頂部に小葉が集まってつく品種が一般的だが、写真のフリチラリアの先端に小葉はない。調べると、頭に小葉のあるのがインペリアス、今回つけたのは、ベルシカという品種のようだ。茎が太く丈夫で存在感がある。大輪のおばけアンズや、大きなアロカシアの葉といけても、それらに負けていない。茎に動きもあるので、アンズリウムと共にゆったりと立て、足元はアロカシアで引き締めた。最後にミリオクラダスで水際を整える。





ライラック

△3頁の花▽ 櫻子

花材 ライラック(木犀科)

薔薇(薔薇科)

花器 ガラス花器

(チエコ・モゼール)

ライラック(リラ)は水揚げの難しい花だが、優しい花色と甘い香りが大好きなので、皮を削り足元を割って短くいけ、少しでも長く楽しみたい。黄バラの潑刺はつらつとした鮮やかさが加わることで、初夏の生命の輝きが感じられる。

横から見た奥行き





### 七夕飾り

△2頁の花▽

櫻子

花材 笹(稲科)

鳴子百合(百合科)

姫百合(百合科)

桔梗(桔梗科)

花器 濃茶色陶花瓶

七夕飾りは短冊に願い事を書いて  
笹に飾る行事で、五節句のひとつ。  
桃の節句や端午の節句のように祝う  
行事ではないが、その時々季節の  
行事を大切にしてきた日本らしい習  
慣だと思ふ。

家の南側の壁をきれいに直し、笹  
を植えたら良く繁ってくれている。  
それ以来、笹をいける事が多くなっ  
た。姫百合や桔梗の花も、笹といけ  
ると、七夕の星のように見える。

白斑が多くて珍しいナルコユリは  
まるでMilky Way(天の  
川)。



横から見た奥行き





広口花瓶にいける

△ 3頁の花▽ 櫻子

花材 美白百合(百合科)

胡蝶蘭(蘭科)

バンダ(蘭科)

クテナンテ(クスウコン科)

花器 デルフト花瓶

口の広い花瓶は、中に剣山を入れ、支柱を4本立てて十字字配りを固定しておくといけやすい。

お祝いのいけばなの参考に、白い百合と、ピンクの二種類の蘭のとり合わせでいけてみた。





スモークツリーと祭り寿司 桜子

花材 スモークツリー(漆科)

柏葉紫陽花(紫陽花科)

レナンセラ(蘭科)

花器 練り込み陶花器

梅雨に入る少し前になるとスモークツリーが咲き始める。不稔花(種を結ばない花)の軸部分(花柄)が長く伸びて羽毛のようになった時が一番の見頃となる。

ヨーロッパ、ヒマラヤが原産地で乾燥気味を好むので、日本の梅雨時に咲くのは迷惑だろう。雨の中ではなかなか爽やかな羽毛になりにくいと思う。

岡山のお弟子さんも庭にスモークツリーを育てておられる。風通しと日当たりの良い場所に植えておられるので、のびのび育っている。

6月の中旬には、スモークツリーを主材にしたお稽古を、もう2年通してさせてもらっている。庭の木を切ると、新鮮で枝ぶりも選べて、何よりもきれいな葉が付いてきて、生き生きとしたいけばなになるのが有り難い。切るときに樹液が出るが、松ヤニのような香りがする。ウルシ科の木だが、かぶれないようだ。

今年のお稽古は切りたてのスモークツリーに紫陽花やエレムルス、ギガチンウムなど、カラフルな花を一本ずつ合わせてみた。ふわふわした雲の中に、初夏の花が気持ち良く咲いているような花になった。スモークツリーには明るくて派手な花が合うように思う。

いけ終わって鑑賞した後は、家で作られた祭り寿司でもてなして下さる。ちらし寿司の上にモガイやエビ、サゴシなど、岡山ならではの具が10種以上盛られる。京都の地味なちらし寿司とは違うな〜といつも感激して頂戴している。

来年も又スモークツリーがのびのびと育ってくれます様に。



横から見た奥行き

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2017年  
8月号  
No.650

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



ピッチャープランツ（食虫植物）

△表紙の花▽ 櫻子

花材 黄花カラー（里芋科）

プロテア（ヤマモガシ科）

サラセニア（サラセニア科）

アンスリウムの葉（里芋科）

花器 濃赤色ガラス花瓶

虫をとらえて袋で消化するとい  
う、風変わりな生態を持つピッ  
チャープランツと呼ばれるサラセニ  
アの葉。北アメリカ原産で「ペテ  
ン師のトランペット」とかオウムのく  
ちばし」などと呼ばれている。

食虫植物は大抵気持ち悪い姿のも  
のが多いが、サラセニアの葉は赤い  
網目模様が美しく、個性的で側に飾  
りたくなる。昆虫を捕らえ消化して  
やせた土地でも生き延びることが出  
来るので、その不思議な魅力に引き  
つけられているのかも。

初夏の頃咲く花も独特な形をして  
いて、ミシシッピの沼地で育つ風  
景はまるで遠く離れた惑星の景色の  
ようだ。

トロピカルな雰囲気があるのでカ  
ラーとプロテアを一緒にガラス器に  
生けてみた。



横から見た奥行き



グラジオオラスとアジサイ

△2頁の花▽ 桜子

花材 グラジオオラス(菖蒲科)

紫陽花(紫陽花科)

花器 ステンレス籠

近年、アジサイは輸入も増えて、一年中いけられるようになった。今回も2頁と3頁にアジサイをいけているが、ともに花色が鮮やかだ。赤い方にはグロリーング・アルプスという品種名がついていたが、他の花色もあるようだ。

グラジオオラスも時期が長くて花色も多い。アジサイとグラジオオラスで、お気に入りの色の組み合わせを見つけたら是非2種でいけておきたい。あとは似合う器を考えるだけ。これがかかなか難しいのだが。

夏なので、ひんやりとしたステンレス製の籠を選んだ。大小二重に重ねると、銀色の森のように見える。籠には水が入られないので、こういう時のために黒い器を合わせてある。



横から見た奥行き



## タニワタリノキ

櫻子

花材 谷渡の木(茜科)

姫百合2種(百合科)

花器 通草籠

岡山の先生が育てたタニワタリノキを初めて生けたのは、4年程前で、それから花屋さんでも切り枝を見るようになった。

屋久島原産の珍しい常緑低木で、谷間に群生するところからこの名前になったらしい。クチナシやサンタンカと同じくアカネ科の木。花は丸く咲きルリ玉アザミに似ていてとても可愛い。

細長い雄しべが突き出すからか、人工衛星の木という名前もある。

夏の頃に艶やかな緑の広葉をつけた枝はありがたい。この時期の枝物は種類が限られていて、小さく生けても伸びやかさを感じさせてくれるひと枝だ。

アケビの籠にヒメユリと生けて、軽やかで涼しげな花として楽しませてくれた。



草紫陽花くさあじさい

∧2頁の花∨ 櫻子

花材 草紫陽花(紫陽花科)

ベロニカ・ブルーエイリアン

(胡麻の葉草科)

ヒペリカム(弟切草科)

花器 通草籠あけひかこ

クサアジサイはアジサイの仲間だが、アジサイより少し遅れて7月〜9月に咲く。アジサイと比べて茎が細く、葉も薄くて細長い。やや湿った林に生える山野草だ。花は白または淡紅色。最初白花でも、やがて淡紅色に変化するものも多いようだ。

あまり保ちの良い花ではないが、自然の風情がある。中央の両性花が結実する秋頃にもいけてみたい。

ルリトラノオを小さくしたようなベロニカ・ブルーエイリアンと、キンシバイの仲間のヒペリカムの実をとり合わせて、少し素朴な籠花にしてみた。

通草あけひかの蔓で編まれていて、お買い物籠にも花籠にも使っている。



横から見た奥行き



オリーブの実

櫻子

花材 オリーブ(木犀科)

薔薇(薔薇科)

アンズリウム(里芋科)

花器 彩泥陶ピアジョッキ

(宮下善爾作)

オリーブの実が生った枝は、小さいけれども向いている。いける機会が希な珍しい花材を主役としていける時は、とり合わせる相手の色やボリューム、器との相性に充分に気を配る。

艶やかな明るいグリーンの実と細長く固い濃緑色の葉。セピアがかったピンクのバラを添えると、西洋の香りがする。ダークブルーからモスグリーンへ、4段階の色土でデザインされたピアジョッキに挿すと、オリーブが心地よさそうにしてくれた。さらに軽やかな白のアンズリウムを足す。オリーブの故郷、地中海の光と風を感じる小品花。



横から見た奥行き





赤い葡萄

桜子

花材 アマランサス(莧科)

スモークグラス(稻科)

葡萄3種(葡萄科)

緑 シヤインマスカット

赤 クイーンニーナ

黒 ピオーネ

花器 白ガラス花瓶

高足ガラス皿

今年も待ち遠しい秋が少しずつ近くなってきたようだ。

秋は果物の季節。岡山から頂戴した固くて大きな葡萄は一粒一粒が艶やかで工芸品のようだ。

新しい品種も実りを迎えた。「クイーンニーナ」という赤い葡萄は、至れり尽くせりで育てられたお姫様のようにもったいなくすぐには食べられない。いつもの事だが、テキストの写真に納めてからゆっくり楽しみたい。

同系色のアマランサスも岡山育ち。

いつも岡山の恵みをいただき感謝の気持ちを含めてつけた花。



横から見た奥行き

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2017年  
10月号  
No.652

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





パンパスグラス

表紙の花▽ 櫻子

花材 パンパスグラス（稻科）

鶏頭2種（苺科）

ビバーナムの実（忍冬科）

花器 菱形紋陶花器

大きな庭でないとか栽培が困難なパンパスグラス。雄大な自然の中で伸び伸びと育つイネ科の多年草。8月のお盆の頃出回る若い花穂は剥いても細くて柔らかくボリユームの無いまま萎んでしまう。

9月半ばまで待つと、やっと大きな花穂のパンパスグラスが出てくる。ふさふさとした銀白色で絹糸のように光沢がある。私は先端を切り落として、風に揺れるような姿にしているのが好きだ。

今回は花冠が扇型のボンベイ鶏頭と合わせた。インドの種から育ったボンベイ鶏頭。これも輝くような花が特徴だ。色つき始めたビバーナムの実を足元に添えた中秋のいけばな。

アナベル

2頁の花▽ 櫻子

花材 鈴薔薇（薔薇科）

アナベル（紫陽花科）

薔薇（薔薇科）

花器 陶花瓶（伊藤典哲作）

アナベル：ヨーロッパの美しい女性を思わせるような名前。北アメリカ原産のアメリカノリノキの園芸品種で、真っ白で大きな花房になる。

日本のアジサイと同じく栽培が容易で、毎年良く開花するらしい。京都の御池通り沿いにも沢山植えられていて、咲き始めのグリーンから白、又グリーンへと色が変化していくのを見るのが楽しい。切り花でも夏から秋の頃まで出るので、稽古花としても使うようになった。

秋の半ば頃、花房が大きくなり半分ドライフラワーのような感触になった頃が一番使いやすい。萎れる心配がないので大きく伸びやかにいける事ができる。長くて重いスズバラとバラをフランス良く繋げてくれる。



横から見た奥行き



横から見た奥行き



自然の色を大切にする

櫻子

花材 丸葉の木 (満作科)  
鶏頭 (見科)

秋海棠 (秋海棠科)

花器 陶花瓶

赤や橙や黄色に色付く葉をいけるのも、秋の楽しみの一つだ。なかでもマルバノキの色付きは特に好き。一本の枝にもグラデーションがあり、さらに一枚の葉の中にも色の変化がある。今年ほどんな花と合わせてみようかと、毎年楽しみにしている。

はじめてシュウカイドウを合わせてみた。瑞々しい緑の葉が加わることでマルバノキの葉色がより鮮やかに見える。さらにピンクの花と赤い丸葉が優しく呼応してくれた。ケイトウの黄色と花瓶の紺色が、全体の色彩に厚みを与えてくれた。

こんな風に自然の色を自分なりに生かすことができた時、心から嬉しく思う。



横から見た奥行き



### 枝垂れを楽しむ

△2頁の花▽ 櫻子

#### 花材

更科升麻・晒菜升麻

(金鳳花科)

山鳥兜(金鳳花科)

木苺(薔薇科)

花器 陶花瓶(林平八郎作)

サラシナショウマの伸びやかな白い花穂は、一本一本かたちが違って自然味がある。とり合わせにも、自然の風合いが感じられる相手を選びたい。長く枝垂れたヤマトリカブトと共に長く前へ出し、足元に色付いた木苺を加えて両者をつないだ。

横から見た奥行き





ダンシング・レディー  
ス・ジンジャー

△3頁の花▽ 櫻子

花材 グロツバウイニティ

(生姜科)

アンスリウム(里芋科)

夏櫛の実(躑躅科)

花器 白磁花瓶

ピンク色のやじろべえが幾つも繋がっているみたい。その手の先に黄色い花が顔を出している。非常に個性的な花だ。グロツバ・ウイニティはジンジャーの仲間で、ダンシング・レディース・ジンジャーとも呼ばれる。たしかに女の子達が両手を広げて躍っているような花だ。

淡い花色なので、深紅のアンスリウムを合わせると華やかになる。季節感を加えたくて、夏櫛の実だけになった枝を覗かせてみた。グロツバと一緒にステップを踏んでくれているみたいだ。

横から見た奥行き





シーグレープ 櫻子

花材 シーグレープ(マゼ)

アメリカス(彼岸花科)

花器 ガラス花器

シーグレープは浜辺はまべ葡萄ぶどうとか心葉こころばとも呼ばれる。丸い団扇うちわのような葉が面白い。赤と黒のどつしりしたガラス花器にいけると、葉の葉脈の赤色が際立つ。



## カンガルーポー

△2頁の花▽ 櫻子

花材 カンガルーポー2種

(ハエモドルム科)

薔薇(薔薇科)

花器 陶製鍋(林聡江作)

見れば見るほど不思議な花。先が6つに裂けていて、細い毛に覆われた筒状の花を咲かせるが、カンガルーの前足(ポー)に確かに似ているような気がする。カンガルーを近くで見た事がないので、なんともいえないが。

オーストラリア原産のハエモドルム科だが、ハエモドルムとは「血の贈り物」という意味。昔からオーストラリアの人達が、赤い地下茎を食用にしていたからという。花色は黄色だけでなく、赤、黒、オレンジ、紫と多彩だ。今回はピンクシルバーも混ぜてみた。土鍋に付けて暖かな雰囲気。



横から見た奥行き





汽車ポツポ

△3頁の花▽ 櫻子

花材 ヒペリカム (弟切草科)

アルストロメリア

(アルストロメリア科)

ダリア (菊科)

花器 陶製機関車

「長らく流誌に続けてきた『ホツホチャンとケンチャン』は、素子と孫の健一郎の会話から生まれた、いわば『花遊び』のスケッチである。そして、その『花遊び』を通じて、いけばなに深い関心を持つてもらいたかったのである。」と父が本の序文に書いている。健ちゃんも21才になった。お友達を相手に先日はじめの稽古をしていたが、いけばなへの興味が深まってきたようだ。

子供のためにいける花。そんな気持ちこめて焼き物の機関車に花をいけた。シュッポシュッポと、童心に帰って、心は野山を駆け巡る。



横から見た奥行き



シンフォリカルポス

櫻子

花材 シンフォリカルポス(忍冬科)

ユーカリの蕾(フトモモ科)

デンファレ(蘭科)

ミリオクラダス(百合科)

花器 鹿耳ワインクーラー

ムラサキシキブの実かな?と思うほど似ているが、実が密集してブドウのように固まって付いている。これは北アメリカ原産スイカズラ科のシンフォリカルポスという名前の木だ。寒冷地でも暖地でも良く育つので最近よく見るようになってきた。白い実の改良種もあるが、ワインレッド色は原種に近いらしい。葉が付いていても取り去ってつけた方がいい。ミリオクラダスのようなたつぷりの緑を添える事で艶やかな姿になる。

グレーの実に似ているのはユーカ



横から見た奥行き





### 日の出

△3頁の花▽ 櫻子

花材 南天(目木科)

オンシジウム(蘭科)

アイリス(菖蒲科)

花器 舟形陶花器(宇野仁松作)

山で、海で、初日の出を拝まれた方も多かったのではないのでしょうか。新春を言祝ぎ、お日様への感謝をこめて。日の光が世界を照らし、温もりが届きますように。アイリス(虹)の彩りを加えて。





ソロバンノキ 櫻子

花材 青文字(楠科)

チューリップ3種(百合科)

花器 陶鉢

別名シヨウガノキ、ソロバンノキとも呼ばれるアオモジ。クスノキ科の落葉小高木で、昔からあるいけばな花材として秋頃から花屋に並ぶ。そのせいか、緑のつぶつぷを売だと思っている人が多い。桐や猫柳と同じ花の蕾なのだが。

淡緑色の苞に数個の蕾が包まれている。だんだん大きくなって、やがて苞が割れて蕾が顔を出す。暖かい部屋なら白い花が咲くこともある。

真冬にわざわざチューリップをいけなくてもよいと思うが、春を待つアオモジと取り合わせたくなった。木肌がうす汚れた緑色なので、いける時は幹を隠し蕾を目立たせたい。

最近お菓子の楊枝も黒文字よりも青文字の方が多いうだ。キリツとしたこげ茶色の楊枝で和菓子を頂きたいのだが。



横から見た奥行き



赤茶色のヒペリカム

櫻子

花材 アマリリス(彼岸花科)  
ヒペリカム(弟切草科)  
ミリオクラダス(百合科)  
花器 陶花器(近藤豊作)

秋が深まると枝も葉も実も赤茶色になるヒペリカム。夏までに剪定すれば9月にはもう一度花が咲くので緑の葉と赤い実が楽しめるが、剪定せずに力強くなった枝はアマリリスの足元にもこんもりと添える事が出来た。昔からの冬の枝もの花材は少なくなつたが、又新しい改良種が加わつて彩りを添えてくれる。

冬にアマリリスをいける時は首元までしっかりと芯棒を入れてあげる事。私の家のように皆が集まる部屋以外寒すぎる室内だと、飾っている花も凍てつく事がある。大輪の花が咲きそろっても、重さと寒さで折れ曲がらないようしっかりと支えてあげよう。



横から見た奥行き



薔薇のように 櫻子

花材 葉牡丹(油菜科)

ミニ・デンファレ2色(蘭科)

スイートピー(豆科)

花器 赤釉陶花器(宮本博作)

冬の寒さに晒されて葉緑素が抜け、クリーム色に色づいたハボタン。昨年は葉が縮れて切葉水菜のような品種を飾って楽しんだが、今年は丸くて小さいハボタンを選んだ。

ハボタンだけでは地味に見えるが、葉を広げて大きく見せ、スイートピーのような優しい姿の草花と合わせる大輪のバラのようだ。珍しい花ではないが、お正月にしか出荷されないので、一度は買いたくなる。私は料理が好きなので珍しい野菜を買い求めるような感覚で欲しくなるのかもかもしれない。

ハボタンに白いスイートピー。そこへピンクのミニ・デンファレを加え、赤い器にいけると、明るくて華やかな花になった。



横から見た奥行き



ネコヤナギ

櫻子

花材 猫柳(柳科)

ストック (油菜科)

喇叭水仙(彼岸花科)

花器 陶大皿(モロッコ製)

以前、アフリカのモロッコで花展をした時、幼稚園児が大勢で見に来てくれた。その時の子供達の笑顔を思い出しながらラッパスイセンをいけた。ネコヤナギの柔らかな感触が優しく寄り添う。



横から見た奥行き





ヴロアウン 櫻子

花材 オンシジウム(蘭科)

ミニ胡蝶蘭(蘭科)

ゲイラックス(岩梅科)

花器 鶴首陶花瓶

「ヴロアウン」2種

家元宅での初春の会には、新年のお料理が並ぶ宴席に、花の設えをして楽しんでる。今年には鶴首花生け「ヴロアウン」に花をいけて飾った。これは京都青窠会作陶展の50周年を記念して考案された焼きものである。

シンプルでモダンを基本とした一輪挿しが青窠会の作家や職人によって様々な技法で生まれていくのが楽しい。

西出真英作の「掻き落とし」、前田安徳作の「鉄釉」を並べて、オンシジウムと胡蝶蘭をいけた。「ヴロアウン」はスウェーデン語の「青い窓」という意味だそう。今後も青窠会の皆さんがつくる器が楽しみです。



横から見た奥行き



お紅茶の代わりに

櫻子

花材 ラグラス(稲科)  
 アネモネ(金鳳花科)  
 花器 ティーカップ

ヨーロッパの美術には多くのアネモネが出てくる。ルノワールやマチスも好んでこの花を描いている。花姿は今とあまり変わらないが、深みのある花色と姿の調和が絵になりやすいのかもしれない。

好きな花は小さくいけて、身近に置いて眺めていたい。大きめのティーカップを花器にして、食卓に季節の彩りを加えるように。

このカップは父が毎朝お紅茶を楽しんでいたので、母と色違いのお揃いだ。濃いめに淹れたお紅茶にお砂糖とミルクをたっぷり入れて……。何でも沢山入れる父にはびったりのティーカップ。春に実るラグラスとアネモネを飾った。



横から見た奥行き

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2018年  
3月号  
No.657

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





横から見た奥行き

ランタンキュラス・ラックス

△表紙の花▽ 櫻子

花材 ランタンキュラス(金鳳花科)

「ラックス・ピュタロス」

チューリップ(百合科)

花器 トルコ製真鍮バケツ

ランタンキュラスの新品種「ラックス」は花卉に光沢があるスプレー咲き。今後人気がでるだろう。



スネークボール 櫻子

花材 アリウム・スネークボール

(百合科)

シキミア (蜜柑科)

花器 赤黒ガラス花器

はじめは3種でいけようと考  
 いたが、アリウムの曲がりくねった  
 茎の重なり合いが思いの外面白  
 かったので、赤いシキミアとの2種で赤  
 い器にいけ、構成も色彩もシンプ  
 ルにまとめてみた。

横から見た奥行き



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2018年  
4月号  
No.658

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





## ブルビネラ

△表紙の花▽ 櫻子

花材 ブルビネラ(ツルボラン科)

シーグレイプ(蓼科)

トルコ桔梗(竜胆科)

花器 盃型ガラス花器

春の到来を告げる南アフリカ原産のブルビネラ。オーニソガラムなどにも似ていて、目立った特徴も無く平凡な花と思っていたが、この春一番に入って来たものは、カラフルで背も高く今までと違う花型にもなった。一本の花からは何百輪も花を咲かせるらしい。そのせいか花を支える茎がしっかりと固くて長くいける



横から見た奥行き



アンブレラフアーン

△ 3頁の花▽ 櫻子

花材 カラー(里芋科)

ラナンキュラス(金鳳花科)

アンブレラフアーン

(裏白科)

花器 青色ガラス鉢

オーストラリアから輸入される葉ものは種類が年々増えている。

シダ類のアンブレラフアーンも傘の様な面白い形で洋とも和ともつかない不思議な雰囲気だが、全体に瑞々しさを与えてくれる。



横から見た奥行き



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2018年  
5月号  
No.659

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## ビバーナム スノーボール

△表紙の花▽ 櫻子

花材 ビバーナム (忍冬科)

鉄砲百合 (百合科)

レナンセラ (蘭科)

花器 赤色釉花器 (宮本博作)

長くて綺麗なビバーナム。こんなに長くいけても一週間しっかりと元気に咲いてくれた。足元を割り皮を削ってしっかりと剣山に挿す。水は毎日足して出来るだけ澄んだ深水中にあげる。

一週間後には他の花も切り詰めて短く投げ入れに生け替えたが、まだ日持ちしてくれている。

ビバーナムは水が下がりやすいと言われるが、花が機嫌良く心地良ければ長く楽しめる。アジサイに近い花でオオデマリにも似ているが葉が柔らかく瑞々しい。花は緑色から白へと変わっていく。倉敷のお弟子さんが四月の花会でいけておられたビバーナムは大きくて真っ白のアジサイの様だった。ヒョウタンボクの間から溢れる様に咲くフワフワのビバーナムが印象的ないけばなだった。



横から見た奥行き

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2018年  
6月号  
No.660

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





横から見た奥行き

今年には花菖蒲の季節が早くやってきた様な気がする。4月末には早咲きの薄紫色に加えて白や濃紫色も売られ、華やかなお節句を迎えられた。茎が太いものは殆ど3番目まで咲いてくれた。萎れた花の隣に次の花が出てくるのは嬉しいものだ。勢いある葉はオクローレウカだ。ピンのアジサイを足元に集めると、オレンジ色の花器と一体になってくれた。

花材 花菖蒲2種(菖蒲科)  
オクローレウカの葉(菖蒲科)  
紫陽花(紫陽花科)  
花器 オレンジ色ガラス花器

## 花菖蒲と紫陽花

はなしょうぶ あじさい  
△表紙の花▽ 櫻子





## ライラック

△ 2頁の花▽ 櫻子

花材 ライラック (木犀科)

アマリリス (彼岸花科)

フィロデンドロン・レモン

ライム (里芋科)

花器 オレンジ色ガラス花器

ライラックの花弁の一つ一つは小さいのに、穂の様に集まって咲く姿を見ると心がとても豊かになる。色も綺麗で甘くて上品な香り、家族が好きだった花だけにこの季節は必ずいけて飾りたい。

切り花のライラックは一本立ちで売られる事が多いので、花型が単調になりやすい。たっぷりと厚みのある花姿になるようにいけてゆく。

水あげが悪いので、まず足元の皮を削り、さらに割って中心の髓をハサミで削り出す。そうしていけると良く日持ちしてくれる。

バラと合わせる事の多いライラックだが、細くて品の良いアマリリスといけた。レモンライムの葉を添えて。

横から見た奥行き





### 食卓の花

△ 3頁の花▽ 櫻子

花材 縞太藪 (蚊帳吊草科)

満天星 (躑躅科)

都忘れ 2種 (菊科)

花器 カットガラス舟形花器

どこから見ても綺麗な食卓の花。シマフトイが軽やかで涼しそう。長くいけてもお料理の邪魔をしないように控えめに。四方正面で。



横から見た奥行き



姫空木とベル鉄線

櫻子

花材 姫空木（雪の下科）

ベル鉄線（金鳳花科）

花器 丸紋染付花瓶

野に咲く小さな花を摘んで帰りた  
い、そんな気分に合わせてくれる野趣  
のある可愛らしい花材に出合ふと、  
つい買ってしまふ。ピンクのヒメウ  
ツギやベルテッセンもそんな花の一  
つだ。

ウツギは茎の中心が空洞なことか  
ら空木と名が付いた。ウノハナ（卵  
の花）とも呼ばれ、卵の花月とは陰  
暦の4月のこと。今の5月にあた  
り、丁度ウツギがいつせいに咲き始  
める。ウツギの名がついた植物は多  
い。ある種のウツギは材質が固くて  
木釘の材料になる。花器の桐箱の木  
釘に使われているそうだ。

幾何学模様の染付花瓶で、全体に  
抑揚を与えている。

横から見た奥行き





### 竹島百合

△2頁の花▽ 櫻子

花材 夏櫛なつは(躑躅科)

竹島百合たけしまゆり(百合科)

撫子なでこ(撫子科)

花器 手付竹製バスケット

子供の頃、母と市場へ行く時はこんな面白い物籠だった。今は季節の草木をざっくりいけて楽しんでる。爽やかな初夏の籠花。

横から見た奥行き







アメリカ手毬下野

△3頁の花▽ 櫻子

花材 アメリカ手毬下野(薔薇科)

向日葵(菊科)

花器 陶水指

生活雑貨を扱う店で大きな水指を買った。安定がよく、実になり始めたアメリカテマリシモツケも大きな枝を伸び伸び挿せる。ヒマワリ2種を合わせると同系色の濃淡が美しい

横から見た奥行き





## スモークツリー

△ 3頁の花▽ 櫻子

花材 スモークツリー (漆科)

薔薇 (薔薇科)

花器 ヘレンド窯花器

スモークツリーは小さな花が咲いたあと、結実するのはほんの僅かで、殆どの花は散った後花柄を煙状に伸ばして実を守るように取り囲み、やがて実と共に風に乗って飛んで行く。子孫を残すという目的のため、それぞれが役割をしっかりとこなしている。

そんな事を知ると、スモークツリーが愛おしくより美しく見えてくる。その美しさを長く保ってほしいから、水揚げを充分にするようにしている。水の中で足元を切る。足元を割っておく。足元の皮を削る。つけた後も時々は切り直す。

ピンクのバラと赤いスモークツリー。ハンガリーの名窯、ヘレンドにいけると、気分はヨーロッパ貴族

横から見た見た奥行き



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2018年  
8月号  
No.662

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





## ビバーナム・コンパクト

△表紙の花▽ 櫻子

花材 カラー2色 (里芋科)

ビバーナム (忍冬科)

花器 金彩ガラス鉢 (ウルリカ作)

夏の時期、枝ものが少なくなるが、最近出回るようになった実もの。枝も太く立派で葉も実も多い。葉を間引いてやるとたわわな実がこぼれ落ちる様に見える。

ウルリカ・ヴァリーンさんが描いたお魚が実を狙っている。紫色と白色のカラーも、バクバク口を開けてる海藻かも。

深い海の中にあるような景色。

横から見た奥行き





横から見た奥行き

ミニパイナップルと  
枯<sup>かれあじさい</sup>紫陽花、<sup>ハ2頁の花</sup>桜子  
花材 ミニパイナップル  
(パイナップル科)  
紫陽花(紫陽花科)  
リビストニア(椰子科)  
花器 水玉文陶鉢  
観賞用のミニパイナップルにして  
は大きな実をつけていたので、剣山  
に太い茎をしっかりと挿した。猛暑  
も平気な実とヤシの葉。美しく枯れ  
た紫陽花を添えて。



## バンクシア

△3頁の花▽ 櫻子

花材 バンクシア(ヤマモガシ科)

レナンセラ(蘭科)

花器 赤色ガラス花器

バンクシアはオーストラリア原産ヤマモガシ科の常緑低木。このバンクシアは松の枝葉に似た茎の中から穂状の花を咲かせる。世界中を航海して各地の珍しい植物を採取したジョセフ・バンクス卿に因んでいる。

這うように伸びる低木なので、大きくはいけられないが、こんな時は吸水性スポンジ(オアシス)を使うと良い。茎が直接水に浸かる場合と比べて水が汚れにくいのも有り難い。花器にびったり詰めれば重たい枝も動かない。

ワインレッドのガラス器にいけたので、足元はレナンセラを挿した。スポンジにしっかり水を吸わせていても毎日水を足してあげる事が大切。

横から見た奥行き





ピンククッション

櫻子

花材 ピンククッション(ヤマモガ

シ科)

羽毛鶏頭(寛科)

ローリエ(楠科)

花器 陶花瓶

ピンククッションも針山はりやまも知らない  
と若い学生は言う。家には無いし見  
た事もないのだろう。小さなソーイ  
ングセットくらいしかないのかもし  
れない。アフリカやオーストラリア  
には他の国とは違う独特の珍しい植  
物が沢山ある。

似ているものに例えられた名前も  
多くカンガルーポ、ブラシノキ、  
ライスフラワーなど、最初に見つけ  
た人は嬉しくて夢中になって木や草  
に名前をつけたのだろうか。よくこ  
んなにピッタリと思える名前を考え  
たなあと感動する事も多い。

艶やかな光沢のあるウモウケイト  
ウを葉のように添えた。

横から見た奥行き





## セルリア

櫻子

花材 アンズリウム(里芋科)

セルリア(ヤマモガシ科)

斑入モンステラ(里芋科)

花器 青色ガラス花器

今年の夏は暑くて暑くて花が保たなくて、とても苦労した。それでも新しく花を生け替えると、スツトリフレッシュして自分も元気になる。水がお湯にならないように何度も花器に氷を入れたり、夜寝る前に水を替えたり色々工夫した。日持ちする花を選んでいたので、今月号にはオーストラリアや熱帯の植物が多いアンズリウムの足元に添えたセルリアもオーストラリアからの輸入花材。南アフリカ原産の常緑低木で柔らかで繊細な花だ。他が枯れてしまった後もドライフラワーにして長く飾っている。英名のブラッシング・ブライドは「はにかんだ花嫁」という意味なので、ウエディングブーケに使われる花だそう。

横から見た奥行き





いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2018年  
10月号  
No.664

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## ハンギングヘリコニア

△表紙の花▽ 櫻子

花材 ハンギングヘリコニア

(苗蕉科)

トルコ桔梗2種(桔梗科)

花器 陶コンポート(柳原睦夫作)

固い茎から花が長く釣り下がるハンギングヘリコニア。ピンク色した苞は折れやすいが、花茎は強くしなやか。茎を切るとバナナの良い香りがして、バショウの仲間の植物である事を感じさせてくれる。柳原睦夫さんのポップで艶やかな花器に良く似合う。

横から見た奥行き





スズバラ

△ 2頁の花▽ 櫻子

花材 鈴薔薇の実(薔薇科)

丸葉の木(満作科)

二輪菊2種(菊科)

花器 陶花器(小川欣二作)

スズバラという名前で流通しているバラの枝。お稽古花にも使えるくらい沢山切り枝として出荷されるが、正式な名前では呼ばれない。バラ科の常緑低木のロサ・グラウカ。葉も花も付かない姿なので、出来れば秋らしい彩りの葉を添えたい。

横から見た奥行き





ヒオウギとボンベイケイトウ

△表紙の花▽ 櫻子

花材 ボンベイ鶏頭(けいとう)(萹蓄科)

檜扇の実(ひおぎ)(萹蓄科)

ドラセナ・コルデイリネ

花器 陶鉢

ヒオウギは秋になるととぼけた様な形の実になる。祇園祭に飾る優雅な姿からは想像できない程に。花の頃は真竜、黄竜という名の品種が揃うが、実は射干玉(ヌバタマ)と呼ばれるので、つい黒砂糖味の丸くて甘い和菓子を通想してしまう。

取り合わせも花の頃とはガラリと変わり、実になると秋に咲く可愛いネリネを添えたりするのも楽しい。

インドの種を日本で蒔いて育てたボンベイケイトウも数年前から出てきた新品種。どちらも万葉の時代から歌に読まれた知り合い同士だが、初めて一緒にいけてみた。

横から見た奥行き





### 山芍薬の実

△2頁の花▽ 櫻子

花材 梅花躑躅(躑躅科)  
山芍薬の実(牡丹科)

桔梗(桔梗科)  
公長齋小菅籠

花器 公長齋小菅籠

今年の秋一番きれいなヤマシヤクヤクの実。みずみずしい葉に包まれるように育った一輪。弾けて赤(未成熟種子)と紺(種子)の実が派手に色を競い合う。春に清楚な白い五弁の花を咲かせていたとは思えないくらい強い強さだ。大好きな公長齋さんの籠に飾った。



横から見た奥行き



穂に穂

△10頁の花▽ 櫻子

花材 ベルグラスモール(稲科?)

粟(イネ科)

木苺(薔薇科)

花器 陶水盤(柳原睦夫作)

稲、粟、黍、蜀黍に薄、洋種のパ  
ニカムなど、秋には穂をいけること  
が多い。2種類の穂を立ててみると  
これが意外に面白い。紅葉したキ  
チゴを足元にいけると、穂が主役の  
いけばなになった。色んな穂の組み  
合わせで秋を楽しもう。



横から見た奥行き



シダレソリダコ

△12頁の花▽ 櫻子

花材 秋明菊（金鳳花科）

枝垂れソリダコ（菊科）

丸葉の木（満作科）

花器 手付竹籠

はじめていけるシダレソリダコは  
まるで打ち上げ花火のようだ。広  
がる黄色い小花の間を真っ直ぐにシ  
ュウメイギクが昇って行く。秋草たち  
の競演。



横から見た奥行き



家庭画報 11月号

桑原櫻子が廣誠院の幻の京焼きを紹介。

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2018年  
12月号  
No.666

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元







## メラレウカ

△ 3頁の花▽ 櫻子

花材 メラレウカ (フトモモ科)

胡蝶蘭 (蘭科)

磯菊 (菊科)

花器 デルフト花瓶

この器も「花ふたり旅」のもの。オランダ編で登場するデルフト花瓶だ。旅先で器と花を調達し、風景の中に置いて撮影する。大変なエネルギーが必要だが両親はそんな旅を4度繰り返し本にした。お陰で花器の選択肢が増えたので、こんないけばなも生まれる。



横から見た奥行き



出逢い花 (34) 櫻子

満天星 (躑躅科)

椿 (椿科)

花器 瑠璃色結晶釉花瓶

(前田五雲作)

花器の瑠璃色にドウダンツツジの紅葉が映える。

この器は高さ20センチの小さな花瓶なのだが、2種の小枝を挿しただけで、素敵ないけばなになってくれた。

この出逢い花の要はなんととってもツバキの花だ。これから春にかけて様々な種類のツバキが咲くだろう。小さな枝でいいので、いけて飾りたくなる。一種でいけるのもいいが、また新しい出逢いを楽しみたい。

横から見た奥行き



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2019年  
1月号  
No.667

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## ダイダイ

△表紙の花▽ 櫻子

花材

若松(松科)  
橙(蜜柑科)

菊(菊科)

花器 角形陶花瓶

ダイダイの実は冬に色付き春に緑色にもどる。2〜3年は枝に残るの  
で「代々」から名付けられたそうだ。  
親戚から枝付きで頂いたので松と深  
紅の菊を合わせた。漲る力を感じる  
器にいけると、花から元気を貰える。



横から見た奥行き



クチナシの実

△2頁の花▽ 櫻子

花材

梔くちなし(茜科)

山茶花さざんか(椿科)

花器

漆塗麦酒盃うるちまけのぼたん

干支伏見人形えと「亥」

食品の色づけに使われるクチナシの実くちなしは血流を良くする薬にもなる。今年の干支の猪と飾ると形が似て面白い。健康な一年を願って。



横から見た奥行き

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2019年  
2月号  
No.668

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



# ブルーチューリップの 花器に

△表紙の花▽ 櫻子

花材 小手毬こてまり（薔薇科）

エビデンドラム（蘭科）

ランンキユラスきんぽうけ（金鳳花科）

花器 トルコ製陶花器

早春に咲く花をチューリップ柄の花器にいけた。温かな光とぬくもりをいち早く感じて花を咲かせるランンキユラス。花びらの枚数が百枚以上はあると思うが、ゆつくりと大きな花を開いて最後まで散ることなく萼がくに支えられて咲いてくれる。

コデマリも今年は豊かに花付きも良く力強い。一本からの枝分かれも多くてそのままの形をいける事が出来た。

エビデンドラムも小さな花の集まりで丸くまとまる花だ。同じかたちの花を取り合わせるのはとてもいけにくいのだが、こんな花器と花との組み合わせも今ならでは。



横から見た奥行き



晩白柚 ばんぺいゆう

△2頁の花▽ 櫻子

花材 チューリップ (百合科)

スイートピー (豆科)

菜の花 (油菜科)

晩白柚 (蜜柑科)

花器 紺彩陶水盤 (重松康夫作)

久しぶりにテキストでパンペイユウを花といけてみた。暮れにいつも熊本の知人から戴く晩白柚を新年の座敷に飾らせていただくのを楽しみにしている。今年も南天と菊の投入れ、干支とパンペイユウを置いて良い香りを楽しんだ。

1月末にはチューリップや菜の花、スイートピーが長くてしっかりといたので、相手を覚えて再び後ろに置いてみる。早春の淡黄色が萌え出づるようで貴重な春が訪れた。災害を乗り越えて作られた尊い果物。

横から見た奥行き







## ヒヤシンス

△2頁の花▽ 櫻子

花材 猫柳(柳科)

ヒヤシンス(百合科・雉隠科)

青麦(稲科)

花器 ブルーガラス鉢

2月の料理教室の食卓にはヒヤシンスだけを金属で作られた銀色の筒型花器に飾った。立春前のもとも寒い日が続く頃、冷たい大地から春が溢れるように。花色は赤、ピンク、白、クリーム、オレンジ、黄色、青、薄紫、濃紫と豊富で、どの色を選ぼうかと迷ったくらいだ。

もうずいぶん前から切花のヒヤシンスはミックスの多色で花屋さんで売られるようになった。安くはないがひとつの茎に沢山の花を咲かせてくれて、香りもうっとりするくらい素晴らしく、葉も沢山ついていて素敵だなと思う。丈が短いので折れ曲がらないように竹串を通してけると日もちもしてくれた。野生は青紫色。ブルーの花器と敷物が似合う。

横から見た奥行き





## 母のスクarf

△3頁の花▽ 櫻子

花材 アイリス (菖蒲科)

チューリップ (百合科)

宿根スイートピー (豆科)

花器 コスタボダ・ガラス器

母はシヨールやスクarfが好きで  
沢山持っていた。好きなものに出会  
うと迷わず一瞬にして自分のものに  
するものひとつの才能?と思う事も  
あった。ゆっくり買い物する時間も  
なかったからかもしれない。ひとつ  
ひとつが思い出のあるものばかりな  
ので、綺麗にして花の敷物にも使っ  
ていこうと思う。

ヒヤシンスの敷物はブルーのパ  
シユミナ。チューリップとアイリス  
には昔のシャネルのスクarf。違う  
使い方をすると新鮮に見える。父  
が愛用したジャケットの端切れでも  
妹が敷物を作ってくれた。裏には  
MADE IN GREAT BRITAIN と書かれ  
てあって驚かされる。

横から見た見た奥行き



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## ミモザアカシア

△表紙の花▽ 櫻子

花材 ミモザ (豆科)

エビデンドラム数種 (蘭科)

花器 紺釉陶鉢 (フランス製)

3月3日の倉敷でのお稽古は新鮮なミモザをいけさせてください。お弟子さんの庭に育っていたもので、フワフワの花の付いた切りたての枝を沢山持って来てくださったので、バラとマーガレットを取り合わせて贅沢な稽古をすることができました。お弟子さん達も大喜び。

ミモザが黄色い花をつける季節、毎年3月8日は国際女性デーらしい。イタリアではこの日、男性から女性にミモザの花を贈り、女性達は家事からも育児からも解放されるそう。なんと羨ましい。残念ながら日本にはそんな習慣はないが、ミモザのお蔭で貴重な春の楽しいひと時になった。テキストではカラフルなエビデンドラムと取り合わせた。

横から見た奥行き





## レオントキール

△2頁の花▽ 櫻子

花材 レオントキール(アルスト

ロメリア科)

キヤスケード・シンビジウ

ム(蘭科)

ミリオクラダス(百合科)

花器 赤ガラス花瓶

レオントキールはライオンの手という意味だそうだ。アルストロメリアの仲間で、南米原産の蔓性植物。地面を這うように育ち、伸ばした花茎の先に丸く花が集まってつく。元々寝そべっていたものなので、あまり無理な長さにいけると茎の途中で折れるので注意したい。

キヤスケードタイプのシンビジウムをからめるようにいけるとレオントキールとよく調和してくれた。背の高い赤いガラス花瓶に無造作に投入してみたが、花材の面白さで独特の雰囲気がつくれた。

横から見た奥行き



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2019年  
5月号  
No.671

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



貝母<sup>ばいも</sup>      △表紙の花▽ 櫻子

花材 貝母 (百合科)

海老根 (蘭科)

都忘れ2色 (菊科)

花器 陶水盤 (モロッコ製)

倉敷の叔母宅には月一度の稽古で訪れるが、特に春は庭の花々を見るのが楽しみ。珍しい椿や林檎、花梨といった果樹の花も華やかだ。

高台にあるリビングの前庭には大きな木が茂っていて、その足元でバイモが70センチほどの背丈で咲いていた。花は小さくて地味な色なのにとても存在感があつて可憐。いくらでも持つて帰つてと言つてくれるので、沢山切らせてもらった。

バイモはユリ科の中では一番早く咲くらしい。葉の先端が細長く巻きひげのようになるのが可愛い。球根が大きくなると貝が合わさつたように見えるので貝母と名づけられたそう。

叔母の庭で育つ貝母は花屋さんでは買えない大きさなので足元には春のエビネランとミヤコワスレをいけた。



横から見た奥行き



五月梅 さつきばい  
撫子 なでしこ

△2頁の花▽ 仙溪

花材 五月梅（雪の下科）

撫子（撫子科）

花器 青磁花瓶（加藤敏雄作）

サツキバイとナadeshikoを大らかに  
投入にした。青磁の花瓶にいけると  
5月の爽やかな風を感じる。サツキ  
バイは水切りし、足元をよく割って  
おく。

横から見た奥行き





いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2019年  
6月号  
No.672

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



黄<sup>き</sup>花<sup>ぼ</sup>海<sup>な</sup>芋<sup>かい</sup> 大<sup>お</sup>手<sup>お</sup>毬<sup>でまり</sup>

△表紙の花▽ 櫻子

花材 黄<sup>き</sup>花<sup>ぼ</sup>海<sup>な</sup>芋<sup>かい</sup> (里芋科)

大<sup>お</sup>手<sup>お</sup>毬<sup>でまり</sup> (忍冬科)

ミリオクラダス (百合科)

花器 ガラス鉢

アンティークピンクのオオデマリ  
と赤いガラス器のハーモニー。



横から見た奥行き



## ヘリコニア

△ 3頁の花▽ 櫻子

花材 ヘリコニア (芭蕉科)

向日葵 (菊科)

スモークツリー (漆科)

花器 ガラス花瓶 (フィンランド)

ヘリコニアの名前はギリシア神話の芸術と学問の女神ムーサが住む「ヘリコン山」に因む。





## パイナップル

櫻子

花材 ミニパイナップル（パイナップル科）  
 ナツプル科  
 グラジオオラス（菖蒲科）  
 アロカシア（里芋科）  
 花器 ガラス鉢

パイナップルにはプロメラインというタンパク質分解酵素が含まれていて、食後に食べると消化を助けてくれる。また、まるごと買った時に残った芯は、刻んで肉と漬け込むと固いステーキが柔らかくなってくれるので役立つ。

そんなパイナップルへの親しみを込めて、優しいピンク色のグラジオオラスと、個性的なアロカシアの葉をとり合わせ、青いガラスの器にかけた。見てみると元気をもらえる、そんな盛花。アロカシアの茎は見た目より弱いので、太めの針金を添わせて茶色のフローラルテープで巻いておく。場台によっては葉裏にも針金を這わせておくといい。





いけばなインターナショナル  
京都チャプター例会

会期 6月18日(火)

会場 京都ブライトンホテル

講師 桑原櫻子

助手 桑原健一郎 滝本慶由

二井慶博 島慶和

「初夏の出逢い花に想いをよせて  
万葉集の花をいける」



新しい時代、令和が幕を開けました。奈良時代に完成した日本に現存する最古の歌集「万葉集」を典拠とする元号は初めてです。万葉の花を詠んだ美しい歌を、花と共にご覧いただきました。 櫻子

キキョウ

朝顔は 朝露おひて 咲くといへど  
夕かげにこそ 咲きまさりけれ

朝顔（おそらく桔梗のこと）は朝露を受けて咲くというけれど、夕方の光の中でこそ、なおよそその美しさが際立つものなのです。

写真② 七竈 桔梗 撫子  
陶花器（幾左田昌宏作）

アジサイ

紫陽花の 八重咲くごとく 弥つ

代にを いませわが背子 見つつ  
惚はむ 橘諸兄

アジサイの花が幾重にも重なって美しく咲いているこの佳き日。あなた様にはこれからも末永くお元気でご繁栄されますようにお祈りしています。これからもアジサイを見る度にあなたを想っています。

写真③ 珍至梅 紫陽花  
竹島百合

手付大籠（公長斎小菅）

ハス

ひさかたの 雨も降らぬか 蓮葉に溜まれる水の 玉に似たる見む  
雨が降らないかしら、ハスの葉に溜まった水が玉のようにきら

めくのを見たいなあ

写真④ 蓮しまゐし  
ガラス花器 蒔筆

### ユリ

道の辺の 草深百合の花笑みに  
笑みしからに 妻と言ふべしや  
道端の草の茂みのユリのように  
微笑んだだけなのに、(あなたは私の事を) 妻だと言うのでしょうか、そうではないですね。

写真⑤ 横縞太藪 笹百合  
下野 半夏生(半化粧)  
青白磁蛙耳花器(伊東陶山作)

### イヌビワ(ちち)

ちちの実の 父の命 ははそ葉の  
母の命 おぼろかに、心尽くして  
思ふらむ その子なれやも ますら  
をや 空しくあるべき……

父母が心を尽くして思っておられるような、そんな子供であるのだろうか、武勇で後の世に語りつがれるようにならないければ

写真⑥ 枇杷びわ(犬枇杷いぬびわとは別の木) 鉄線数種  
陶花瓶(加藤敏雄作)

### ハギ

我が衣 摺れるにはあらず 高松の



野辺行きしかば秋の  
摺れるぞ

私の衣はわざわざ染めたのではありませ  
ん。高松の野辺(ハ  
ギの名所)を行くう  
ちにハギの花の色に  
染まったのです。

写真① 無双秋むそうあきの着物を着て歌の  
世界を花と話してお伝えしました

和歌に詠まれた花の世界を、女  
性の視点でドラマチックに紹介。  
万葉人に親しみを感じる楽しいデ  
モンストレーションだった。仙溪

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2019年  
9月号  
No.675

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





王様 同士      ^表紙の花^ 櫻子

花材 キングプロテア（ヤマモガシ科）

葡萄<sup>ぶどう</sup> 「マスカット」（葡萄科）

花器 ガラス花器（ドイツ製）

8月初旬に岡山から葡萄をいただいた。飾りたくなるほど綺麗な葡萄だ。酷暑の中丹精こめて育てられた大変さを感じる。

8月半ばに山梨県のワイナリーへ見学に行ってきた。周りを山々に囲まれた丘の上に葡萄畑が広がっていた。標高が高く冷涼で日あたりにも恵まれているので、とても甘い葡萄が出来るそう。よく見る棚仕立ての他に品種によっては垣根仕立てもある。葡萄の木の足元には雑草が残っており、あえて自然の植物と競争させていた。

雨避けビニールの屋根が木の上に被せてあったり低い実の部分に掛けてあったりと、きめ細かに一つ一つの葡萄が守られていた。どの畑にどのような品種が適しているのかも考えられているようだ。

葡萄もワインも愛情を込めて作られていて、風土を生かした繊細な味わいに感動した。

今回は切りたてのキングプロテアと取り合わせた。どちらも王様！





## ローゼル

△11頁の花▽ 櫻子

花材 ローゼル (葵科)

リコリス・インカルナータ

(わがんぼな)

(彼岸花科)

紫陽花 (紫陽花科)

花器 陶製スーポウル

ローゼルの花はオクラやワタの花に似るが、蕾もしくは実の状態で収穫し、肥大した萼と苞がジャムやハーブティーに利用される。生で食べると酸味があるそうだ。ローゼルは西アフリカ原産で熱帯地方に分布する。日が短くなると咲く短日植物である。

リコリス・インカルナータは狸の薙刀とも呼ばれる中国原産のリコリスの原種の一つ。岡山の先生が庭から切ってきて下さった。

このアンティークのスーポウルに秋色のアジサイがよく映る。自分の感覚を頼りに三種の花を取り合わせが、うまく調和してくれた。





かぼちやのかたち

△2頁の花▽ 櫻子

花材 木苺(薔薇科)

花茄子(茄子科)

透し百合(百合科)

花器 陶花器

ナスやトウガラシの仲間が花ナスや花トウガラシとして、昔からいけばなの花材に使われてきた。

暑くて枝ものない時に代りとして使う事もあったが、葉がついていないので、中々きれいにさせるのは難しく、苦手な花材だ。

かぼちや型の平たいかたちの実が枝に並ぶ。観賞用のナス科の品種でソラナム・パンプキンと呼ばれる。ナスとトマトが混ざったような感じ。食べても美味しくないらしい。大学の講義でいけてみた(時々講師としてお呼びがかかる)。キイチゴの紅葉した葉を添えると瑞々しく、秋らしい花になる。面白いかたちが学生達にも喜ばれた。

横から見た奥行き





山芍薬の実

^ 10頁の花 ^ 櫻子

花材 山芍薬 (牡丹科)

糸菊 (菊科)  
蓼 (蓼科)

花器 手付通草籠

ヤマシヤクヤクの学名は「ピオニア・ジャポニカ」でボタン科のポタン属。初夏の頃、透き通るような繊細な花を一輪だけ咲かせる。洋芍薬とは違い中々出会う事の出来ない貴重な花だ。器も取り合わせも特別なものを考えてあげないと綺麗に咲いてくれないような気がする。場所によつては絶滅危惧種にもなつていて、咲くのに6年もかかるので、育てている方は大変な事だ。その清楚な花からは想像も出来ないような派手な実。初秋には実が熟して結実しない赤色と結実した濃紺色の種子になる。

今年は何荷する数も少なく大切な一本となった。一輪菊とタデの花と籠花に。



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2019年  
12月号  
No.678

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 月桃の実のいけばなとお茶

△表紙の花▽ 櫻子

花材 月桃の実 (生姜科)

薔薇 (薔薇科)

花器 デルフト花瓶

沖繩から来た月桃の実。夏には可愛らしいキャンディの様な実になるので、稽古花材として良く使う様になった。緑、黄、オレンジ、赤と色づいて最後は薄茶色の実となる。沖繩ではとても身近なショウガ科の植物で生活の一部として使われる。葉は抗菌効果があるので食物を包んだり、乾燥させて虫除けにも。花は桃の実のように可憐だが中々いける事は出来ない。その花の蒸留水は化粧水にもなる。

寒い日の夜、月桃のハーブティは身体を温めてくれる。ワインよりもポリフェノールが多くノンカフェイン。乾燥した実を5分ほど煮出して、ピリッとしたエキゾチックなお茶。





バラの実「センセーション  
ナル・ファンタジー」

△3頁の花▽ 櫻子

花材 メラレウカ(フトモモ科)

薔薇の実(薔薇科)

ダリア(菊科)

花器 ガラス花瓶(フィンランド)

バラの実「センセーションナルファンタジー」は一重の濃いピンクの花が咲いた後の実を鑑賞するためにつくられた品種だそう。樹勢が強いので栽培しやすく、今後出荷も増えてくるだろう。長く飾ったあとドライにしてさらに楽しめる。

実の足元に黄色のメラレウカをたっぷり加え、同色のダリアを覗かせた。赤い器にいけると実たちが元気に飛び跳ねて見える。喜んでくれているようだ。

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2020年  
1月号  
No.679

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元







年賀のいけばな 表紙の花 櫻子

花材 松(松科)

梅擬「ウインターベリー」(繡の木科)

水引草の紅葉(蓼科)

水仙(彼岸花科)

花器 陶花瓶(鈴木健司作)

干支 俵の鼠(陶・鈴木健司作)

新年のお祝いとご挨拶の気持ちを込めたいけばなです。ウインターベリーはアメリカ原産。明るく生命力溢れる赤い実から元気をもらえます。松と水仙を取り合わせて、色づいた葉を繋ぎ役に。





ラッパズイセンの白花

△4頁の花▽ 櫻子

花材 喇叭水仙(彼岸花科)

チューリップ(百合科)

スノーフレック(彼岸花科)

丸葉ルスカス(百合科)

花器 陶水盤

新年を迎えてお正月が過ぎ、休んでいた花市場が稼動したすと、一斉に春の切り花たちが花屋に並ぶ。ナノハナ、チューリップ、ラッパズイセン、フリージア、スイートピー。近頃はユキヤナギやコデマリなどの春の花木も手に入る。家の外は木枯らしが吹いていても、家の中は冬の花と春の花が季節を超えて共存している。

丁度今の季節を感じる花もいいし、季節の先取りの花もいい。

白いラッパズイセンに白いスノーフレック。同じ色の花を2種類組み合わせることはあまりしないが、いけてみると花色が印象深くなってきた。花色の組み合わせを工夫できるのも、春ならではの楽しみ。





### 黄花の金魚草

△10頁の花▽ 櫻子

花材 木苺(きいちご) (薔薇科)

金魚草(こま) (胡麻の葉草科)

マーガレット(まがれつ) (菊科)

花器 陶コンポート

キンギョソウにはいろいろな色がある。色や大きさでとり合わせる相手も変わる。鮮やかな黄色のキンギョソウは春の緑と相性がいい。白いマーガレットもキイチゴの蕾も、キンギョソウと一緒に上へ上へと伸びようとしているようだ。

横から見た奥行き



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2020年  
4月号  
No.682

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



薔げんまいと豆の花

△表紙の花▽ 櫻子

花材 薔げんまい（薔科）

エピデンドラム（蘭科）

豆の花（豆科）

花器 赤ガラスコンポート

この花をいけたのは3月初旬で、丁度沖繩からゼンマイが届いたところだった。花屋のバケツに入っていると目立たないのだが、飾ってみると小さく巻いた若芽が可愛らしくて、一気に春らしい花になった。柔らかくてひ弱そうに見えたマメノハナも添え木をしていけるとぐんぐん成長してくれている。

毎日花から元気をもたらしている。





ドラセナ

△ 4 頁の花▽ 櫻子

花材 ドラセナ・ソングオブインディア

ディア (竜舌蘭科)

カーネーション (撫子科)

スイートピー (豆科)

花器 陶鉢

ドラセナ・ソングオブインディアのフサフサした豪華な葉。足元隠しにとりあえず入れるのではなく、主役に見せたいと思う。

大輪深紅のカーネーションは茎も太くて存在感がある。純白のスイートピーでメリハリがついた。

横から見た奥行き



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2020年  
5月号  
No.683

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 芹せりの花

△表紙の花▽ 櫻子

花材 レースフラワー

「ダウカスボルドー」(芹せり科)

胡蝶蘭3種(蘭科)

花器 レースガラス花瓶

軽くて柔らかいレースフラワー「ダウカスボルドー」中々見かけない珍しい色の花。大切にしているレースガラスの器に飾った。この花器に花を飾ると花全体が貴婦人の様な雰囲気になる。コチヨウランも特別なものを取り合わせて。足元をクロスさせて器の中の茎を見せない様にしていけている。







白牡丹

△2頁の花▽ 櫻子

花材 牡丹(牡丹科)

薊(菊科)

八角蓮(目木科)

花器 煤竹手付籠

今日咲きました！というところを  
ぱっと切らせてもらってハッカクレ  
ンとアザミを取り合わせた籠花。ポ  
タンの花が大輪過ぎて挿す場所が  
中々決まらなかった。ストレスを感  
じさせない様に気を遣いながら…。





深山の宝石

△2頁の花▽ 櫻子

花材 山岩菜(牡丹科)

撫子(撫子科)

紅羊齒(雄羊齒科)

花器 陶鉢

ヤマシヤクヤクは山の奥深くで白く輝く宝石のような花だ。そつと薄紅色のナデシコを添えた。





## 初夏の香り

△2頁の花▽ 櫻子

花材

深山南天(薔薇科)

杜若(菖蒲科)

笹百合(百合科)

花器 フランス製青練込陶鉢

過去の「テキスト」では白黒写真だったので、カラーで再掲載。

カキツバタの雅な色と、ササユリの優しい色は、白黒写真では伝わらない。

このササユリは奈良の知人が種から育てたものをいただいた。その時聞いたところによると、ササユリは生育が非常に遅く、一年目は一枚葉がやっと発芽するだけで、開花には7～8年かかるそうだ。

私たちがいける花には、それぞれにドラマがあると思うと、愛おしく大切にしなければと思う。

四季咲きのカキツバタと軽やかなミヤマナンテンをとり合わせた。

高さを抑えて、枝の広がり的印象的に見せた。

(2006年7月 517号より)



こころは異国へ

△4頁の花▽ 櫻子

花材 ギガンチウム(百合科)

煙の木(漆科)

レリア(蘭科)

花器 陶花器(宮本博作)

今年も又新鮮なスモークツリーを  
いける事が出来た。岡山へは行けて  
いないけれど、お弟子さんが箱詰め  
にして送って下さった。日当たりが  
良く風通しの良いお庭で、手入れを  
して大切に育てておられるので、年  
毎に大きく豊かにスモークしている  
ようだ。

毎年お稽古させていたたくのが楽  
しみで、薔薇や向日葵、柏葉紫陽花  
など季節の花を取り合わせている。  
今回はギガンチウムと、カトレアに  
似たレリアという細くて繊細な蘭と  
合わせてみた。

赤い花器にモロッコ刺繍の敷物  
で、異国にいる様。今は何処にも行  
けないけれど、こんな風楽しんで  
いる。





温帯に育つバショウ

△3頁の花▽ 櫻子

花材 糸芭蕉(芭蕉科)

鉄砲百合(新美白)(百合科)

紫陽花(紫陽花科)

花器 染付深鉢

こんなに大きな葉を見ると、さぞかし暑い地方から来たのかと思ってしまう。

このイトバショウは別名リュウキュウバショウで、繊維を取るために沖繩で多く育てられてきた。バナナは熱帯性だが、イトバショウは温帯性なので京都でもよく見かける。

白いユリとアジサイを合わせた。染付けの大鉢にいけると花の藍色と馴染んでとても涼しそう。



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2020年  
9月号  
No.687

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



草紫陽花

くさあじさい  
△表紙の花▽ 櫻子

花材 狗尾草 (稲科)

草紫陽花 (紫陽花科)

鉄線 (金鳳花科)

花器 金属裝飾陶器 (モロッコ製)

クサアジサイはアジサイに似ているが、草である事に由来してこの名前になったようだ。葉も互い違いに生えていてアジサイとは趣きが違っている。

控えめなクサアジサイだが、一輪添えただけで花全体が優しくなる。

ブドウやエノコログサと取り合せて秋が早く訪れる事を願う。





風に揺れる

△ 6 頁の花 ▽ 櫻子

花材

矢筈薄 (稲科)

グロリオサ (百合科)

九蓋草 (胡麻の葉草科)

花器

陶花瓶

野生のグロリオサをインドで見たことがある。女性の奉仕団体のメンバーとして、その国際大会がインドであり、現地をバスで移動している時だった。空き地の草むらに赤い花が咲いているのを見つけた。真っ赤なグロリオサだった。

グロリオサは熱帯アジアおよびアフリカ原産の多年草。和名はキツネユリで、ユリ科またはイヌサフラン科に分類されている。

グロリオサは体を支えるために、葉の先を伸ばして他の草の茎などに巻き付く。炎のような花の姿も独特だが、葉先のクルクルも愛らしい。

インドの草むらで見たイメージでグロリオサをいけてみた。

グロリオサの葉を丁寧に残し、ヤハズススキと投入にすると、野原で他の草を頼りに、風に揺れながら咲いていた赤い花と重なる。色の効かしに薄紫のクガイソウを加えた。





コボウズオトギリ

△7頁の花▽ 櫻子

花材 ヒペリカム(おとし草科) 櫻子

ガーベラ3色(菊科)

花器 デルフト陶花瓶

ヒペリカムは赤い実を小さなお坊様に見立てて、コボウズオトギリとも呼ばれる。

赤い敷物は灼熱の大地。そこに涼しげな青い絵付けの花瓶を置く。器の模様を雲と見れば、雲海を下に見る天界に咲く光の花と修行僧のイメージに、とは大袈裟か。

以前、インドの高地にあるヒンズー教の聖地を訪れたことがある。聖なる山の宿坊に各地から巡礼者が何日もかけて集まってくる。そして皆、決まって頭を丸める。乳飲み子も含めて家族全員だ。私達を運んでくれた運転手も翌朝丸坊主で現れた。この地で坊主頭になることが長年の夢だったと目を輝かせて教えてくれた。そんなことを、この花の写真眺めていて思い出した。





ビキニーニヨという唐辛子

△7頁の花▽ 櫻子

花材 丸葉の木(満作科)

ビキニーニヨ(茄子科)

蘭「グラマトフイラム」

(蘭科)

花器 角形陶花瓶

ブラジルから来たフルーティなトウガラシといわれる「ビキニーニヨ」を八百屋さんでなく、花屋さんで見つけた。赤、橙色、黄色でプチトマトのような実が枝分かかれしてぶら下がっている。ユニークで可愛い沢山のトウガラシを紅葉の丸葉の木と投入に。「グラマトフイラム」は夏から秋に咲く蘭の花。ほっそりと長く軽やかで、瑞々しい翡翠色が秋の実に潤いを与えてくれる。

横から見た奥行き





### シロシキブの花

△3頁の花▽ 桜子

花材 白実小紫

(熊葛科・紫蘇科)

杜鵑草 (百合科)

水引草 (蓼科)

花器 手付籠

小さな白い実が美しい。シロシキブと呼んでいるが、シロミノコムラサキが正確な名前らしい。繊細な枝に沢山の実ができてゐる。白花のホトトギスを加えると、白い実と白い花が白さを競い合っているようにも、互いに助け合い讃え合っているようにも見える。赤い花のミスヒキソウが優しく寄り添う。



シロミノコムラサキの花  
出典：[https://www.ootk.net/cgi/shikihhtml/shiki\\_818.htm](https://www.ootk.net/cgi/shikihhtml/shiki_818.htm)





### メラレウカ

△3頁の花▽ 櫻子

花材 メラレウカ（フトモモ科）

柏葉紫陽花の葉（紫陽花科）

ガーベラ（菊科）

花器 ガラス花瓶（コスタボタ）

メラレウカをいける様になって6、7年になる。

オーストラリア原産でユーカリと同じフトモモ科の樹木である。

ティーツリーとも呼ばれるが、最近では日本でも暖かな場所では育てられ出荷される様になってきた。

繊細な黄金色の葉がガーベラを柔らかに包み込んでくれる。

手で葉を揉むと爽やかで清い香りがして自然の恵みを感じる。

飾る場所が清潔な空間になる様な気がする。

今年はお稽古で何度もいけさせてもらえたが、紅葉した木苺や雪柳のように、秋を彩る身近な花材となるように嬉しい。





アメリカハナノキ

櫻子

花材 アメリカハナノキ (楓科)

月桃の実 (生姜科)

ダリア (菊科)

花器 銅打ち出し壺

花屋さんの庭で紅葉したアメリカハナノキを切ってもらった。アメリカ北部〜カナダに分布する落葉高木。公園や街路に植栽されている。別名アカカエデ、ベニカエデ。早春葉よりも先に紅色の花が咲き、秋に美しく紅葉する。

赤い実と花を合わせて銅の器に



アメリカハナノキの花・葉・実

出展： <http://www.forest-akita.jp/data/2017-jumoku/133-amerikahana/amerikahana.html>





## 南天の姿を

△2頁の花▽ 櫻子

花材 南天(目木科)

デンファレ(蘭科)

ミリオグラタス

(頁入科)

花器 陶花器(宇野仁松作)

真つ直ぐに立ち上がる姿の南天。縁起の良い木でお正月の花材として多く出荷されるが、今年は早くから紅葉のきれいなものが多かった。

足元には柔らかくしなやかな白いデンファレをいけた。

ミリオグラタスを添えて、硬くてゴツゴツした南天の枝を見えなくして軽やかに。

お庭に植っている雰囲気とは違う私好みの華奢で軽やかな姿にしてあげるのもいけばなの楽しみのひとつ。



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2021年  
2月号  
No.692

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 早春の色合い

△表紙の花▽

櫻子

花材 白梅（薔薇科）

菜の花（油菜科）

スイートピー（豆科）

晚白柚（蜜柑科）

花器 手付舟形陶水盤

今年の冬は暖冬なのか厳冬なのか、週代わりで気温が変化し温度調節が難しい年となった。

昨年末に訪れた植物園には楓の大木が紅葉していて見事だった。周りの道には色づいた落ち葉が敷き詰められて大地を温めているようで、スノードロップやナルキッサスの花が控えめに咲いていた。

今年も干支の置物と一緒に晚白柚を新年の花として飾らせていただいた。その後も食べてしまうのがもったいなくて、早春のいけばなの彩りとして一緒に置き合わせた。

白梅と菜の花とスイートピー。大地から淡黄色が萌え出る。穏やかに平和な春がきますように。







トルコ染付けの器

〈12頁の花〉 桜子

花材 青文字(楠科)

小手毬(薔薇科)

チューリップ(百合科)

花器 トルコ花文陶花瓶

トルコへ旅をした思い出に手に入れた花器。海外で大きな花器は中々見つからないし、もし見つけてもどうやって持ち帰ろうかと悩んだ末買うものは少ない。

イスタンブールのグランドバザールには伝統菓子などをはじめ、民族衣装、スカーフや絨毯、宝石、タイルなどありとあらゆる物が売られている。5000もの店が軒を連ねている中に一軒だけある染付けの陶器店でチューリップ柄の花器を買った。

そんな思い出の花器なのだが、花柄の器に花をいけるのは中々難しい。器の絵柄も引き立てながら負けない様に。青文字も小手毬もチューリップも満開のタイミングで。

横から見た奥行





## 早春のアマリリス

△2頁の花▽ 櫻子

花材 連翹(木犀科)

アマリリス(彼岸花科)

花器 ガラス水盤

(ウルリカ・ヴァアリン作)

国産のアマリリスは1月末から2月中旬頃に出荷される。花茎に芯棒を入れてあげないと凍てついて折れ曲がる事もある。

今年は寒い日もあったが、しっかりと支えられて花が力強く咲き出してくれた。外国産の花色に比べると色は薄い、葉を沢山添えると鮮やかな赤橙色を感じる事ができる。レンギョウの鮮黄色もアマリリスの花色を引き立ててくれる。

コスタボダの金彩画の器に元気いっぱい咲いて。

横から見た奥行





八重咲きチューリップ

△4頁の花▽ 櫻子

花材 猫柳(柳科)

チューリップ(百合科)

花器 ガラス鉢

八重咲きのチューリップ、モンテオレンジとイエローマルガリータ。暖かくなると芍薬しやくやくの様に豪華に咲く。

八重咲きの魅力は花の形も葉も丸みがあつて可愛いらしく、いけるとミカンやレモンが並んだよう。

そういえば、店先に売られているキンカンを丁度見つけて食べたくなり、久しぶりに甘煮を炊いてみた。半割にしたキンカンの面はチューリップの笑顔のよう。

フワフワに膨らんできたネコヤナギの花芽も一緒に大きく膨らんできた。

毎日伸びるチューリップと競い合うように。



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2021年  
4月号  
No.694

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 春を迎える花

△表紙の花▽ 櫻子

花材 雪柳(薔薇科)

椿「岩根絞り」(椿科)

花器 陶花器

中庭の寒椿が昨年かんつばきの11月18日にひとつめの花を咲かせた。一昨年より10日ほど遅かったので日付けを記しておいた。花のない時期に咲いてくれる貴重な椿だ。

この椿が冬の間中咲いてくれるお陰で、晩秋から春までの長い間、いろんな椿が咲き続けてくれる。

品種によって咲く時期が違うが、咲く順番は毎年変わらないように思う。

椿は浮かし花や掛け花になくなくてはならない花でもある。いけるのが待ち遠しい。でも庭の椿はあまり切りたくないが。

今年は大輪の「岩根絞り」を雪柳と取り合わせる事が出来た。雪柳と椿、桜と椿は大好きな組み合わせだ。

岩根絞りの様な派手なコントラストの花は、軽やかで伸びやかな雪柳がよく似合う。





アリウム・シルバースプリング  
△2頁の花▽ 桜子

花材

アリウム・ギカンチウム(百合科)

アリウム・シルバースプリング(百合科)

黄花アイリス(菖蒲科)

エメラルド・ウエーブ(茶葉羊歯科)

花器 ガラス花器

玉ねぎやラッキョウ、ニンニクが仲間のアリウム属の花は種類も多いが、それぞれにとてもきれいな花が咲く。百合科なので小さな六弁の花が球形になり花火の様にも見える。毎年色んなアリウムに出会うが今年はシルバースプリングという中心に赤色が混ざるアリウムを見つけた。

アリウム・ギカンチウムと取り合わせると、畑に咲くネギの花が並ぶ感じ。初夏の青空の下で元気いっぱい咲いてくれるようで力強い。アリウムの葉は畑に残され太陽を浴びて栄養を球根に送る役割をする。代わりにエメラルドウエーブという葉を添えた。





薇と千鳥草

△ 6頁の花 ▽ 櫻子

花材 薇(羊歯の若芽)

千鳥草(金鳳花科)  
紅羊歯(雄羊歯科)

花器 陶コンポート

春の芽吹いたシダ類と初夏の花を取り合わせる事はめったにしない。季節がちぐはぐになるからだ。きれいであれば何でも良いとは思わない。料理と同じで美味しければ良いとは思っていない。

でも今年の様な気候がこれから先も普通になるのであれば仕方ないかもしれない。一斉に花が咲き揃ったような感じだ。季節の区切りが曖昧になり、違和感を感じながら花も料理も考えなければならぬけれど、今までとは違う新鮮なものも感じていると思う。

若葉の赤茶色が可愛い庭のシダを、園芸種のラークスバー(千鳥草)に添えられるとは思わなかった。

人々の自粛生活が緩んだのと同じように庭の植物達も……。





酔<sup>す</sup>の<sup>の</sup>木<sup>ぎ</sup>、夏<sup>なつ</sup>櫛<sup>はげ</sup>。

△7頁の花▽ 櫻子

花材 夏<sup>なつ</sup>櫛<sup>はげ</sup> (躑<sup>つじ</sup>躑<sup>つじ</sup>科)

鉄<sup>てつ</sup>砲<sup>ぽう</sup>百合<sup>りやう</sup> (百<sup>ひゃく</sup>合<sup>ごう</sup>科)

撫<sup>ぬ</sup>子<sup>こ</sup> (撫<sup>ぬ</sup>子<sup>こ</sup>科)

花器 陶<sup>たう</sup>花<sup>か</sup>瓶<sup>びん</sup> (宮<sup>みや</sup>下<sup>げ</sup>善<sup>ぜん</sup>爾<sup>に</sup>作<sup>さく</sup>)

ナツハゲはスノキ属。葉や実が酸っぱい木なのでスノキ。ブルーベリーもスノキ属だ。スノキ、ウスノキ、ナツハゲ、オオバスノキ等が夏櫛の名前で切り枝になる。ユリとナデシコを合わせて自然調にいけた。







## ライラックの季節

△12頁の花▽ 櫻子

花材 ライラック (木犀科)

薔薇 (薔薇科)

ユーカリ (フトモモ科)

花器 カットガラスコンポート

待ち遠しいライラックの花が咲く季節。日本では北海道や信州の高原で育ち、ヨーロッパでは街路樹としてもよく植えられている。

甘い香りを持ちハート型の葉とたつぷりとした房咲きに咲く華やかで可愛い花、紫やピンク、白のおしゃれな色。大好きな花。6月だけの限定品。

切り花として届くライラックがもう少し日持ちしてくれば嬉しいのだが。

出来る限りの水あげをして深水のパンチボウルにいける。きれいなバラと取り合わせた。

ライラックが機嫌を損ねないよう気分良く咲いてもらいたいと願う。





### カジノキの葉

△4頁の花▽ 櫻子

花材 梶の木(桑科)

蛸袋(桔梗科)

花器 角形染付花瓶

古代からカジノキは神に捧げる神木として尊ばれて、神社の境内などに多く植えられていた。カジノキの繊維から紙や布を作っていたことから、もとは裁縫の上達を願う行事でもあった七夕に縁が深い。「天の川へ渡る船の梶となつて願いが叶えられる」と信じられていた。今日では短冊に願いを書いて笹に結ぶ風習となる。

庭でカジノキを小さな苗木から育てている。夏になり葉が大きくなると複雑な形に変わっていくのが楽しい。伸びた枝を少しだけもらってポタルブクロと飾った。

庭の祇園守り(木槿)とカジの  
浮かし花





## 煙けむりの木

△7頁の花▽ 櫻子

花材 煙けむりの木（スモークツリー）

（漆科）

カラー5種（里芋科）

花器 ガラス鉢

涼しくて陽当たりの良いレストランの中庭に不思議な木があった。近づくたびにフワフワした雲の中に入り込むような感じ。いい香りがして柔らかく包まれるようだった。

初めてスモークツリーを見たのはドイツだった。ずいぶん昔の事なのでレストランの名前も思いだせないけれど、一緒にいたドイツの友人がドイツ語名で教えてくれた。難しく聞き取れなかったけれど、意味はカツラの木。ウィッグの事らしいが、日本は煙だし、国によってずいぶん見方が違うのだ。

スモークしてとてもきれいな花となる。カラフルなカラーを集めて夢のような思い出の花に。

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2021年  
8月号  
No. 698

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 縞すすき

△表紙の花▽ 櫻子

花材 縞薄（稲科）

アンズリウム数種

（里芋科）

花器 白磁扁平花器

縦シマがはいるススキは縞薄（シマすすき）、横シマがはいるのは鷹の羽薄（たかのはすすき）。

久しぶりにシマススキを見つけたので、アンズリウムを足元に固めてみた。

タカノハススキなら竹籠などに夏の草花と一緒にいけたいと思うが、シマススキは強靱な雰囲気なので洋花との取り合わせもいかもしれない。

力強く立ちあがる葉もあり夏の夕立ちのよう。

今年の夏も無事乗り越えられますように。そんな事を願いながら少しでも長持ちしてくれるよう毎日水替えをしている。



横から見た奥行



暑さに別れを

△2頁の花▽ 櫻子

花材

七竈ななかまど（薔薇科）  
鶏頭けいとう（寛科）

花器 陶花器（前田保則作）

ナナカマドは北国きたくにに多く、ケイトウは南国なんごく由来の花だ。それなのにナナカマドの紅葉にはケイトウの秋色がしっくりとよく似合うのが不思議。ケイトウの瑞々しい緑の葉が両者を繋ぐ役目をしてきている。

ケイトウを前へ出したので、ナナカマドを後ろに高く立てた。





## 花守として

櫻子

ていただいた。

盧山ろさん寺源氏庭しげんじていの東側には古くから桑原専慶流記念塔が建てられている。

楓の木と楠の木陰でいつもしっとりとして苔生ず姿で私を迎えてくれる大きな石碑だ。

師範認証式や行事がある時にはこの記念塔に献花するのは私の役割で、若い時からずっと花をいけてきた。

白い小花を穂の様に咲かせるサラシナシヨウマは初秋の山や高原に行かないと中々出会えない。

そんな貴重で珍しい花を秋の七草と取り合わせた。

白銀彩の花瓶を選んで、いつものように掃除をして水を打ち、静かにいけて飾らせ







キラキラ 鹿王院客殿

△2頁の花▽ 櫻子

花材 鍾馗水仙(彼岸花科)

龍胆(龍胆科)

男郎花(女郎花科)

花器 陶水盤 近藤豊作

屏風 藤井隆也作

無数の光の輪のようなこの屏風の色に合わせて、黄色と赤紫の花をいけ、絵と一体となるように白い花を加えた。水面にも敷板にも屏風の絵が映っている。花がキラキラ光って見えた。



## 純白のクリスマス

△2頁の花▽ 桜子

花材 メラレウカ

(フトモモ科)

シンフォリカルポス

(すいけいすけい科)  
(忍冬科)

ダリア (菊科)

花器 ガラス花器

メラレウカとダリアの横に添えてある木はシンフォリカルポスという名のスイカズラ科の植物。英名はスノーベリー。秋の頃きれいな白い実をつける。何度聞いても覚えられない名前だが、調べてみるとギリシャ語で「房状になっている果実」という意味らしい。日本語では普通すぎる意味なのにギリシャ語ではすごくミステリアスな言葉になる。

純白の実がクリスマスらしい雰囲気を出してくれる。

最近では長い期間出荷されるようになったメラレウカ。足元をよく割っていけると日持ちしてくれて豊かでしなやかに花を引き立ててくれる。

暖かそうなシヨールを巻いてあげたくなった。



### 器のチカラ

△7頁の花▽ 櫻子

花材 千両(千両科)

シンピジウム(蘭科)

薔薇(薔薇科)

花器 陶花器(柳原睦夫作)

不思議な形の器だ。三方にお団子がついている。手に持つとコロンとした丸みが子犬のようで愛らしい。でも中を覗くとふくらみの内側は深い洞窟のようにも見える。色んな顔を持つ器。この器には名前がある。「ふくら壺」という。ふくらは膨らみのことだが、「福良」と書く縁起が良い。そう思って器を見ると福の神にも見えてくる。器との出逢いで花の見え方が変わる。器のお陰で豊かな温もりを感じる花になった。





鮮やかな花色

△2頁の花▽ 櫻子

花材 赤芽柳(柳科)

アネモネ(金鳳花科)

ミリオクラダス(百日科)

花器 ガラスコンポート

まだまだ寒い季節。心も体も萎縮しがちだが、部屋にアネモネがいけてあるだけで、気持ちが明るく晴れやかになる。

アネモネにはユキヤナギやコデマリのような小花の花木か、クロメヤナギやネコヤナギがよく似合う。





### エジプト花瓶

△2頁の花▽ 櫻子

花材 雪柳(薔薇科)

菜の花(油菜科)

レリア(蘭科)

花器 金属花器(エジプト製)

エジプト製の真鍮銀象嵌瓶。つい磨きすぎて最初の頃よりも大分色が違って来た。金ピカの花器になってしまつて明るい春の花が似合うようだ。黄色い菜の花、カトレアに似たオレンジ、ピンク色のレリアをいけた。

今年は冷たい日が多く雪柳もまだ少し弱々しかったが、派手な色の中へ溶けこんで元気いっぱい。





## ランンキュラス

△12頁の花▽ 櫻子

花材 ランンキュラス(金鳳花科)

アルストロメリア(百合科)

落の葉(菊科)

花器 金属裝飾陶水盤(モロッコ製)

黄色の色鮮やかなランンキュラス。大輪で茎もしっかりして長く咲き続ける花になったのはいつ頃からだろう。昔はひ弱で足元に添えるだけの花だったのに。今は春の花として一番人気かもしれない。

家の近くにある花屋さんに入ると、正面の一番目立つ処に春は色んな彩りのスイトピーが売られている。夏から冬の間は殆どトルコキキョウで時々ヒマワリ、リンドウが置かれる事がある。

同じ花の色違いで7〜8種類並べられるのだから素敵でうっとりしていつも数種類同じ花を買ってしまう。この場所に並べられる花が一番良く売れるはず。ランンキュラスはまだそこに置かれた事はないが、沢山の種類が揃えば飾ってほしい。

高価な花だがびっくりするほど長く日持ちする。もう暫くするとランンキュラス・シャルロットという

品種が出てくる。

アネモネのよう

な咲き方でエキ

ゾチックな花。

食卓に一輪だ

け飾りたい。





家にある中ではかなり大きい花器だと思うが、今回とても小さく見えた。清水六兵衛氏の器にかけた四方面の花。陽光桜は美城吉野と寒緋桜の交配種で、大きく成長すると見応えがある。今回いけたのは3メートルほどの大枝だったが、家元は簡単に留めてくれた。四方へ伸びた桜の枝に板谷名月や雪柳、レリア（蘭）が鮮やかに響き合う。太陽の光を象徴する陽光桜。平和の象徴として作られた桜をいけられた事が素晴らしい。

桜の四方面 桑原櫻子（副家元）

花材／陽光桜（蔷薇科） 河津桜（蔷薇科） 雪柳（蔷薇科） 板谷名月（楓科） レリア（蘭科）  
花器／陶花器 清水六兵衛



桜の四方面 桑原櫻子（副家元）

花材／ようこうざくら陽光桜（薔薇科）ぼら河津桜（薔薇科）かわづざくら雪柳（薔薇科）いたやめいげつ板屋名月（楓科）かえてレリア（蘭科）  
花器／陶花器 清水六兵衛





家にある中ではかなり大きい花器だと思うが、今回はとても小さく見えた。清水六兵衛氏の器にikeした四方面の花。陽光桜あまぎよしのかんひさくらは天城吉野と寒緋桜の交配種で、大きく成長すると見応えがある。今回ikeしたのは3メートルほどの大枝だったが、家元は簡単に留めてくれた。四方へ伸びた桜の枝に板谷名月や雪柳、レリア（蘭）が鮮やかに響き合う。太陽の光を象徴する陽光桜。平和の象徴として作られた桜をikeられた事が素晴らしい。



## ブラサダという蘭

△2頁の花▽ 櫻子

花材 クロトン2種（燈台草科）

ブラサダ・オレンジ

デライト（蘭科）

花器 金属裝飾陶皿（モロッコ）

長くて尖った花が珍しい蘭の「オレンジ・デライト」見惚れて暫くは食卓に飾った後、クロトンと一緒にいけてみた。

クロトンもカラフルできれいなものが多く、細葉や赤い葉脈がくっきりと目立ち、リュウノヒゲとかコブラと呼ばれる様な品種もあるくらい多様な形と柄がある。

どちらも長く日持ちしてくれたが、枯れていく姿も美しく、器を変えながらこの組み合わせを楽しんだ。

横から見た花の奥行





パイナップルの仲間

△5頁の花▽ 櫻子

花材 オクロレウカ(菖蒲科)

黄花グロリオサ(百合科)

ネオレゲリア(パイ

ナップル科)

花器 ガラス鉢

オクロレウカとグロリオサだけでは平凡なのでパイナップルの仲間であるネオレゲリアを足元に添えた。黄色のグロリオサと一緒に飛び跳ねる様なかたちが可愛らしい。赤く染まっている部分も全て葉だが、まるで花の様に見える。

熱帯アメリカ原産のネオレゲリアは手に入れてから2ヶ月にもなるが、部屋にいらしても鮮やかで艶もあり生きているのがよくわかる。

木の上や岩盤などにくっついて生活する着生植物なので、根は退化していて水を吸い上げない。水は葉の中心部に霧吹きして鑑賞している。



たっぷりと

△3頁の花▽ 櫻子

花材

花菖蒲はなしょうぶ（菖蒲科）  
撫子なでしこ（撫子科）

花器

カットガラス鉢

縁あって沢山の花菖蒲がやってきたので、大きなガラス鉢にたっぷりといけて玄関に飾った。四方から見えることを意識していけている。どの花も一斉に咲いてくれて感謝。





おとぎ話のような  
△4頁の花▽ 櫻子

花材 デルフィンニウム

(金鳳花科)

茴香(芹科)

カンパニユラ(桔梗科)

花器 陶花瓶(フランス製)

この立派なデルフィンニウムの故郷はヨーロッパから中央アジアにかけての山岳地帯だそう  
だ。冷涼な高地の草原湿地に咲く姿はさぞ幻想的だろう。

地中海沿岸原産のウイキョウとカンパニユラを合わせ、金の三日月模様の器にかけた。不思議な花たちが咲くおとぎ話のようないけばなになった。



源為朝 みなもとのためとも

△2頁の花▽ 櫻子

花材 作百合(百合科)

唐糸草(薔薇科)

桔梗(桔梗科)

花器 陶花器(清水保孝作)

源為朝は平安時代末期の武将で、頼朝・義経兄弟の叔父にあたる。身長2mを超す豪傑で、九州・琉球・京都・伊豆諸島などに多くの伝説がある。

琉球のテップウユリ、伊豆諸島のサクユリ、そして京都ではヤマユリ(の変種?)がそれぞれ為朝百合と呼ばれている。

蓄で買ったタメトモユリは赤い斑点の無いサクユリだった。写真で見たことはあるがいけるのは初めて。源為朝の伊豆での勇姿を想像して楽しんでる。



サクユリ





## クロトンの木

△12頁の花▽ 櫻子

花材 クロトン(燈台草科)

カラー(里芋科)

アンズリウム(里芋科)

花器 銅器

稽古でいけるクロトンは一枚ずつの葉としていける事が多い。水上げが悪いので、足元に添える葉として売られている。トウダイグサ科の植物なので、先端が黄、赤、オレンジ色に染まり、葉脈がくつきりと美しい。葉の形が槍の先の鉾(ほこ)に似ているので鉾葉系と呼ぶそう。今回は鉢のクロトンの木を切らずに根のまま包んで銅製花器にいけてみた。花器の口も中も広くてすっぽり包み込む大らかさ。根ごといけたのでよく保ってくれている。暑い時期で保たない花が多いが、取り合わせを色々替えながらお玄関の迎え花として飾っている。





### カラジウムの葉

△12頁の花▽ 櫻子

花材 鶏頭(けいとう)  
(苧科)

カラジウム3種  
(里芋科)

花器 陶鉢(アメリカ)

熱帯アメリカ原産のカラジウムは夏から秋に鉢植で手に入る。葉色や葉脈の表情が1枚ずつ違う。色の違う3種類のカラジウムで色と形に変化がつけられる。ケイトウと対等にいった。





いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2022年  
11月号  
No. 713

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 今年も届いた烏瓜

△表紙の花▽ 櫻子

花材 烏瓜の実(瓜科)

白花杜鹃草(百合科)  
蓼(蓼科)

花器 煤竹手付籠

5年前からカラスウリをテキ  
ストに載せている。お弟子さん  
が庭で採ったものだ。過去に3  
作仙溪が書いて、今回は健一郎  
と私がつけた。それぞれに違う  
味わいがある。

私は赤と白の野草を合わせて  
籠花にした。煤竹の温かみのあ  
る色が良く似合っている。



烏瓜の花  
7月撮影



## オレンジ色

△4頁の花▽ 櫻子

花材

野茨の実(薔薇科)  
マリーゴールド(菊科)  
木苺(薔薇科)

花器 小紋陶花瓶

橙色の濃淡は様々な色名で呼  
ばれてきた。蜜柑色、萱草色、  
山吹色、支子色、深支子、柑子色、  
柿色、照柿、鬱金色、樺色(蒲  
色)、赤朽葉、淡香、朱色、飴色、  
赤橙、蘇比、丹色、鉛丹色、黄  
丹、金茶、鶏冠石、雄黄、琥珀色、  
珊瑚色、朱華、東雲色、曙色。  
赤朽葉という色名も素敵だ。  
自然の中や生活の中で目にする  
色の微妙な違いを、そのもの  
名前で呼んで区別したのでろう。  
どんなものが印象深く目に映っ  
たかを逆に想像できて面白い。  
この花の色はマリーゴールド  
色と呼ぶことにしよう。



## 枯れヒマワリ

△12頁の花▽

花材 枯れ向日葵3種(菊科)

芭蕉の枯葉(芭蕉科)

薔薇2種(薔薇科)

木苺(薔薇科)

花器 陶花器(近藤豊作)

日本いけばな芸術展出品作

3人合作

枯れヒマワリと呼ばれるけれど、無数の実りが詰まったその顔は艶やかで美しい。その美しさを知っている栽培家によって種が欠けてしまわぬように大切に梱包され、乾いた茎には添え木までされている。

そういえば、3月の流展で私がいけた桜はとても大きな枝で、束を解くと数百箇所的小枝が丁寧に紐で絞られていた。気の遠くなるような作業だ。この老桜をどれほど大切にしていたのだろうと想像しながらいけていたら、いつのまにか桜の立花を立て終えていた。

いける花を届けてくれた人のことを思うことで、その花への思いはより深くなる。いけばなは外見的には花と器の世界だが、そこには多くの人の思いが加わっているのだ。

いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2023年  
1月号  
No. 715

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元





## 12月の薔薇と若松

△表紙の花▽ 櫻子

花材 若松の脇枝（松科）

薔薇（薔薇科）

オンシジウム（蘭科）

花器 陶花瓶（トルコ）

京都おくだバラ園からは冬にもいろんなバラが届けられた。返り咲きや四季咲きのバラ。見事な花を咲かせている。香りのよい赤バラには1本の茎に4〜5輪も大輪の花を咲かせているのに、しなやかで折れる事はない。クリスマスから新年にかけて華やかにエレガントに咲いてくれた。





バラの実と薔薇

△ 3 頁の花 ▽ 櫻子

花材 薔薇の実 (薔薇科)

薔薇数種 (薔薇科)

花器 陶花瓶

バラ園から届いたバラはつる性のものが多い。バラの実にからませながら少しこちらを向いて微笑んでくれる様だ。





## 蘭の実

△3頁の花▽ 櫻子

花材 熨斗蘭(蘭科)

喇叭水仙(彼岸花科)

スイートピー(豆科)

花器 ドイツ製ガラス花器

珍しい蘭の実を葉とともにいただいた。ノシランだと思う。ノシランはキジカクシ科ジャノヒゲ属の多年草で暖地に分布する。ジャノヒゲと同じく庭の下草にされるそう。緑色の実は濃い青色に熟す。

球根のまま売られていた可愛いラップスイセンには「テタテート」という名前がついていた。フランス語 *tête à tête* (頭と頭) は頭を寄せあつてないしよ話をすることを言う。

蘭の実に合わせて小さくいけると、話し声が聞こえてきそう





可憐な風情

△2頁の花▽ 櫻子

スカビオサ (松虫草科)  
チューリップ (百合科)

マイセン花瓶

スカビオサは葉の無い場合が多いが、花弁が複雑で微妙な色合いがあり、細い茎は針金のよう。たとえ葉を添えなくても十分に綺麗で瑞々しい。華奢な花器にいったなら、それだけで満足してしまう花だけど、作例ではチューリップを添えた。







こころはずむ季節

△3頁の花▽ 桜子

連翹(木犀科)

チューリップ3種(百合科)

レモンリーフ(躑躅科)

陶花器(宮下善爾作)

春うらら。そんな言葉がピッタリのいけばなだ。いけたのは2月の寒い頃で、いけた花に一足早い春の温もりをもらおう日々だった。毎朝いけた花の水を足すのだが、花がよくもつ時季でもあり、「今日も元気でいてくれてありがとう」と声をかける。花も「にこつ」と応えてくれる。今日も頑張ろうという気持ちになる。

レンギョウは立てるよりも前へ出るようにいけることで花色が重なってくれる。チューリップは深めに挿して葉をシャキッと見せたい。レモンリーフで繁みを足した。





ニンジンとエンドウ豆の花

△5頁の花▽ 櫻子

ダウカスターラ (芹科)  
 チューリップ (百合科)  
 エンドウ豆 (豆科)

ガラス花器 (鈴木玄太作)

ポルトガルに咲く野生のニンジン  
 の花、ダウカスターラ。エン  
 ジン色でフラックレースフラ  
 ワーとも呼ばれる。しっかりし  
 た軸のものを3本買い求めた  
 が、それぞれに花の色も咲き方  
 も違い素朴で優しい。

エンドウ豆も花が咲きながら  
 も次々にサヤができて、次の日  
 にはぐんぐんツルも茎も力強く  
 伸びてくる。野菜の花はたくま  
 しい。

ガラスの器に足元をクロスさ  
 せながらつけてゆく。八重咲き  
 のチューリップで春の色を添え  
 た。





たいせつに扱って

△2頁の花▽ 櫻子

山吹(薔薇科)

芍薬(牡丹科)

都忘れ(菊科)

陶花器(清水保孝作)

山吹と芍薬、この二種を満開に咲いているタイミングでいける事は中々無いと思う。

今年の春は暖かい日も多くて、いつもは固い蕾の芍薬がふつくと手まりの様な姿を見せてくれた。

燃料や光熱費の値上がりで、去年の冬は木や草花が中々育たなくて出荷出来ないと聞いていただけに、桃や桜がいつもの時期にいつもの様な姿で出て来てくれた事は本当に有り難かった。

大切に扱っていききたいと感じている。





優しく軽やかに

△ 4 頁の花 ▽ 櫻子

デルフイニウム (金鳳花科)

アンズリウム (里芋科)

ミリオクラダス (百合科)

トルコブルー陶花器

淡い水色のデルフニウムを優しく軽やかに見せたくて、緑と淡いピンクのアンズリウムで低く囲い、ミリオクラダスで両者を繋いだ。緑色のアンズリウムがさりげなく重要な脇役になってくれる。





ライラックの季節

△5頁の花▽ 櫻子

ライラック (木犀科)

アマリリス (彼岸花科)

ガラス花瓶 (コスタボダ)

海外のニュース番組を録画して、夕食の用意をしながら見るのがほっとするひとときだ。5月19日の国際報道で、ウクライナで満開のライラックが見頃を迎え数千人のキーウ市民に休息を与えているとあった。ライラックは色も香りも素敵な花で人に安らぎを与えてくれると思う。

平和の象徴のような香り高い花。早く戦争が終結する事を願う。



いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2023年  
7月号  
No. 721

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## 花火のような

△表紙の花▽ 櫻子

蚊帳吊草（蚊帳吊草科）

紫陽花（紫陽花科）

額紫陽花（〃）

「墨田の花火」他

手付ガラス花瓶

倉敷の岡部先生から、時々家で育てたお花をいただくのが楽しみに一つになつている。

萎れない様に丁寧に水を当てる。袋に入れて持ち帰らせてくださる。6月は色んな紫陽花や山野草を頂戴した。

オタクサアジサイ、スミダノハナビ、ダンスパーティー、ウズアジサイ、ガクアジサイ、ヤマアジサイと名前が添えてある。全部アジサイ。一番きれいな花を切ってくださいに違いないと思う。

早速撮影させていただいた。

夏の夜空に打ち上げられる花火のようなカヤツリグサと名前に花火がつくアジサイ。





## テッセンの実

△12頁の花▽ 櫻子

ベル鉄線てつせん（金鳳花科きんぼうけ）

鉄線の実てつせん（ ）

京鹿の子きんがのこ（薔薇科ばいけ）

陶花瓶

不思議な糸の玉のようなものはテッセンの実で、花のあとにできる多くの花柱が伸びた姿だ。このあとしばらくすると花柱の一本一本が綿毛で覆われて毛玉のようになる。それぞれの付け根には果実（瘦果そうか）があり、いづれ乾燥すると風に乗って飛んで行く。

テッセンの花がこんな実に変化することに最初驚いたが、どんな花でも、可愛い新芽の姿や不思議な実の形を知ること、その花とのつながりが強くなる気がする。できるだけ外へ出て、植物のいろんな姿に触れたいと思う。





いけばな  
桑原専慶流

# テキスト

2023年  
8月号  
No.722

編集発行 京都市中京区六角 烏丸西入 桑原専慶流家元



## アーティチョーク

△表紙の花▽ 櫻子

グラジオラス(菖蒲科)

アーティチョーク(菊科)

瑠璃玉薊(菊科)

金彩ガラス花器

(ウルリカ作)

アーティチョークは古くから栽培され、古代のエジプト、ギリシャ、ローマ時代にすでに食用や薬用として利用されていた。

モロッコでいけばな展のため花材採集した時も野生のアーティチョークが沢山道沿いに生えていたが葉先や茎、苞にチクチクする小さなトゲがあり、とても手こずったのを覚えている。切つてすぐ水揚げしても萎れてしまい短くしないと生けられなかった。

そんな事を思い出しながら、花屋さんで買ったアーティチョークを長く生けている。野生の強靱さは無いけれど、立ちあがる薄紫色の花が繊細で美しい。大きなタンポポのよう。同じキク科のルリタマアザミを添えて色の濃淡でグラジオラスの色を引き立てた。





軽く涼しく

△2頁の花▽ 櫻子

デンファレ・白色(蘭科)

蘭「さくら」(蘭科)

胡蝶蘭・オレンジ色(蘭科)

雪柳(薔薇科)

ガラス花器(ヨーラン作)

ガラスのかたまりの様な重い  
ガラス器。6キロの重さなので  
しっかり持たないとすべり落と  
してしまいそうになる。

スウェーデンのコスタボタか  
らよく持って帰って来れたなど  
花をいける度に感心する。

そんな器でも花は軽やかに飾  
りたい。

ユキヤナギを折らない様に慎  
重にためてランの花に添わせて  
垂れ下げて、空間を作りながら  
軽く軽くしなやかに。

ガラス器の中に茎を見せない  
事も涼しく感じる要素になると  
思う。





## 夏の収穫

△ 3頁の花▽ 櫻子

鷹の羽薄たかのはすずき (稲科)

粟 (稲科)

透かし百合 (百合科)

ズッキーニ (瓜科)

アケビ手提げ籠

今年の夏も厳しい暑さだったが、旬の果物や野菜は沢山売られていて毎日煮物、漬物、炒め物、サラダ、ナムルなどを作っては食べていたのが夏バテにもならず健康に暮らす事が出来た。

お弟子さんから畑で育てた巨大なズッキーニをいただいたので、アワの若い穂とアケビ籠に取り合わせた。昔はこのアケビ籠で錦市場に買い物に通っていた事を思い出す。今は荷物が多くてリュックに代わったが、それでもこの籠を見ると沢山の花を盛り込みたくなる。

アワ、スカシユリ、ズッキーニ (入らない!)、重く見えてはいけなくてタカノハススキをいけて。





## 女郎花

△5頁の花▽ 櫻子

おみなえし  
女郎花(女郎花科)

スモークグラス(稲科)

薔薇数種(薔薇科)

陶花瓶(竹内眞三郎作)

初秋の明るさをいち早く感じさせてくれるオミナエシ。敗醤という別名(生薬名)があるのは、花が古くなると醤油が腐ったような匂いが出るからだ。でもそんなことはお構いなしに、いつも秋にはオミナエシを楽しみに待っている。

① 出れる時に気をつける事は

飾ってあげる事。  
飾ってあげる事。

② 水をこまめに替える事

③ 長くて軸の太いものを選べば、1、2本でも存在感があるので少ない本数で他の花と取り合わせる。

絶滅危惧種にも指定された花なので、今手に入るものは殆どが栽培種だが、秋の七草として長く飾ってあげたい。

バラ農園で咲きはじめて夏バラと合わせて。





深紅しんくのバラ

△3頁の花▽ 櫻子

榛はしばみ (樺かばの木科)

薔薇ばら (薔薇科)

嵯峨菊さかぎく (菊科)

陶花瓶

いい赤色だ。美しいバラは一本でも様になる。客間のテーブル中央に一輪挿しにするだけで、部屋の空気が生き生きしてくる。上下に切り分けて、下の葉も生かすようにしている。

床の間や壁際の棚の上なら、他の枝や花をとり合わせて伸びやかに。その時季の花材を一緒にいけることで季節を感じる花になるよう心がけている。

一輪の深紅のバラを主役にして、ハシバミと白いサガギクを加えると、秋らしい表情を見せてくれた。





意外な組み合わせ

△ 4頁の花▽ 櫻子

丁字草(夾竹桃科)

五色唐辛子(茄子科)

ケローネ・スピードリオン

(胡麻の葉草科)

陶花瓶(八木一夫作)

今年夏は夏の猛暑の為花材が高騰して種類も少なかった。9月後半に入ってきたきれいな糸菊や薄が出荷されるようになり、どれだけ生産者の方々が大変な夏を乗り越えられたのだろうと思う。

少ない花でも目を凝らして何か珍しいものがないかと探し思索した。五色トウガラシもカメレオンと言う名前で売られているのは今まで知らずにいた。ケローネ・スピードリオンはリンドウによく似ているが、全く違って花が次々咲いてくる。どちらも暑さに平気で逞しそうだった。

少し黄葉したチョウジソウと合わせユニークな八木一夫さんの器に。





香りの樹 櫻子

メラレウカ (フトモモ科)

薔薇の実 (薔薇科)

糸菊 (菊科)

陶花瓶 (市川博一作)

オーストラリアの常緑樹、メラレウカは葉に爽やかな香りがありエッセンシャルオイルが採れるものもある。三重県のタナカ園芸では数十種を育て、日本でも育つ16種のメラレウカを販売している。今後は公園や家庭の庭でも馴染みになるかも。

黄金色の枝をオレンジ色の背景にいたらライムグリーンに変身した不思議な樹。爽やかな黄緑色は秋のキクとも相性がいい。黄色の他に赤く色付く品種もある。葉付のバラの実が季節感を深めてくれる。



タナカ園芸のホームページより

- ①レボリューションゴールド ②オータムファイヤー  
③メディカルティーツリー ④タイムハニーマータル





高砂百合の実 たかさごゆり 櫻子

丸葉の木 (満作科) まんさく

糸菊 (菊科)

高砂百合の実 (百合科)

陶花瓶

この長細い緑の実がタカサゴユリの実。細長い茎と細長い葉が見分けるポイント。一本に沢山の花が咲くので数個の実ができるが、おそろく産地で実の数を減らして育てているのだらう。軽やかな姿は秋の花と合わせやすい。台湾原産で「タカサゴ」は台湾の昔の呼び名だそう

だ。マルバノキは岐阜県、高知県、広島県に隔離分布する、氷河期残存種で日本固有の植物。マンサクに似た姿の赤い小花が秋に咲くのでベニマンサクの別名がある。丸い葉の色付きが目を楽しませてくれる。

器の餡色の釉薬がマルバノキの葉によく似合う。ピンクの菊が優しく重なる。





## シンフォリカルポス

櫻子

シンフォリカルポス(忍冬科)

ダリア2種(菊科)

木苺「構苺」(薔薇科)

陶角花瓶(フランス)

中々覚えられない名前だが、こんなに立派な実をいけたら絶対忘れないだろう。スイカズラ科と言うが似ているとは思えない。

北アメリカ原産でスノーベリーとも言ふ。白い実が多かったが、紫式部の実と間違ふような鮮やかなワインレッド色で実の粒も大きく長くしなやかだ。

今年ヒペリカムやウインターベリー(ウメモドキ)など日持ちがするきれいな枝の園芸種をいける機会が多かった。シンフォリカルポスも又鮮やかな洋花と取り合わせると良く似合う。赤白のダリアといけて、洋間の花として長く楽しんだ。





ネズミモチの実

櫻子

鼠糞ねずみふん（木犀科）

薔薇ばら（薔薇科）

アンティーク水差し

アメリカに住むドイツ人夫婦に戴いた水差しにネズミモチと赤いバラをいけた。口が小さく首も細いので多くはいけられないが、このくらいの量が丁度似合っている。

打ち出しによって繊細な装飾が施されている。四頭の羊が四方を向き、子羊と子供が戯れる場面も。美と豊かさ、平和を表しているのだろう。

「美」という漢字は「羊」と「大」でできている。古代中国では豊かさをもたらしてくれる大きな羊に感謝をこめて「美」の文字をつくった。現在の私たちも何を「美しい」と感じるか、固定概念にとらわれず、大らかな心で「感じる」ことを大切にしたい。

